

奇譚クラブ



新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

1974・7

THE KITAN CLUB

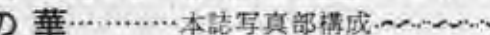
Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan

7

¥600

雑誌 2805-7

定価 1,000円 (送料別)



專 心

~~~~~女体緊縛

・本誌写真部構成

~~~~~ 緊縛女体の光と影 ..... 編集部構成 ~~~~~

·編集部構成

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|--------|--------|-------|-------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|-------|--------|-------|---------|---------|---------|-----------|--------|-------|---------|
| 美しき吊り | 苦痛か悦楽か | 逆一筋の魔術 | 愛撫の實め | 俯臨攝影 | 身動きでめ境 | 浮上した女体 | 汚辱の縄 | 高小手本縛り | 實地の陶器境 | 責めしマゾ女 | 前手縛り悶悦 | 柱の彼方の天国 | 荒縄の海老賣 | 美と縛の女神 | 可憐な置物 | 酒の肴になる | 妖蛇の洗礼 | 奔弄されるまに | 海老縛りの妙味 | 痛に繋がれた女 | 痛さをこらえる異国 | 賣の果の踏戯 | 痛打の一瞬 | ホステス裸人生 |
| 長井葉津子 | 前田真知子 | 中河恵子 | 三浦純子 | 前田真知子 | 中河恵子 | 中河恵子 | 金原泰加子 | 佐々木真弓 | 関谷富佐子 | 関谷富佐子 | 中河恵子 | 三浦純子 | 前田真知子 | 長井葉津子 | 長井葉津子 | 佐々木真弓 | 関谷富佐子 | 川路義雄子 | 長井葉津子 | シゲル | 前田真知子 | 関谷富佐子 | 佐々木真弓 | |

~~~~~

本誌愛読の女性の方々へ

一、本誌は昭和二十二年創刊以來、終始同じ奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、ここに三十九本の多きを数えるに至りました。その間、風俗雑誌のイデオニアとしての機多き辛酸を具に奮めながら、読者の皆様の温かよく耐えて今日に至り至十数年の厳しい星霜を経て、本誌は異色ある風俗文獻誌として生長し、まよひる多きが今や力作が春の方々の投稿により乱れ多くした傑作と作がの本誌の真の良稿に咲き乱れ、S・M文獻作と参りまして、このうちに三百以上にも高められててよりまし、内容の充実に實と清新化を記念したく、更に一層の作品に期待して原稿募集を企画しました。

一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば、どのようない傾向のものでも構いませんが、例を挙げれば、連作ものも始めとし、各種マゾエイズムに関する一般の同性愛、生切腹嗜好、種々女斗物、変装、珍奇・異常風俗、特異風俗習俗、變態風俗、奇聞・珍事など、古今東西を問わず異色文獻テクニクなどを取り上げて下さい。

▽内 容△

入選作品	第一席	二十萬円
入選作品	第二席	十萬円
入選作品	第三席	五萬円
入選作品	第四席	三萬円
入選作品	第五席	二萬円
佳作優秀作品		一萬円
選外佳作作品		五千円

10 15 10 5 3 1 1  
萬 萬 萬 萬 萬 萬 萬

▽賞金△

~~~~~

美しき倒錯の花園

塚本鉄三・撮影

胡座の麗人

△前田真知子▽





昭和四十九年 七月号目次

△第二十八卷 第七号
△通刊第三一七号△

| | | | |
|-------------------------|---------------|-------|-------|
| フォト「苦しみの中の楽しみ」 | △西条紀代△ | 本村 勉 | (29) |
| 「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ | | | |
| 『愛玩用女性の名器探検』 | △藤田明子の巻△ | 塚本 鉄三 | (30) |
| 連載小説『大噴火』 | △第六十九回△ | 千葉 青鬼 | (64) |
| 連載・Mグループ作品『女の虜囚』 | (5) | 佐治 麻造 | (72) |
| 体験告白「私の飼育したトモ子」 | | 新丸 清 | (90) |
| 連載時代S小説『紫蘭の門』 | | 風流極道軒 | (94) |
| 随想「美女アヌス責めの構想と実験」 | | 後野 満 | (111) |
| 手記『幻の須磨の女』麗子を訪ねて | | 紫 四季生 | (114) |
| M女通信『密室の中での妄想』 | | 高村 浩子 | (120) |
| サスペンス・Mミステリー『床の上の壺』 | | 浅羽やすし | (126) |
| 8mmムービー紹介——シナリオ風採録 | | | |
| ポルノSM「鞭の陶酔」 | (無声) | 中宮 栄 | (142) |
| 手記「「まりこ」の為のイメージ画」 | | 須坂 旭 | (147) |
| △恵子の近況お知らせと思ひ出△ | | | |
| 告白『夕暮れに泣けてくる私』 | | 中河 恵子 | (150) |
| 連載・M派交友録(52)『気違い男』 | | 鬼山 絢策 | (158) |
| △夫婦ブレイの告白△ | | | |
| 『愛妻教育』 | (三人の複数プレイ体験記) | 早坂 信治 | (172) |
| 「S研」レポート「タベリ会」ブレイ会「顛末記」 | | | |
| 「三浦純子夫人を借用す」 | | 塚本 鉄三 | (188) |
| 読者通信 | | 編集部選 | (258) |

カラー・フォト・セクション (十一態)

藤田明子 前田真知子 矢島靖子 藤田明子
 深田菊子 矢島靖子 高村浩子 苗木陽子
 前田真知子 笠井奈保子 藤田明子

胡座の麗人・縄束のなかにて……前田真知子
 片足吊りの艶姿……深田 菊子
 陶醉のひとつとき……笠井奈保子
 菱縄地獄 マゾに耽溺の頃……中河 恵子
 棒責めの悦虐 美しきマゾの回想……三浦 純子
 S研の人身御供……藤田 明子
 メス犬の嫉戯……南 加津子
 可憐な妊孕美……関谷富佐子
 ムチ打ちの果て……山原 清子
 足舐めプレイ……左近麻里子
 浴室荒縄縛り……矢島 靖子
 哀愁の女性……高村 浩子
 衆人環視……花坂 道子
 孤独の妄想……佐々木真弓
 寂しさを噛みしめる……

イメージギャラリー ◎「可愛い女」岡たかし(76) ◎

「室内スキー」岡たかし(83) ◎「可愛さあまって」岡たかし(98) ◎「両手に花の素浪人」岡たかし(105) ◎「浴後の奉仕」岡たかし(131) ◎「白豚の悦鳴」岡たかし(136) ◎「悩殺の足」岡たかし(161) ◎「絹川文代様への夢想」岡たかし(167)

目次フォト……深田菊子・前田真知子

奇 ク サ ロ ン (216)

夫婦プレイと奇ク……藤田 明子
 ああ恥美なるSM……山田 裕治
 論評「疑似SMを告発する」安貞名太郎
 忠告的告白「おしめカパー」比留間無人
 裏にきた美しい女性の話……原 カオル
 手記「ぼくの女性下着崇拜」比留間無人
 排尿の羞恥……大牟田 明
 奇クと共二十一年……窪田 貴志
 「S研」に会を望む便りと返事……長谷田 謙二
 「南加津子」さんの妊婦……北斗 七星
 フォトを見て……甲斐 千恵子
 「女の生首」憧れ……見たかっ藤田明子さんの流腸排泄シーン
 五月号のルポより……美しき望月百合子さん！
 マゾ通信「この頃私変なの」南 加津子
 張形考「ディルド」……村田恭子さんに寄せて
 旅でひろったマゾシーン……秋元 喜
 タイルを染めた滝……丸木戸 侯

S研ニュース
 忙しさも楽しさのなかの……塚本 鉄三
 わが家の愛の献立(コプロ向)……高見かず子
 「おひとつかが？」……平山 連流
 矢島靖子嬢のお尻に想う……田島 甲一
 流腸とアヌス責め……須磨の黒崎麗子さんへ物申す
 手記「寒空の中の三時間」……陽子ファン、性癖の女……豊田 武志
 体験「通信」……サロンの通信……竹内 君子
 ゴムファン、ゴム責めファンの方々へ……年上の女への憧れ……佐度 真曾
 S M両面性を具える男の告白……奇クサロン論壇
 S Mに於ける写真の愉悅感……乃美 対造
 素晴しき告白……苗木さんの「輪姦願望」……河西 逸雄
 編集部の王様……流腸器の王様！……編 集 部
 二百CC流腸器讃歌……竹迫 誠也





陶醉のひととき

△笠井奈保子▽

菱縄地獄

△中河恵子▽



マゾに耽溺の頃

＜中河恵子＞



S 研 の 人 身 御 供

＜三 浦 純 子＞





メス犬の痴戯

＜藤田明子＞





棒責めの悦虐

＜中 河 恵 子＞



可憐な妊孕美

＜南 加 津 子＞



ムチ打ちの果て



＜関谷富佐子＞





足舐めプレイ

＜山原清子＞



浴室荒縄縛り



＜山原清子＞



哀愁の女性

△左近麻里子▽



衆人環視

△矢島靖子▽





片足吊りの艶姿

＜深田菊子＞

孤独の妄想

△高村浩子▽

美しきマゾの回想

＜中河恵子＞







縄束のなかにて

△前田真知子▽



寂しさを噛みしめる

△高村浩子▽



裸身の羞らい

＜花坂道子＞



密室での恐怖

△佐々木真弓▽





















— 苦しみの中の楽しみ —

街を歩いていると、どこにでも、ふと見かける平凡な娘の肉体の中に、マゾの虫が巣喰っていて、それが育てようによっては、幼虫から蛹、成虫へと順次成長してゆくものらしい。喫茶店のウェイトレスをしていたときには、そんな世界を少しも知らなかっただろうに、ひとたび、その絢爛たる洗礼を受けてからは、与えられる苦しみの中からは、にじみ出てくる楽しみを覚えてしまった可憐

モデル……西条紀代……

な娘なのだ。

何故、自分が縛られるのか、わからなかったものが、全裸にされて縄で縛られてみると、そこに、何ともいえない本能的な女生きる喜び、快さを感じたのである。とても羞かしくて、肉体的には苦しい筈のこの行為が、とても楽しく感じられてきたのである。これは、なんという変わった行為なのだろうか。

(本村 勉・記)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

愛^{あい}玩^{がん}用^{よう}女^{じょ}性^{せい}の名^{めい}器^き探^{たん}険^{けん}

△藤田明子の特殊のM体質を暴く▽

塚^{つか}本^{もと}鉄^{てつ}三^{ぞう}

☆☆ケモノ・スタイル☆☆

藤田明子の鼻にかかった甘い声を聞くと、私の心も体も、ぐいと引きつけられるように感じた。あの名器の妙なる調べが、思い出されて下半身が異常なまでに充実してきた。磯ギンチャクのようなアヌスの収縮が目に見えて、それにオーバードライブして蚯蚓千匹の名器の存在が私の上に大きくのしかかってきた。女の裸身を縛っていじめるということがこれ程までに男と女の心と体とを燃えあがらせてしまうのか、それが私には不思議だった。



「この前は、二の腕に縄の痕が凄く残っていた、それが御主人に見つかったんだってね。電話で聞きましたけど、困ったでしょう?」
 「困ったどころじゃありませんわ。弁解するのに、口実がみつかりませんもの」
 「そりゃそうでしょうね。深窓の麗人の腕に縄目の痕が残っているなんて、御主人、きつと、びっくりされたでしょう。それでネ、今日は、縄で縛ったアトの残らないように、ホラ、こんな柔らかい物で、両方の手首だけを括って、自由を奪ってしまいますよ」
 私は彼女の手首を掴んで捻じまげる。

「あっ！」

彼女は軽い抵抗を示した。

私は素早く、彼女の両の手首をストッキングで後手に縛ってしまった。

「縛ることが、好きなのね」

彼女は願りながら、今更のように言う。

「そうだけど、いやかい？」

「いやじゃないけど、いつも、こんなに縛られてばかりじゃ、恥かしいわ」

「この前とで、今日は、これで縛るのも二度目だろう。大部、慣れたんじゃないかな」

うしろへ回った手首から肘、それに肉のよくついた二の腕にかけて、ふてぶてしい程、白く輝いていて縄目のアトなんて、少しも残っていない。それはそうだろう。あの日から数えて一月半も経っているのだから、御主人に見つかったという縄目のアトが今の今まで残っている筈はない。

「こんな、裸にされて、縛られたら、何度でも恥かしいわよ」

私は恥じらいに、身も世もあらず悶える彼女のあごを軽く持ち上げ、片方の手で、白い容器を示した。

「これは、何をするものか、わかるかい？」

「何なの、わかんないわ」

彼女は、首をかしげる。

「貴女のように、最高学府を出た、上品な奥さんには、わからんだろうな」

「だって、そんなの、見たことないもの」

「ホラ、こんなのが出てきたよ」

私は、口のネジをくるくると回し、容器の中にネジ込まれていた太いノズルを外側にし、彼女の目の前に見せつける。

「アラ、まあ！」

彼女は淫らな妄想に頬を染める。頬を染めたことを、私に見られたと気づいて、一層、顔が赤くなる。でも、手は縛られているから顔をかくすことも出来ない。

「これはね、携帯用ビデオといって、ねえ、あ

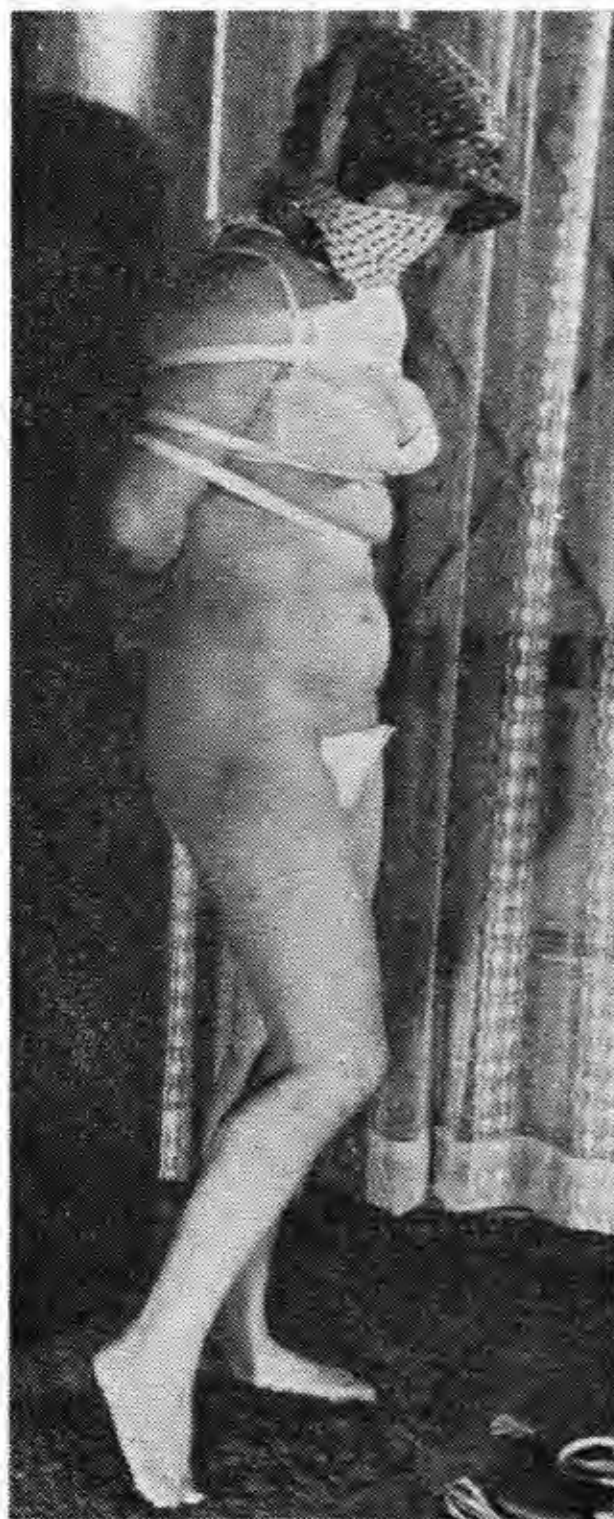
すこを洗滌する道具なんだよ」

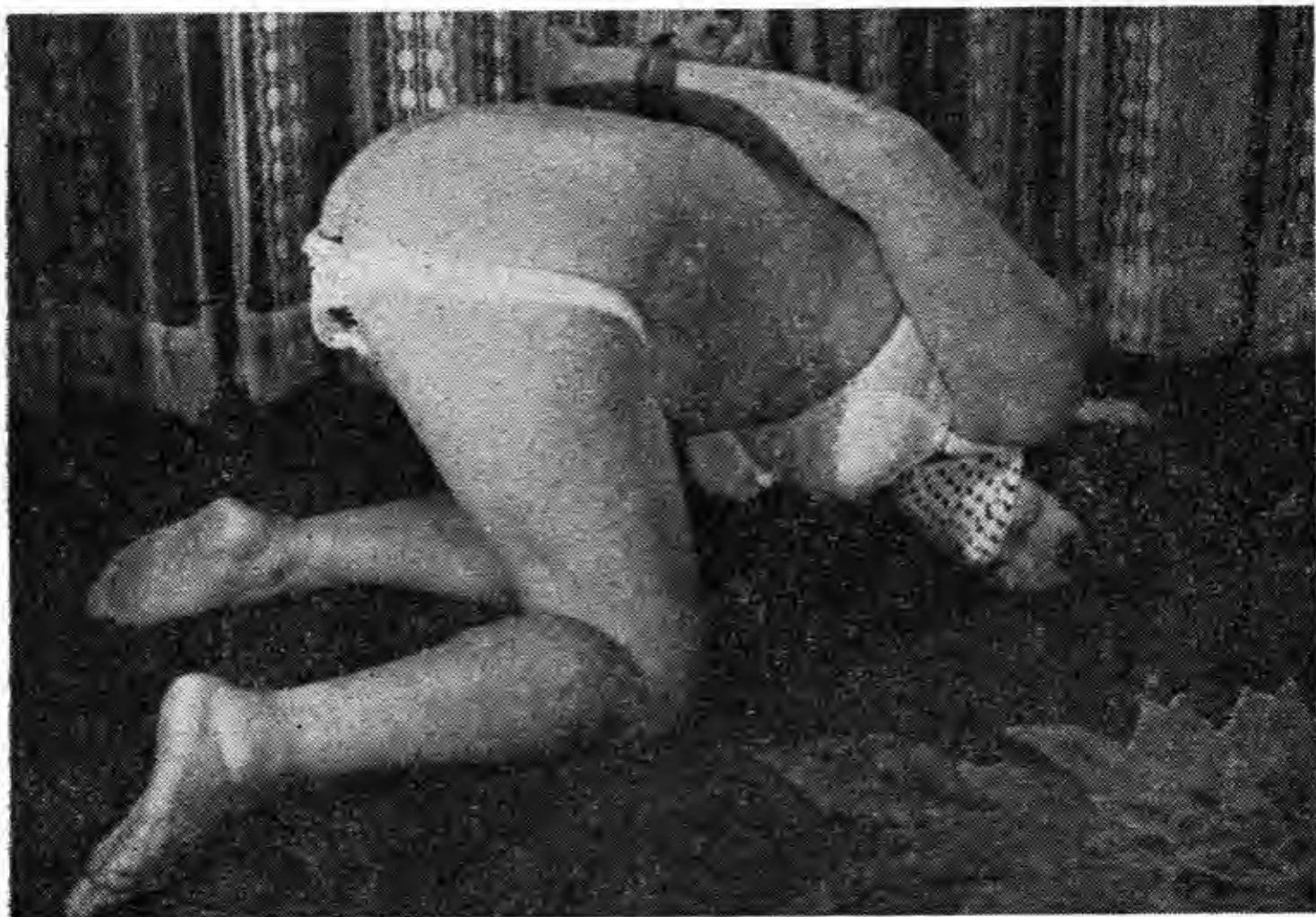
「ひやあ、そんなもので、私を責めたりしたら、いやよ。怖いもの」

「チエッ、こいつめ。使い方も何も言っていないのに、もう、ビデオで責められる気ではないかい？ たまげたよ」

「だってエ、目の前に出されるんですもの。それで責められるんかと思えますわ」

「実は、そうなんだ。この馬鹿でかいノズルで、キミのアヌスを責めたいと、この前から考えていたんだよ。ケモノのような四つん這いにさせておいてね、うしろから、このビデオで洗腸するんだよ。そして、そのあとで、ねえ、わかるだろう？」





「いやよ、そんな愛し方って……」

「ほほう、よく、わかってるじゃないか。じゃ、今言った、ケモノ・スタイルの四つ這いになってごらんなさい？」

「いやだったら、いやよ。」

「それに……」

「それに、何だね？」

「こんな後手に縛られてちゃ、四つ這いになんかなれないわ」

「それだったら、僕が手で介添えしてあげるから、おでこで前に支えてみるんだナ」

「そんなの、お尻が丸出しで、恥かしいわ」

「いいから、いいから、やってごらん」

私は彼女の背後へ回って白い双丘の間へ目をやったのである。彼女の燃える^{あか}ような、『愛の証し』を、私

はこの目で、そこに、はっきりと見たのであった。

ただ、後手に縛っただけで、私は彼女に対して、何一つ手を下して、責めらしい責めを加えていなかった。それなのに、この彼女の燃えようは、一体、どうしたことだろう。

かた肥りの明子の女体は、まるで筋肉のかたまりみたいに、膨らんだ白い肉塊だ。体を動かすたびに、ぶるん、ぶるんと躍動しているように見える。白豚こと苗木陽子の、あのかたぶくと肥え太った肉体とは、同じ肉づきがよいといっても性質が違っていた。

苗木陽子の方は、抱きしめるとマシマロのような、ふわふわとした柔らかさがあったが藤田明子の方は、両腕と胸の中で、むくむくと蠢く躍動感があった。

体質的なものか、或は食事の違いか、運動量の違いか、それは私にはわからなかったがその見た眼の相違が、やはり責めに対する反応にも、対照的な異点を現わしていた。

マゾに関して、燃えて燃えて、燃えつきてしまうまで、燃えなければ収まらない苗木陽子に対して、藤田明子の方は内奥に深く秘められたM性が理性と羞恥によって圧えつけられながらも、徐々に表面に、にじみ出てきて

いるといった風であった。

このむちむちとした良質の脂肪質の肉が、いっぱい詰まった爛熟した女体を一個の奴隷として、思いのままに、これから弄ぶことが出来るのだと思うと、私は目の下に彼女を眺めながら、胸がわくわくした。

ブラジャーとパンティは、わざと取らないでおいた。それがあるということで、彼女は僅かに、その布片によって心の安らぎを覚えていたかも知れないが、私にしたら、その最後の布片を、ずり下げたり、むしり取ったりする楽しみを残しているのだった。

この熟れきった女体を、奴隷として、ほしのままに自由に出来るという悦び、これはSMプレイに関心を持っている者でないと到底判らないだろう。

ここで私は、今日の藤田明子とのプレイをするに至るまでの経緯^{いきさつ}について、少し述べておく必要がある。

☆☆被虐の人間ドラマ☆☆

三月二十六日。

朝から曇り空で鬱陶しい日だった。

春闘第二波半日ストの日で、電車もバスも

一斉に停っていた。

実は、前々から苗木陽子と逢う約束をしていたのだが、このストのため来れなくなり、それでは延期しようと相談したのだが、そのあと、彼女は丁度、生理に入るということなので、やむを得ず四月になってから改めてやろうということに決めたのだった。

ストのせいか、幹線道路をはずれた、このあたりは、車の行き交いも、ぐっと少なくな。ただ電話のベルだけが、よく鳴った。

三浦純子夫妻から、今日は休みなので、と久しぶりに電話してくれた。ストでなければお邪魔したいのだが、という話から、SMプレイのことやS研のこと、それに早坂夫妻、渡部夫妻のことなどに話題が及んで、思わぬ長話になってしまった。

とにかく、次に外出の機会



があったら夫妻を混じえてSMプレイをやる
うと約束する。

「一度、純子を、とことんまで羞恥責めにし
て、マゾに仕込んで欲しい。どこまで純子が
塚本さんの責めに耐えうるか、それを自分の
目で、しかと確かめたいのです」

というのが、三浦敬一氏の希望だった。た
だ、幼稚園と小学校の子供があるので、二人
きりでの外出が中々思うようにならない、と
託^{かこ}っていた。それは渡部好美夫妻とて、同じ
悩みであることに違いはない。

「早坂郁子夫妻から、複数プレイについての
希望があるのだが、どうですか。やってみま
せんか」と、軽く打診してみる。

「純子が物凄く人見知りをするタチなので、
そんなベテランの方々と一緒に、うまくプレ
イをやるか、どうか、不安ですね。それま
でに、もう少し飼育して貰わなくては、勤ま
らないのと違いますか」と、消極的だ。

電話を切って外へ目をやった。

まだ四時だというのに、どんよりと曇って
いるので薄暗くて夕暮れのようなだ。

突然、電話のベルが鳴った。

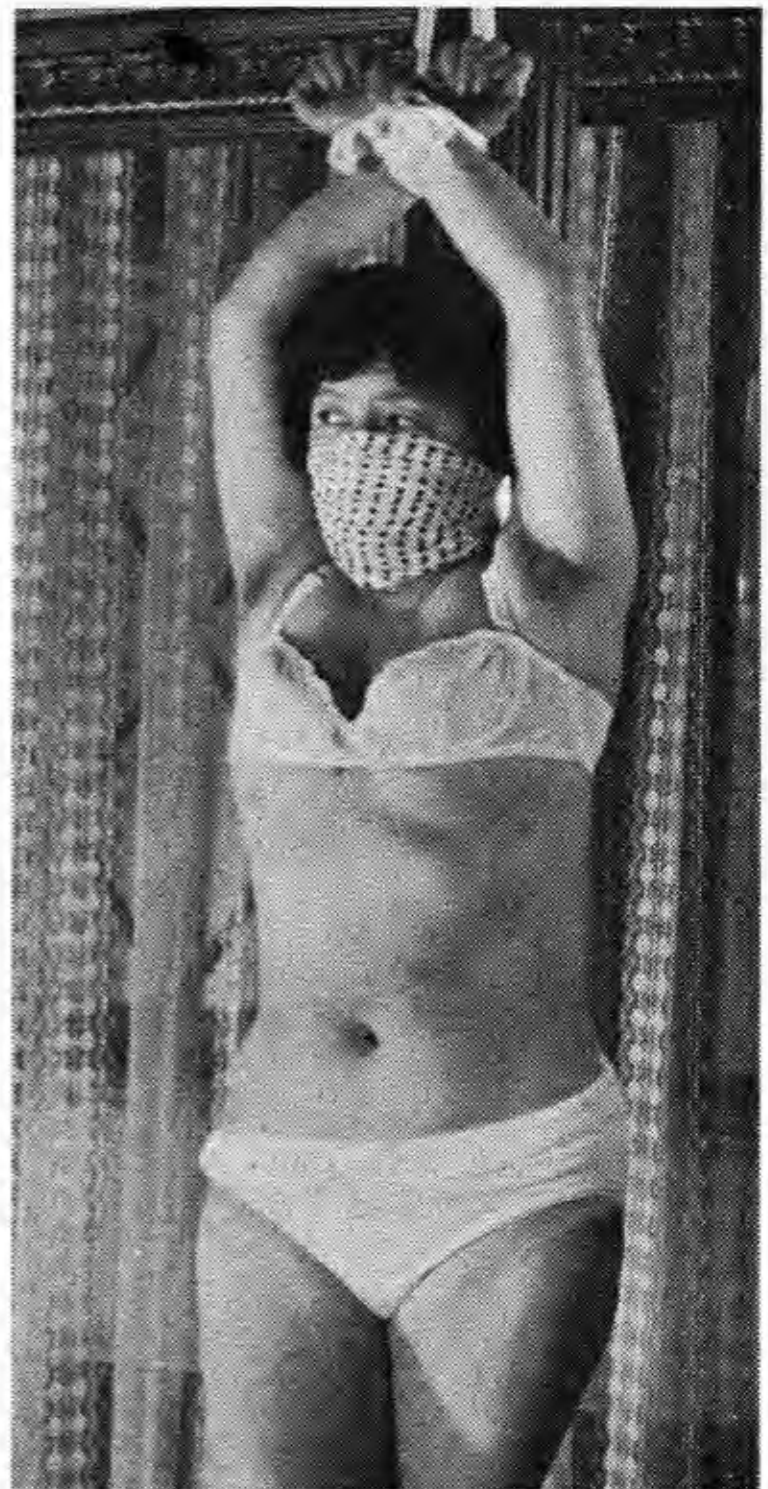
受話器をとると、ああ、一カ月半ぶりに、
藤田明子の甘ったるい、あの鼻にかかったセ

クシーな声が伝わってきた。

「ご無沙汰いたしました。お変わりございませ
んこと。私は、相変らず元気なんですけど、
お電話もせず、失礼申し上げました」

私は受話器を耳にしたまま、ふと、何の気
なしに窓外へ目をやった。丁度、今、雨が降
りだしたところと見えて、一粒、二粒と、屋
根瓦の上に、雨滴が黒いシミを作りだし、そ
れが、みるみるうちに、数を増したかと思う
と、忽ちのうちに、屋根一面が、びしょびし
よになりだした。

「もう電話は下さらないのかと思っていまし



たよ。あれから、もう四十五日も経っていま
すからね。懲々されたかと思っていました」
「どうもすみません。五月号を拝見して、自
分のことが出ているでしょ。びっくりしまし
たわ。こんなに早く出るなんて……。あのと
きのことが懐かしくって急に、お電話さし上
げましたの。今、主人は出張中ですし、子供
は春休みで、親戚の家へ泊りがけで遊びに行
っていますので、家からお電話してますの」
私は、彼女の声を聞いてみると、妖しく嗜
虐の血が騒ぎだした。

あの神韻漂渺たる名器の妙なる響きが、下



半身に、なんともいぬ共鳴をもたらしたのだ。声を聞いているだけで、こんな気分になるなんて、実際にどうかしている。

だが——。本当だから、仕方がない。

私は、恋しさで、胸がいっぱいになった。

「一週間に一回とか、言っておられたのに、長らく、ご連絡がありませんでしたね」

「ええ、それが……」

「それが、どうか、されたんですか？」

「電話では、ちょっと、申し上げにくいんですが、この前のとき、二の腕についた縄のアトが一週間もとれなかったんです。お風呂へ

入るときも、かくしかくし、してたんですけど、それを、とうとう、主人に見つけられてしまいました……。ええ、その場合は、なんとか、ゴマ化しておいたんですが、なんとなく気がとがめまして、それで……」

「ははん、そんなことがあったんですか。僕はまた、貴女が、責められること、嫌いになられたのかと、思っていました」

「そんなこと、ございませぬわ。でも、体に縄のアトが、あんなにつきますと、私、困っていますの。主人も、これからは、注意して、私の体を調べると思いますわ。ですか

ら責められたり、いじめられたりするのは構いませんが、縛られるのだけは困りますわ。

そんなことがあって、お電話も、よう差し上げなかったんですが、昨日、書店で五月号を拝見して、もう矢も楯もたまらずに……」

「お電話下さったって、わけですか。それでどうです？ ご感想は？」

「イヤ、もう恥かしくて、書店でページを開いたとき、顔が真っ赤になってしまって胸がドキドキしましたわ。血が頭にのぼって、このまま、心臓麻痺にでもなるんじゃないかと、心配したくらいですの。けれど、そのあとで、自分のこんなみじめな姿を、読者の皆さんに見られるのかと思うと、とても、たまらない気持ちになってしまいましたわ」

「そうですか。一度、お逢いして、その後のこと、ゆっくり、お伺いしたいものですナ」

「ええ、今、子供も春休みですし、主人も出張中で月末まで帰ってまいりませんから、明日あたりでしたら、私、結構ですわ」

「一泊でも、構いませんか？」

「はい、一泊ぐらいでしたら。あの、この前の綺麗な海、印象的でしたわ。私、海を見るの、大好きなんです。是非、今度も、あんな景色の良い所へ、連れて行って下さいね」



「それじゃ、志摩のパールラインへでも行ってみますか。それはそうと、この前にお逢いしたとき、S研のメンバーが出席してもいいって言っていましたが、他の人達と一緒に呼んでも、いいですか」

「私が？ そんなこと申しまして？ 貴方以外の人が見えるなんて、困りますわ。実は、最初に梅田三番街の喫茶店で貴方にお逢いしましたときも、好感が持てましたから、御一緒しましたのよ。私、そんな見ず知らずの人とだったら、自分がMになれるかどうか、とても自信ありませんわ。もし、そうだったと

したら、怖いと思いますの」

「そうですか。どうしても駄目ですか」

「ねえ、今度だけ、私の我儘をきいて。明日お逢いしたら、くわしく、お話しますわ」

案外、長話になってしまった。

待合わせの時間と場所をきめてから、電話を切った。外は既に本降りだった。

☆☆雨中のドライブ☆☆

三月二十七日——。

昨夜からの雨は降りやまず、今日も朝から

どしゃ降りだった。

東京は大雪だとラジオが報じていた。

三月も末、お彼岸も済んだというのに一体どうしたことなんだろう。

冷たい氷雨が、間断なく降り続いて一向に止みそうにもない。こちらから電話連絡出来るものなら今日のドライブは延期を申し込みたい位だった。ひょっとしたら、彼女から電話でも、と待っていたが、それもなかった。

約束の時間、一しきり激しく雨の降る中を藤田明子は約束の場所にちゃんと来ていた。

「やあ、お待たせしました」

私は彼女の姿を見つけて声を掛けた。彼女は待ち合わせているのが如何にも恥かしいというそぶりで、私に寄り添ってきた。

この女の、どこに、あの蚯蚓千匹の名器の由来が秘められているのだろうか——と、彼女の顔を見るなり、私は、そんなことを、ふと思った。で、じっと、顔を見つめた。

変な具合だ。全く。彼女と顔を合わすなりこんなことを考えるなんて——。

「私の顔に、何か、ついていましたか？」

彼女は、私が心の中で、そんなエッチなことを考えているなんて知る由もない。そこで私は、別のことを答えていた。

「ひどい降りですね。これじゃ、外へ出るのも大変だ。とにかく食事をしましょうか」

新阪急ホテルの八階までエレベーターで昇る。レストランは空いていて人影も至って、まばらだ。それはそうだろう。昼食にしてはまだ早い時刻だ。窓際に席をとって硝子窓越しに下を見る。雨に濡れた舗道がキラキラ光って傘をさして歩く人々が蟻の這うように、小さく見える。

「まあ、高いのね。高所恐怖症の人だったらこんなとこ、怖がるのじゃないかしら？」

「貴女は、どうですか」

「私は平気。飛行機でも怖くはないわ」

「この前の二月十一日、十二日みたいに、よいお天気だったら、いいのですが、この雨じゃ、ドライブしても面白くありませんね。どうです？　ここで食事をしてから、ホテルの部屋へ、しけ込んでみませんか？」

「あら、こんな昼日中からですか？　そんなの、いやですわ。私」

「昼といっても、雨が降ってて、こんなに暗いでしょう。なんだか、夜みたいじゃないですか。雨で、かえって落着きますよ」

「そうかしら？　でも、私、どこか郊外へつれて行って下さると思って、今日は楽しみに

して来ましたのよ。雨の中のドライブって、素敵じゃございませんこと。雨だと、車の運転は大変なんでしょうけれど……」

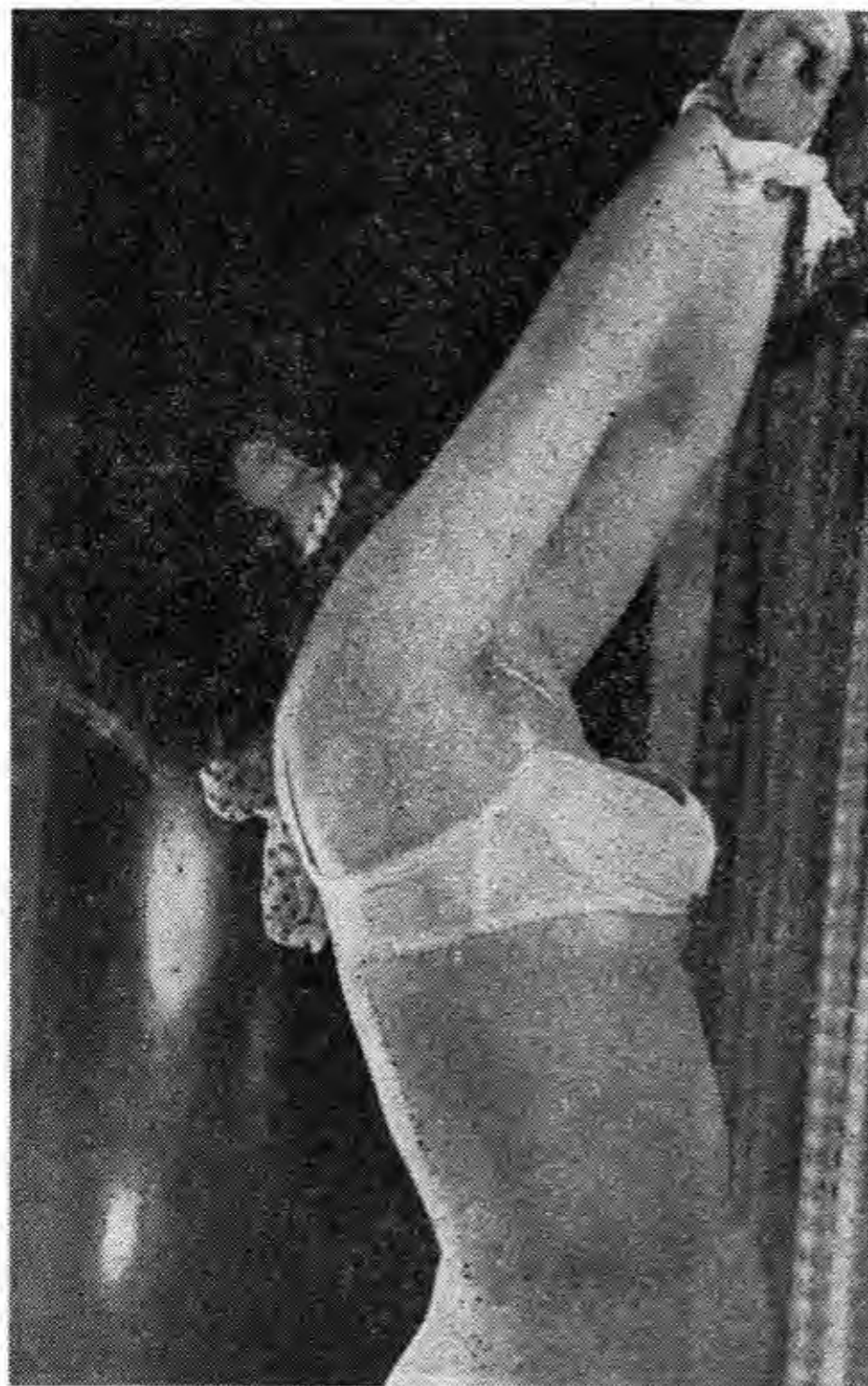
「降り初めは、スリッパに注意しなければいけません、今日のように早くから降っているときは、どうということはありませんね。でも、こんなに雨じゃ、途中で車から下りて景色を見ることが出来ませんよ」

「構いませんわ。行ったことのない景色のよ

い所を車の中から見るだけで、いいんです」

なんとか、このまま、遠出せずにホテルの部屋へ滑り込んで、明朝まで、しっばりと名器の探険をやりたいものだと思ったのだが、どうやら、彼女の方は、この全国的な気象条件の悪い中でも郊外へ出たいらしい。

食事をもって、地下三階の駐車場から螺旋状の通路を幾曲りもして地上へ出ると、途端に激しく雨滴がフロントガラスを叩く。



道路は混雑しているという程でもないが、やはり降雨中だからスピードが出せず、信号が赤になると長い車の列が続く。阪神高速道路を天王寺出口で降りて西名阪国道へと向った。始点のゲイトをくぐると、そこは最高制限時速八〇キロの快適な有料道路だ。

これで快晴だったら、どんなに気持がよいだろうにと思った。通行する車の数は、まばらだ。水しぶきを上げて最高速度制限いっばいのスピードで走った。忽ちにして、あっという間に大阪と奈良の境のトンネル二つを通過した。大和平野を越して天理市から名阪国道へ入ると、雨は益々激しさを加え、それにつづら折りの急坂の連続となった。

何のために、こんな豪雨の山道を走っているのか、私にもわからなかった。

途中、いくつものモーターが目に入った。しかし、藤田明子は、私が言葉をかけたとしても、とても承知しそうにない面構えをしていた。一旦、奴隷の身分に仕込んでしまったとしたら、どんなことでも易々として従う女であったとしても、平常の状態であったなら一筋縄ではいかないような感じだった。

私は、只、がむしゃらに、前へ前へと一直線に突き進んだ。高原地帯に入ると、道路は



概ね平坦に近く、カーブも少なかった。

伊賀上野通過、関にて伊勢街道へ入って、そこで給油。横なぐりの雨、更に強し。

このまま、志摩へ行っただとしても、途中で日が暮れて所詮、景色を見ることは愚か、よいホテルを見つけることも困難だと、彼女に言いよかせて、国道一号線へ引き返し、鈴鹿峠を越えて栗東から大津へと出た。

大津から京都の五条へバイパスする道路の左側に、尖塔の赤、青、黄の屋根が見えた。まるで西洋のお城のようなスマートな格好につられて思わずハンドルを左へ切った。

そのとき、新幹線が逢坂トンネルへ入るためか、どうか、地下に潜り、その上を陸橋で自分の車が通過したことに私が気がつかなかった。このモーターの傍らを、こんなに近く新幹線が通過していることを知っていたら、ここを選ぶことはなかったのだが――。

とにかく、雨中の連続走行に飽き果ててしまっていた私は、そのモーターの駐車場へと車を滑り込ませていた。

雨は、幾分小降りにはなっていたが、駐車場に屋根がなかったから、玄関へ入るまでに頭から洋服まで濡れ鼠になってしまった。

☆☆羞恥責めが好き☆☆

外観の豪華さにつられて中へ入り、カーペットを敷きつめた廊下、真鍮の手摺りの螺旋階段、噴水のあるガラス張りの内庭などを見ているうち、その王宮風の雰囲気に関わされて、つい、洋室を指定してしまった。

白のレースのカーテンで囲まれた回転式円型ベッドもデラックスだったし、化粧室、トイレ、浴室などが廊下を通じて別室になっていて、部屋も至って広がった。



私は部屋へ入るなり、もう、待ちきれなかった。彼女を風呂へも入れず、すぐさま、着ている洋服を脱がしにかかった。

「そんなにされなくても、自分で脱ぎますから、およしになって……」

彼女は私の手から逃れようとする。だが、私は彼女の脱衣を手伝うふりをして、二の腕や腋の下に手をやって、その感触を楽しむ。「擦ったいわ。私の裸は、この前のとき、外も内らも、すべて、ごらんになったんじゃ、ごさいませんか？」

「まだまだ、あんなもんじゃ、満足出来ませ

んよ。M女の秘密を探ぐるなんて、そう一回や二回で出来るものじゃありません」

「私、もう娘じゃないんですから、そんなにあからさまに素っ裸になってしまふなんて恥かしいですわ。それに、縛られるのは嫌いじゃないんですけど、体に縄目のアトがついたら、困ってしまうんです」

「今日は、その点、十分に考慮しています。腕や胸に縄目が残らないように、柔らかい紐を用いますし、主として両手の自由を奪うということに重点を置いてやりましょう」

私はナイロンのストッキングで、彼女の両の手首を括った。これだけで、両手の自由が完全に失われてしまって、あとは、もう、私の欲しいままに彼女の裸身を弄ぶことが出来るのだ。この前、ロープで高手小手に縛り上げて畳の上にくるがして、いろいろに責めたのだが、下敷きになった二の腕に縄が長い間喰い込んで、それが思わぬ皮下溢血を起して縄目のアトを作ってしまったのだ。

藤田明子の体質的なものもあったろう。血のにじんだような皮下の出血が、一週間以上も取れなかったというのだから、主人に内緒で、私とのプレイに参加している彼女としては大変に困ったことだろう。独身の女性とか



主人公認の女性であったなら、その点、大いに気が楽であるのだが――。

「どうだ。お尻にムチ打ちのアトがついたって、構わないだろう？ まさか、御主人に、お尻までは、見せないだろうからナ」

「ムチ打ちですって？ そんなのイヤ、お宥しになって。私、体に傷がつかましたら、言訳に困ってしまいますもの」

「だったら、この方なら、いいのだナ」

私は、さっと右手を伸ばして、パンティとお尻の間に、すべり込ませる。

「ああっ、いや、いやっ」

冷たいお尻だ。肉づきがよくて、むくむくと堅ぶとりの双つの膨らみが、私の掌のなかでピクピクと戦^{おの}きに慄えている。

私は右手に携帯用ビデオを持った。

「縛らないかわりに、これで、たっぷりと明子の秘密の場所を責めてやろう。頭を下げて

お尻を突き立てて、ケモノ・スタイルのワン・ポーズを取るんだ」

「そうですもの？」

「もっと、もっと、お尻を高く立てて――」

「ひやー、恥かしいわ。こんな格好」

「明子は犬なんだからね。このムチを、ホラシッポ代りにしてやろう」

「まあ、明子、奴隷じゃなくて、今から犬にされてしまうのね。哀れだわ」

「明子は、こんなにして、苛めてほしかったんだろう？ ねえ、そうだろう」

私はズボンを脱いでパンツ一つになると、彼女の背中に跨がった。私は右足を上げて彼女の横向きになった顔面に、ぴたりと足の裏をのせた。にちゃりとした感触！

「明子、足の指を舐めて、奴隷の誓いをするんだ。さあ、舐めないか」

彼女はプレイに興がのってくると、自分のことを、明子、明子――と言った。それで、私も、彼女のことを、「明子、明子」と呼びすてにするようになったのだが、それがまたその場の雰囲気**に**ぴったりするのだった。

彼女は、舌を伸ばして、私の足の裏をくすぐるように舐め、そして、次には唇を開いて中指の先を口に含んだ。私は自分の足を女に

舐めさせると、もう、それだけで、相手を奴隷の身分にさせたような気持ちになった。

そして、告白すれば、女に足を舐められると、異常なまでに私は興奮した。

右足の指を明子に舐めさせながら、私の左手は、彼女のお尻の上を這いまわっていた。パンティを手の甲でこするようにして、私は奥深く挿し込んでゆく。

陰微で、そして、生温かい湿地帯だった。

女体の馬の背に跨がって、その人間馬を私は御しているつもりだった。

足の指という汗と分泌物で塩からい餌を、明子の口に与えておいて、その奉仕によって彼女の体が、どのように反応するか、それを私は自分の指で確かめていた。

足の指から、指と指との間、そして足の裏に至るまで、すっかり舐めさせて、奴隷としての奉仕をさせ終えると、私は、くるりと方向を変えた。彼女の頭の方へ尻を向けた。

パンティを、くるりと捲くって、白いお尻を、まる出しにした。

相変らず左手をべとべとにしたまま、右手に持ったビデを、それに応援させた。

私の体重に圧されて彼女の上半身は、蛙を潰したように、へしゃがったが、逞しい肉づ

きのお尻だけは、つんと突っ立っていた。

私は顔を寄せて覗き込む。

見られていると気づいた彼女は、「いやいや」と、お尻を振る。

「こらっ、じっとしてないか。明子は、すっかり奴隷になってしまったんだから、これからは、僕の言うことは何でも、よく聞くん

だよ。わかったね」

「は、はい。それは、よくわかっていますんですが、そんなにされては、明子、もう、どうしても、じっとしておれなくて……」

冷たくて、大きいお尻が、もじもじする。

白い陶器のようになめらかで、そして冷たいのだ。私は、その陶器に、そっと頬をつ



てみる。ひんやりとした感触が快い。

それにひきかえ、湿地帯の方は燃えるように熱いのだ。

藤田明子は今や完全に「奴隷」の身分に転落してしまったのだ。虚飾の衣服をかなぐり捨てたように、この一時期だけは、普通の社会の生活を放棄してしまったのだ。

後手首をストッキングで括ってから、彼女は急速に、従順になった。と、いうよりも、自らその「奴隷」「ケ

モノ」の境地、人間性を放棄したムードに浸りたいと努力している風だった。少しでも早く、この夢のようなマゾの世界に遊びたかったのだろう。

私は、おっかぶせるように命令した。

「もっと、お尻を突っ立てて、両方の膝を十分に開くんだ。これじゃ、御主人様に、よく



見えないじゃないか」

「ああ、もう、これ以上、お尻は上げられません。御主人様が、明子の背中の上に、お乗りになっているんですもの。お許しになって。もう、重くって、潰れそうです」

そう言う彼女の声は、カーペットへ頬をびったりと押しつけられて、如何にも苦しそう

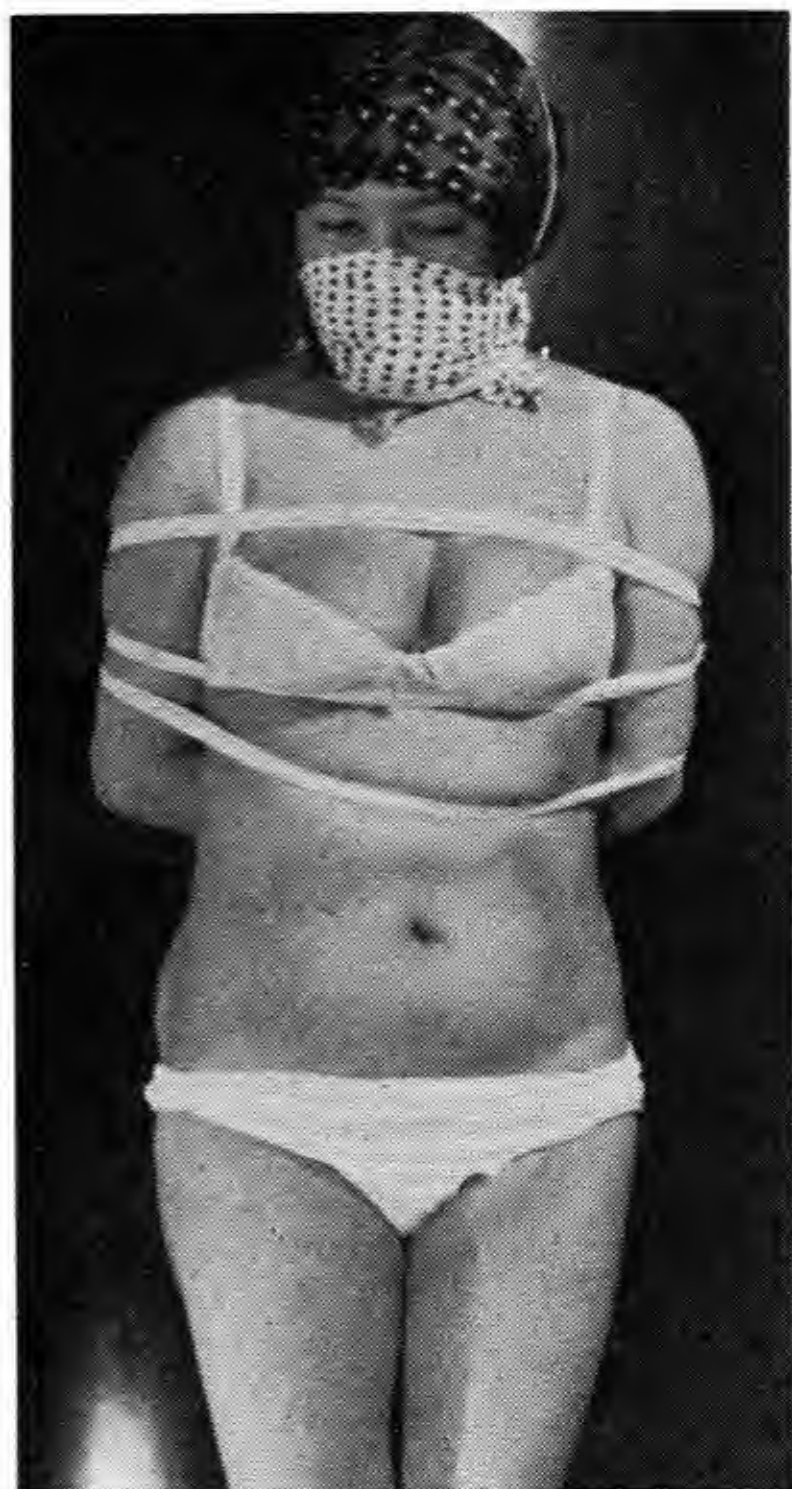
だが、怨みがましい響きは少しもなかった。

両膝を、にじるように開いている。私の体重をもろに受けながら、必死になって言われた通りに少しでもなるように努力しているのだ。何故だろうか。私の命令に従っているというよりも、自分の内なる本能の命に従っているという風に、私には見えた。

そうすることによって彼女のマゾの本能が、より満足したのだろう。表面は、私が命令したので仕方なしに従っていると

私は尻を浮かして覗き込む。

覗き込むばかりではない。鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。栗の花のような、五月の新緑の頃の木の芽の萌えるような、ねっとりとした香りが、私の鼻先に匂ってくる。



その色、その形、やはり名器だけのことはある。お尻の上の方から眺めるその風景。

それはまた、素晴らしい眺めだった。

私は、この前のとき、湯殿で浣腸したときのことを、ふっと思ひ出していた。

——ああ、あのときも、こんなポーズをさせたっけ——。

これこそ、四つ這いのケモノのポーズだ。

こうして、両手首をうしろで縛っているだけで、ケモノに変身した、この女は、もう逃げ出すことは出来ないのだ。私の命ずるがまま

に、自分の女体をさらけだして、恥かしい行為を演じなければならぬのだ。

僅かに、藤田明子なる奴隷が人間社会と関連のあるものを身にまとっているのは、ブラジャーと、太股のところまで、まくられた白いパンティだけだ。それをつけさせられていることで、尚一層、彼女の羞恥心がかり立てられている。

私は、すると、彼女の背から下りると、臀部の背後にまわった。

「ね、ねね、お願い。見ないで……」

明子のその哀願の言葉は、だが、私にとっては、「見てくれ」の暗示だった。

思いつき、両膝を開かせる。

双臀のふくらみを、左右に両手で押しひらいての具さな観察——。

うつ伏せになっている腹が、喘いで大きく波うっている。お臍の窩のくぼみが、斜光線を受けて、まるで洞のように、奥深く見えるのが極めてセクシーだ。

まさに爛熟しているといった感じだ。

このお尻も、お腹も、お臍も——。

花ならば満開の盛りといったところか。

頬をカーペットにつけて、横向きになった

藤田明子の顔を見た。

端麗な顔は、うっとり目細めて、如何にも気持よさそうに横たえているのだ。

私は、その美しい藤田明子の顔を眺めていると、このワンワン・ポーズのままに凌辱したい念に駆られた。これは、私の最もリビドを感じるスタイルなのだ。その強い誘惑は、危く、私を溺れ込ませようとした。

この皮下脂肪のたっぷりついた、いつもは何枚もの衣服や下着に、ぴったりと掩われて陽の目を見ない真っ白なお尻を、皮のムチによって思うさまにムチ打つことが出来ない

すれば、この逞しい双臀に挟まれた湿地帯の秘境を犯したいという念が熾烈に湧いてきても当然だった。

眺め、匂いを嗅ぎ、手で触り、器具を使いそして、女体をこのように燃え上らせ、悶えさせてしまった今となつては、私の取る手段は、その一手しかないように見えた。

私は、そのとき、ゆくりなくも、この藤田明子という「謎の女性」との、なれ初めのことを、なんとはなしに思い浮かべていた。

一方通行で、この私に電話連絡してくるとはいつても、何処の誰とも、定かにはわからぬ女性である。それが、今、こうして、ここに、私の意のままになる「奴隷」として、跪いているのだ。現実、今、この目の前にいる女性は、一体、誰なのだろうか。

主人も子供もあると言う、この女性は？
そう考えると、私は妖しい戦慄にも似た悪感を全身に感ずるのだった。

☆☆爛熟しきった女体☆☆

「さあ、両手を揃えて上へ挙げるんだ。縄目のアトも、ムチ打ちのアトもいけないうって言うんなら、こうしておいて、ネチネチと訊問

してやろう。この柔らかい晒の紐だったら、痕は残らないが、しかし、責めの方は、情容赦なくやるぞ。覚悟はいいな」

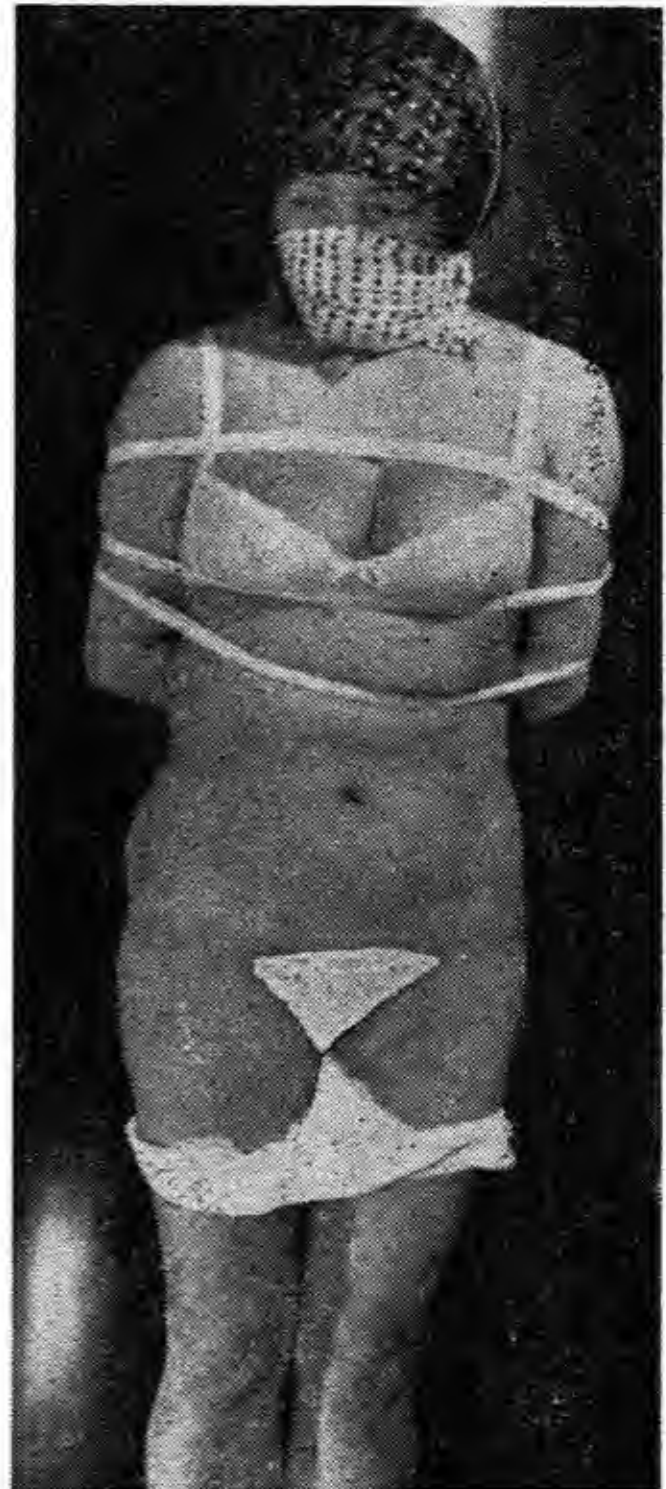
私は藤田明子の両の手首を交差させて、きっちり縛ると柱の上部に括りつけた。

腋の下から脇腹にかけて、いつもは衣服が幾重にも掩って隠している部分が、あからさまに、私の目に触れた。爛熟しきった女の盛りの香りが、ぶんぶん匂ってきた。

私はブラジャーに手をかけた。

「ねえ、それを取るのだけは許して……」

「なぜなんだ。この前は、すっかり見せてしまったじゃないか。見事に丸々と膨らんだボ



インだったと思うがナ」

「だってエ、子供を産んだ女のオッパイなんて、男の方には魅力ないでしょう」

「そんなことないよ。明子のポインなんか、ほら、こんなに大きくて、ブラジャーから、こぼれそうじゃないか」

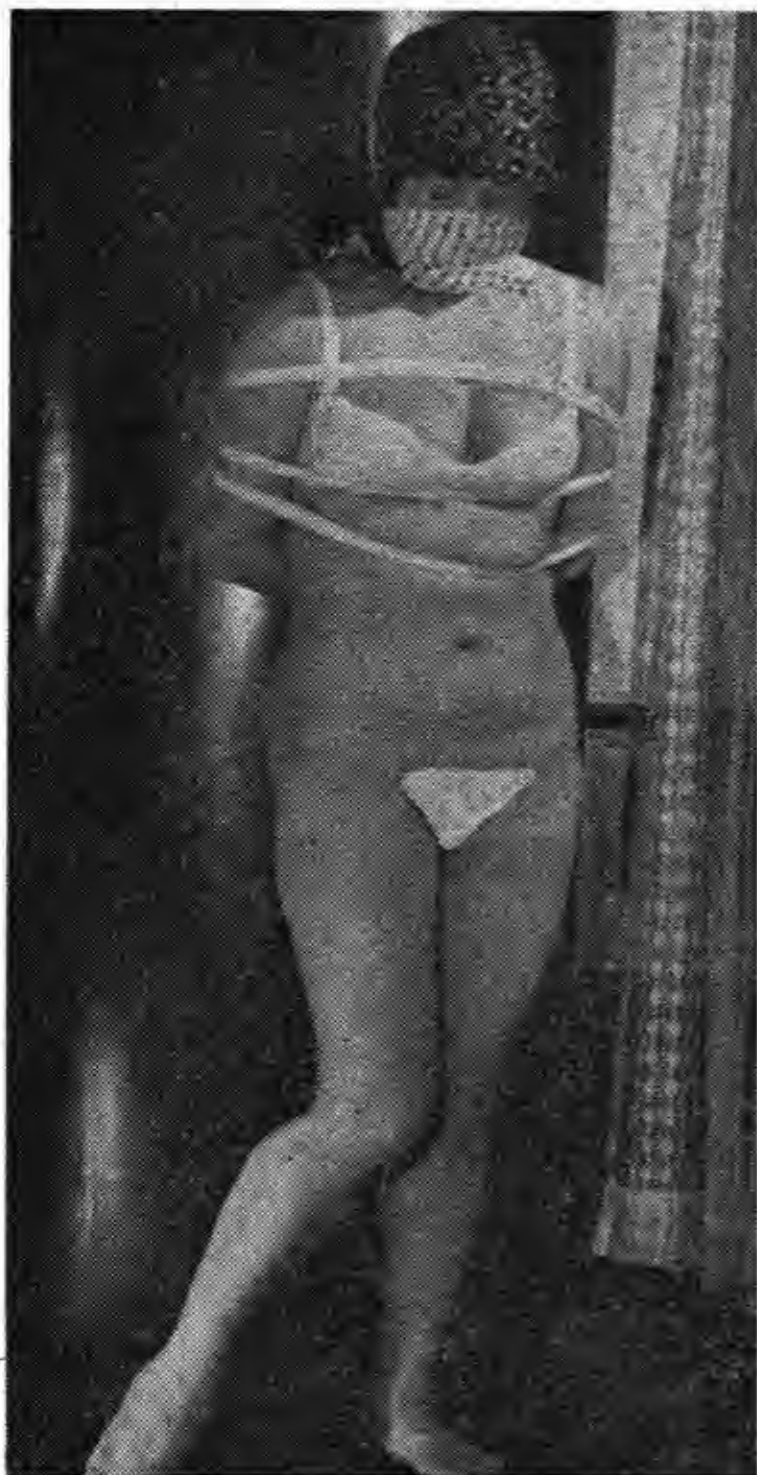
私は、ブラジャーの下から掌を潜り込ませて、豊饒な膨らみを、ぎゅっと握む。

「ああ、いやいや。許して……」

彼女は身をもんで悶える。

温かくて、しこしことした手ざわりだ。

なんという気持のよい、身も心も、とろけてしまいそうになる感触なんだろう。ぶよぶ



よとした柔らかさなんかではない。こう、肉のびっちり詰まった豊かさが、握りしめた掌の中から、あふれそうになるのだった。

揉まれて、如何に身悶えしたところで、両手を上に縛って挙げさせられているのだから逃げだそうにも、逃げることは出来ない。

お臍あたりの筋肉が、微妙な動きを見せて、くねっているのを見ると、涎が垂れそうになる。腋の下の黒いそよぎに、じっと目をやってみる。

「どう？ 電話で少し云ってたけど、五月号を読んでみて、どんな感想だった？」

「はい、お答えします。ですから、この手をはどいて下さい。肩の方がだるくなってきました。お願い、ほどいて……」

「それだったら、先に、五月号を読んだときの感想を言ってごらん。淑かな奥さんの明子さんが、どんなことを喋るか、僕は、それが聞きたいんだ」

「まあ、そんなこと、おっしゃっちゃ、明子は、申し上げられませんわ。書店で目にしましたのは、二十三日の土曜日でしたわ。すぐに、お電話しようと思ったんですけど、その日は主人が宅におりましたものですから、二

十六日に、やっと、お掛けしましたの」

「それで、どうでした？ 五月号を読んだときの感想は？」

私は彼女の裸身に、じろじろと、目をやって、意地悪く訊ねる。

「お電話で申し上げた通り、心臓が止まるかと思っただけ、びくくりしましたわ。体はかっかしてはいますのに、膝が、がくがく慄えていますのよ。自分の裸で縛られた写真が、あんなにも沢山、出ているんですもの。思わず、あたりを見わけてしまいましたわ。それに、文章でも、あんなに詳しく書いていらつしやるんですもの。明子、もう、恥かしくて、恥かしくて、顔が真っ赤になりました。でも、やっぱり、見たくって、とうとう一冊、買ってしまいましたわ」

彼女は、途端に饒舌になる。肩や腕が、だるいって言っていたのは、あれは嘘なのか。

「明子の住所がわかっていれば、雑誌、送ってあげたのにね」

「いやいや。主人には内緒なんですもの。そんな、雑誌、送ってなんか頂けませんわ」

「そうそう。旦那さんに、二の腕の縄のアトを見つけたらって？ この辺に残っていたの？ それとも、この辺かな」

私は、腕のつけ根から腋の下へ、ねとねとの指先を這わしてゆく。

「ああ、擦りたいから、やめて、お願い。縛られてから転がされて下敷きになった腕に、血のにじんだような縄のアトが残っていたんです。明子も鏡で映して、よくわかっていましたから、お風呂へ入るときも注意して見られないようにしていたんです。それが、寝室でパジャマに着換えるとき、チラッと主人に見られてしまったんです。」その腕、どうしたんだい。って聞かれたときは、本当に、ドキッとしましたわ。何かにかぶれて、かゆいものだから掻いたんだって、誤魔化しましたが、ひやひやでしたわ」

「それは、うまく言い逃れたもんだナ。旦那さんは、疑わなかったかい？」

「ええ、二、三日経ってましたし、まさか、縄で縛られたアトなんて、思っていなかったようですけど、明子にしたら、見つけられたときは、ああ、しまったと思いましたわ」

「今は、こんなに、すべすべして、何のアトカタも残っていないのにね。どう？　ここへ齒型でも、つけてやろうか」

私は彼女の二の腕に唇を軽く当てて、吸う真似をする。



「あら、そんなことしたら、明子、もう、お内へは帰れないわ。勘忍して……」

私は腰を抱きしめて、二の腕や脇腹に、キッスの雨を降らす。チュッ、チュッと軽く吸うだけで、白い肌のそこが朱くなる。

両手を吊られたままの藤田明子は、狂ったように裸身を捻じって、私の唇と手から逃れ

ようとしたが、それは徒らに、私の嗜虐心をあふりたてるのに役立つだけだった。

そんな遊びをやっていると、私の下半身はみるみるうちに充実してきた。S好みの男性であつたら、こんなプレイを繰り返していたら、何度でも、そういうことになったであろう。私は、彼女のウェストを手でさすりなが



ら、パンティを、ずり下げていった。

私が嗜虐心の昂揚から、下半身を充実させているのと同様に、彼女もまた、両手を拘束された無防備なポーズからの、いたぶりで、被虐心を、いたく刺戟されて、その白いパンティの下の特境を湿润地帯にしていた。

私は、えもいえぬ感觸を楽しんでいた。と、そのときのことだ。

ヒュー、ヒュル、ヒュル——という、空を切る音と共に、部屋全体が揺れた。

地震かと一瞬、考えたが、窓を開けてみてすぐに、その原因が、わかった。

新幹線が、すぐ傍らを走っていたのだ。今まで、少しも気がつかなかったのが、迂闊だったが、余り気持のよい音ではない。

私は、その金属製の柱から彼女の両手首を解放した。両手が自由になった彼女は、反射的に手首の縄目のアトを確かめてから、ほっとしたように、両腕をひろげて、正面から私に向ってきた。

二人は思い合わせたように、胸と胸とを、ぴったり密着させて抱擁していた。

ブラジャーで押し上げられたポインが、異常なまでに私の素肌の胸を圧迫する。女体を抱くということが、これほどまでに、気持がよいものなのか。私は力一杯、抱きしめた。

「実は、私。貴方がお電話で、お話をしたいから、お逢いしたいって、おっしゃってましたので、今日は、こんなに縛られて、写真を撮られるなんて、思っていませんでしたの」——と言いますと、食事をして、お話をし、それで、はい、さようならと……」

「いいえ、ドライブや観光地での見物や、お買物、それに、ゴルフやボーリング。こんなの、楽しいじゃございませんこと。それから素晴らしいホテルでの宿泊。これで、貴方が、私を縛ったり、写真を撮ったりされなかったら、最高なんだけどもなあ……」

「何を言ってるんだい。僕は、今からキミを縛ろうと思って、こうして、縄を準備してきているんだよ。縛らなくちゃ、女の体なんて面白くないんだよ」

「お縛りにならなくなつて、明子は、貴方の思いのまま、自由になりますわよ」

「それは、よくわかっている。だが、縄で自

由を奪っておいて、ねえ、その方が、バリエーションがあって、面白いだろう」

「私、貴方に、住所も名前も申し上げていませんでしょう。ですから、顔の方も、かくして頂きたいの。どこの誰ともわからないようにして頂きたいんですの。それでしたら、どんなに責められましても、私、辛抱いたしますわ」

「そりゃいいですよ。キミの、その美しい顔が縄目の苦痛にゆがんでいるところを写真に撮りたいんだけど、まあ、雑誌に出るのだけは、仕方がないから、顔をかくしましょう。このネックチーフで猿ぐつわをして、それにサングラスを掛けて、これで、どこの誰ともわからないでしょう。その代り、縛るのは遠慮しませんからね」

私は縄を取り出して藤田明子を高手小手に縛り上げておいて、真鍮製の飾柱に縄尻を使って縛りつける。縄目のアトがつくからと、あれだけ嫌がっていた彼女も、観念したように、恥じらいながらも、その縛られた堅太りの裸身を私の目の前に晒した。

ブラジャーを押し上げて溢れんばかりにポインが顔を窺かせている。縄を掛けるとき、私はわざと、ブラジャーを、ずらしたのだ。

パンティに手をかけると、彼女は、それをずり下げさせまいと、必死になって両膝を合わせている。その抵抗を押しつけて、右手をお尻の方へ回して、無理矢理、下着をめくってゆく、この、えも云えぬ気持の良さ。

彼女は、両手を縛られ、しかも、縄尻を柱に固定されているので、如何にもがいたところで、自分のパンティが、他人の手で、ずり下げられることを防ぐことは出来ない。

そればかりではない。私の悪戯っぽい右手

が、ぷりぷりした双臀の間に割り込み、左手が前の方から潜り込んできても、それを防ぐことすら出来ないのだ。

耐えられなくなった彼女は、金属製の柱を滑って、ツツツと、柱の根元へかがみ込んでしまった。それが合図のように、私は彼女の秘境に挑戦していったのだった。

犬輪のネックレスをつけられた明子は、その美しい眉をしかめて、私のあくどい、いたぶりを必死になって、こらえていた。





☆☆粘膜責め☆☆

苗木陽子にしてもそうだが、この脂ののりきった藤田明子にしても、どうやら、△鑑賞用女性▽というよりも、△愛玩用女性▽といった方が、よさそうだ。

〔画に描いた餅〕よりも、実際に口の中へ入れて、その美味を賞し且つ、お腹の大きくなる〔食べられる餅〕の方が良いにきまっている。△愛玩用女性▽は、即、プレイ用の奴隷”といってもよいだろう。

自分からマゾの境地に没入し、溺れ込んでしまう『セックスの奴隷』は、SMプレイヤーにとっては、まさに垂涎に値する女性だ。殊に、この藤田明子のように、肌になじりながらも縄目のアトやムチのアトが残って困るという女性であれば、必然的に、その責めも、△羞恥責め▽に限定されてくる。二人で一緒に風呂へ入る。

このホテルは外観や調度は比較的、豪華なのだが、燃料節約のためとかで一々、フロントへ電話しないことには熱湯が出てこないのは面倒だった。その熱湯も、出ているのは、入浴している間だけで、三十分位すると、ぴたりと元栓で湯は止まってしまうのだ。

新しく建ったためか、化粧室、トイレ、浴室とも、斬新なデザインで気に入った。

浴室の洗場は比較的、広いのだが、バスタブはポリ浴槽なので、二人で向い合って、お互いに股の間に脚を入れ合って入浴する。

そんなにまでして、狭い浴槽に一緒に入らなくてもいいのだが、なんととはなしに、そんなことになってしまった。

私が、「いらっしやい」と言ったら、彼女は、「はい」と言って、素直に入ってきた。

「旦那さんとは、いつも、お風呂へ一緒に入っているのかい」と尋ねたら、「結婚以来、一度も、そんなことはない」と言うのだ。

「何故、私とだったら、一緒に入るの？」と聞けば、「だってえ、貴方が呼ぶからよ」と答える。理由は、ただ、それだけだ。

私も、去年の十二月、クリスマスの日。ひよんなことから、共に彼女とホテルへ、しけ込む始末となったが、そのとき、あんなにホ



テルへ入るのを恥かしがっていた彼女だから
よもや、一緒に一つ湯舟に入るなどは、しな
いだろうと思っていた。

だが、物は試し、呼んでやれ——という気
で誘ったのだ。(アベックなら、入浴を一緒
にと誘うのは、礼儀かもしれないが……)
すると、どうだろう。彼女は、「はい」と

返事をして、裸になって入ってきたのだ。だ
から今、こうして、二人が一人用の狭い浴槽
の中に、肌を寄せ合って入っていたって、一
向に不審はないのだが、彼女は旦那さんとは
一度も共に入浴したことがないというのだか
ら、どうも、話がおかしい。

「この前ね、あんなにきつく縛って、いじめ

たから、もう二度と、電話をかけて来ないん
じゃないかと思っていましたよ」

「主人に、縛られたアトを見つけられました
ときは、もう、お逢いしないでおうと思
いましたわ。それなのに日が経って、五月号を
見ましたら、急に、お電話をしたくなってし
まいましたの。そして、お電話したら、こ
うして、お逢いしたくて。私って、ほんと
うに、悪い女ですわね」

肌と肌とを、湯の中で、ぴったりと密着さ
せていると、悪戯をしたくなってくる。

両手を湯の中へと、もぐり込ませる。しか
し、彼女の両手も自由なのだから、「およし
遊ばせ」と、その手を払いのけて、近づけよ
うとはしない。私は足を使って、彼女の柔肌
を攻撃し、それを防ごうとして気をそちらに
取られている間に、堅肥りの上半身を抱きす
くめてしまった。

☆

風呂を上げて冷蔵庫からビールを出して飲
んでいると、上りの新幹線が通過した。

国道一号線沿いのドライブインでトイレを
使ったとき、軽い食事を摂ってきていたが、
徹夜のSMプレイに備えて買い求めておいた
幕の内弁当をひろげる。彼女はビールは一杯

も飲めないというので、私一人で飲む。

湯上りのビールは美味い。

腹も大きくなった。

雨中のドライブで、いささか疲れ気味だったところへ、ビールの酔いが回ってきたので円型ベッドの上へ、ごろりと横になる。

いや、実際、あの篠つく雨の、どしゃ降りの名阪国道の山岳地帯を走っていたときは、この先、どうなることかと、いらぬ心配したくらいだ。豪雨のはね返りの白いしぶきで、視界が極端に制限されたからだ。

ベッドの上に、体を横にしていると、ついさっきの山岳ドライブのことや、新阪急ホテルで、食事をしたことなどが、なんだか、ずっと遠い日の出来事だったように思える。それは、今から、数時間前のことなのだ。

そして、行きずりの、琵琶湖畔の、こんなホテルに泊ってしまうとは、妙な因縁だなあと、つくづく思う。もし晴れていて、昼だったら、琵琶湖の湖面が、目の下に見えるかも知れない。

雨は既に止んだか、降っていたとしても、きっと小降りだろう。しかし、陽はすっかり暮れていた。窓の外に明るさはない。

と、そのとき、化粧を直した藤田明子が、



ベッドの部屋へ、ツツと入ってきて、私の胸に頭をのせて、そっと横になった。

「嫌でしたら、お一人の方だけを、紹介して下

人妻のみのする人慣れした仕草であった。

熟れた女の濃厚な身のこなし方だった。

私は、彼女の髪を、そっと抱いた。

「SM研究会に、キミを招待しようと思っていたんだが、余り気が進まないようだね」

「明子、怖いんです。そんな見ず知らずの方と、お逢いしたりプレイしたりするなんて、とても、そんな勇氣、ございませんわ。その方々、きつと、ひどい苛め方、されるんでしょう？」

明子、怖いですわ」

「いや、決して、そんなこと、ないですよ。みんな、紳士ですから、節度は十分に心得ていますよ。でも、沢山の男の人と一遍に逢う

「さるんですか？」

「そう、お望みでしたら、お引き合わせしてもいいですよ。お互いに、何処の誰とも明かさずに、喫茶店なんかで逢ってみたら、どうですか。話し合ってみて、気に入らなかつたら、そのまま別れてもいいですし、話が合うようだったら、SMのことについて、お互いに意見を語り合ったら面白いでしょう」

「喫茶店で、お話するなんて、楽しいですね。明子に、ぴったりの、そんな方って、いらっしゃると思いますの？ もし、おられましたら是非、紹介して頂きたいわ」

「そりゃ、ぴったりか、ぴったりでないかは逢ってから、きめられたら、いいでしょう。キミのような名器の持主だったら、きっと、それを珍重する人が沢山いるでしょうよ。それは、僕が保証しますよ」

「まあ、そんなこと、おっしゃって……」

私の胸の上にあった彼女の顔が、くると寝返りを打ったかと思うと、私の唇に、べつとりと、ぬめり込む濡れたものがあつた。

私は両手をまわして抱え込むと、そのぬめぬめした軟体動物を貪り吸った。

なんと甘美な、感触なんだろう。

身も心も、その一点から吸い取り、抜き取

ってしまうような粘膜の誘惑だった。

ただ、唾液だけでは、こんなにも、痺れるような甘美な接吻になる筈はない。

なぜなのだろうか。私の受け入れ態勢がよかったのか、或は、彼女の唇に、このような天性の巧みさがあつてのことだろうか。

私は、今までに、こんなにも、全身がとろけてしまひそうになる甘美な感触のキッスを交わしたことがなかった。

天地の間、何物も忘れ果てて、ただ、その一点にのみ、あらゆるものを集中した。

粘膜と粘膜とが、激しくきしんだかと思うと、はからずも、歯と歯が、かちかちと鳴った。彼女の舌が軟く、ときには硬い棒のようになつてからまってきた。

彼女の、あの名器を思わ

すような粘膜の跳梁だった。そうだ、彼女こそは、肌の極めて敏感な特殊体質の持主なの





だ。

つい、さっき、ワンワン・ポーズで、彼女の湿地帯を探険したときのことが、ありありと想起された。そうだ、この前、蜂蜜責めをやったときも、そうだった。いつも明子の体って、こんなになるのだろうか。

私は、全身がとろけるような気持だった。うっとりとしてきた。

そうだ。彼女こそ、「粘膜責め」にするのに、最もふさわしい女性なのだ。

体の表面の皮膚と、内臓の表面、或は粘膜とは、或種の連動性を持っているということとは、自分の体を通じての経験によっても、よく納得することが出来る。

藤田明子の皮膚は、縄によって緊縛すること、容易に皮下溢血を起し、かぶれたよう

に、その表面が、縄の型通りに赤く腫れてくるのだ。それほど、鋭敏な皮膚だ。

それに、ひきかえ、この粘膜の方の巧みな繊動は、また、なんという甘さなんだろう。

私は、魂が、その一点から吸い取られてしまうのではないかと思ったくらいだ。

これは、ただのキスというものではなかった。とろけるような甘美さが、次から次へと、手を替え、品を交え、私のあらゆる器官を、緩、急、急、緩と——襲ってきた。

私の脚は、けいれんした。

☆

「粘膜責め」

その構想が、私の頭の中を駆けめぐった。粘膜責めの対象としては、勿論、第一に挙げられるのは性器。そして、その次には、アヌス（を含めて直腸）だろう。三番目には、口（を含めて唇）を挙げねばならない。

この三個所が、人間の各器官の中でも、最も重要な粘膜責めの攻撃目標といってよいだろう。同じく、粘膜責めの範疇に入るものとして、鼻責め（鼻孔）があるが、これは、やや特殊なものかも知れない。この前、私が藤田明子のVとAを執拗に責めた場句の果て、N（鼻、鼻孔）まで責めたことを、今更のよ

うに思い出すのだった。

「粘膜責め」こそ、SMプレイの最も重要な基礎部分に当るもので、「羞恥責め」の殆どが、「粘膜責め」といっても過言ではない。

△粘膜▽が、皮膚に移行する部分、即ち、粘膜と皮膚との境界線の附近が、一番、鋭敏で責めに対する感受性に富んでいる部分だ。

殊に、藤田明子のような―特殊体質―の女性にとっては、そうした個所を責められることに依って、どのような全身的变化、及び局部的変化をもたらすか、興味があつた。

私は彼女の背に、手をまわした。

彼女は浴衣の下には、なにも着けていなかった。お尻に手を這わすと、むちむちとした張りきつた筋肉の感触が掌に伝わってくる。

唇は依然として、合わせたまま離れない。

浴衣の紐をほどこいて、胸と胸とを、ぴったり密着させたまま、ベッドへ滑り込んだ。

布団の中は、ひんやりとして快い。

プチッ

唇と唇とが、初めて離れた。

「明子って、悪い女なのね」

濡れた朱い唇が、妖しくつぶやくのだ。

「えっ？　悪い女って――？」

「そうよ。主人にかくれて、こんな、浮気を

するなんて、本当に、悪い女だわ」

「だって、不思議だナ。明子のような、こんな素晴らしい体の持主を、旦那さんが放っておくなんて。実に勿体ない――」

「明子、主人とだったら、とても、こんなに燃えないのよ。月に一回か、二回ぐらい。それも、五分ぐらいで簡単にすんでしまうの。お義理みたいに、体を合わせているだけよ。」

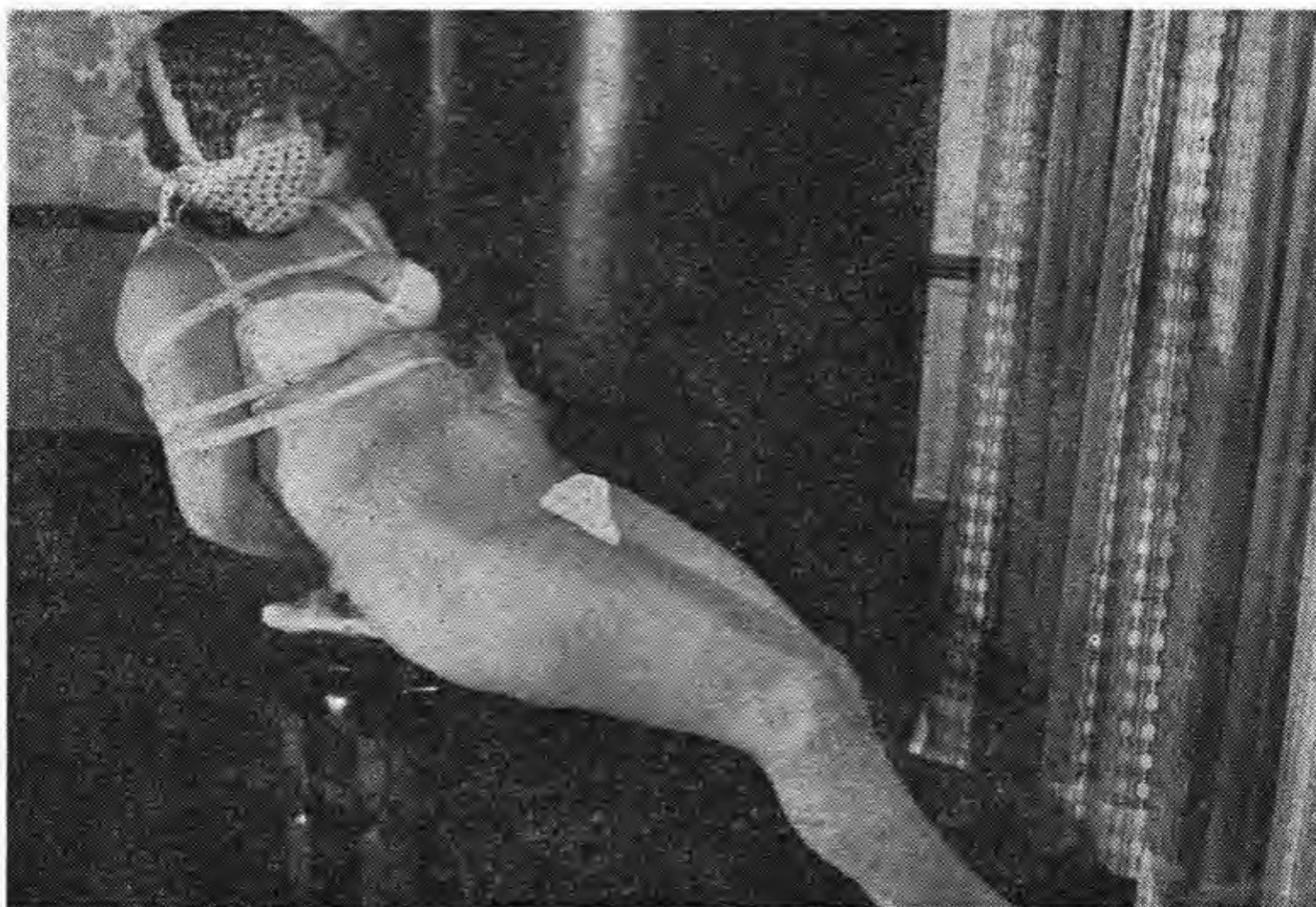
そのあと、すぐ、主人は^{いびき}鼾をかいて眠てしまふわ。つまらないってないの」

「まだ、お若いんでしょ」

「ええ、働き盛りよ。頭を使うから、疲れる疲れのって、言ってるけど、それでいて、麻雀やゴルフ、それに飲みになんか、よく行くようよ。どうなってるのかしら？」

「そうですね。旦那さんは、女の人を扱うの





が不得手なのか、或は、奥さんに安心しきって、いらっしやるんでしょうね」

「でも、明子、浮気したって言っても、貴方が初めてなんですよ。十分に反省してますのよ。もう二度と電話をすまいと、一月ぐらいは、じっと辛抱してたんですもの……」

彼女は、そう言って私に抱きついてきた。

豊かなボインが、私の胸をくすぐる。

「ねえ、明子を縛らないでお願い」

「明子、縛られるの、好きなんだろう？」

「縛られるのなんか、大嫌いよ。ホラ、さっきの縄のアト、こんなに残っているわ」

「縄のアトが残るから、嫌なのかい？」

「いいえ、縄のアトが残ら

なくても、縛られるのは嫌なの。ねえ、こんなに、手が自由な方が楽しいわ。ホラ、こうして貴方を抱きしめることだって出来るんですもの」

「本当に、縛られるのが嫌いなのかい？」

「そうよ。本当に大嫌いだよ。誰が、あんな痛い目にあって、好きになれますものか」

「こいつ奴、何を言やがる。この体が、そうじゃありませんって、言ってるゾ」

私は掛布団をベッドの下へ蹴落した。

浴衣を剥ぎとって、それも下へ投げた。

明子を剥玉子のようにしておいて、真白い敷布の上へ、仰向けに寝かした。

「明子の言う通り、今は縛らないよ。その代り、僕の言うことは、何でも聞くんだナ」

「ええ、その通りにしますわ」

シャンデリヤも側面灯も全部、点灯した。

しかも写真電球五〇〇W、三〇〇Wの二個も点灯して、ベッドの方へ向けた。真昼のような明るさだ。毛筋の一本でも見分けられそうだ。暑くなってきた。私も裸になる。

明子は、膝を曲げ、体を丸くして、両手を脛に回すような格好になっている。

「両手を頭の上へ伸ばして——」

「こうですか？」



「上へ伸ばした腕を左右に開いて」

「はい、はい」

膝は依然として曲げたままだ。

「足を一直線に、真っすぐに伸ばしてっ」

私の掛声の氣勢に押されて、彼女は、暗示にかかったように、さっと脚を伸ばした。

ベッドの上の女体十字だ。敷布の上に裸になった格好だ。彼女は、自分の目でも、そんな自分の黒いそよぎに、目をやらずには、おれないのだ。

私は、そんな明子の裸身を、目をこらして、じっと見つめる。

「次は、足を左右に大きく開いて——」

「いやよ、いやよ。そんなの……」

「約束を守らないんだった

ら、縄を使って、縛ったって、いいんだよ」

「聞きます、聞きます。こうですの？」

「もっと大きく開くんだ。さっきは“十”の字だったが、今度は“大”の字だ」

「そんなの、明子、困りますわ」

「何が困るんだっ」

「だってえ、御存じのくせに……」

「言う通りにしないと、こうするぞ」

私は彼女の左右の足の裏に、自分の足の裏を、ぴったりと合わせて押し開いた。

「ああ、ああ、やめてえ……」

私の足の介添えで、やっと彼女は“大”の字になった。

思えば、このホテルへ入ってから、長い長い前戯の旅路だった。幾度となく終着駅に達する機会があったというのに、敢て私は、その都度、肩すかしを喰わしながら、山の麓から中腹へと辿り、中腹から、六合目、八合目へと、つき進んで行ったのだ。

いつものことながら、これから先の描写を微に入り細に穿ってやりたいのだが、公開の席では、それが出来ないが残念だ。

一対一でお逢いしたときなんか、ASMR研究の成果Vを、酒を汲み交しながらでも、話し合うより仕方なさそうだ。

とにかく、私は大いに安堵した。

十二月二十五日に初めて逢ったとき、そして二月十一日に再度、逢ったときと同じように、今日、三月二十七日も、藤田明子の名器「蚯蚓千匹」が、明らかに蠢動したのだ。

この名器の奏でる妙なる調べを、身を以て鑑賞するとすれば、それ相応の忍耐力という鑑賞者の資格が必要だろうと思う。

なにしろ、彼女の粘膜の蠢動は素晴らしいんだから、相当の覚悟をきめてかからないと、折角の名器の演奏が聞けなくなってしまう。

私は、いつまでも聞き惚れていた。

☆☆名器の秘境探険☆☆

私は揺籃にゆられていた。

電灯を消さなければいけない、いけないと思いつながら、手も足も動かなかった。

しようと考えていながら、どうしても出来ないって、いうことが、どうして、こんなにも、物悲しくも甘美なんだろうか。

することが、しなければいけないことが、いくらでもあるのに、しないでもよかった。体が宙に浮いているので、手足が自由なのに、雲を掴むように、力が入らなかった。

揺れている、揺れている
ゆりかごだ。

生温かくて、湿気があつて、ぬめっているのだ。そう、胎児が、羊水に包まれて子宮の中に浮んでいるのは、こんな状態だろうか。

私は、そんな状態で、どのくらい、あたりを彷徨していただろうか。

時間的な感覚は一切、なかった。

はっと気がついたとき、私は、彼女と一緒に重なり合っていた。

そして、不思議なことに私の頭に、そのとき浮んできたのは、名阪国道の関から、伊勢街道を津市へ向って走りだしてすぐ、豪雨の中をガソリンスタンドで給油しているときの光景だった。タンクのキャップのキーを渡そうと窓を半開きにしただけで、横なぐりの雨



しぶきが、さっと車内に入ってきた。

人通りは勿論のこと、車の通行も途絶えた。うら淋しい雨の街道筋のことだった。日本列島が、すっかり雨びたしになっているのかと思うような広範囲の雨の降りようだった。

そんな光景が、ゆくりなくも、何の脈絡もなしに、ふっと、私の頭に浮んでは、すぐに消えた。男と女の営みのうら悲しさが、私の胸にジーンと、しみた。

女の心——。それは、男性である私には、わからない。女は、溺れに溺れて、何も彼も忘れ果てて、その一事に没入しきれるものなのか。それとも、また、そんなときでも、余事を考えているのだろうか。

新幹線の振動が伝ってこないところを見ると、もう、きつと深夜なのだろう。

私が体を動かすと、彼女もまた、それに従って体を動かした。私は依然として、彼女と密着している自分を再確認した。

そして、不思議なことに、私は最前と同じように、遅しく元気であった。

彼女の蚯蚓千匹の名器が再び活発に躍動した。

「ねえ、明子。キミは自分の体のことについて、何も知っていないのかい？」

「ええっ、それ、一体、何のこと？」

「明子はね、自分で、締めつけるとか、なんとか、それ、技巧をこらしてるんじゃないのかね。だって、とっても素晴らしいんだもの」

「明子、なんにも知りませんわ。自分では、何もしていませんのよ。そんなに、何か交っていませんか？」

「すると、やっぱり、天性の名器かな？ それだったら、一つ、名器の秘境探険でも、やらかすとするか——」

そんな冗談を言っているのも、そこまでだった。神韻漂渺たる底知れぬ名器の魔力が、私をして、全身ごと、夢幻の彼方へと、引きずり込んでしまったのだった。





☆

石油ショックの余波が、こんなところにまで及んでいるとは思ってもみなかった。

浴室へ行っても湯が出ないのだ。

こんな真夜中に、「湯を出して呉れ」と、帳場へ電話することも、まさか出来ない。

仕方がないので、バスタオルを腰に巻いたままで、藤田明子に声を掛ける。

「おい、これから、プレイをやるゾ」

私の目は益々冴えてくるのだ。

長年、飼育した飼い殺しの奴隷妻にしたって、こんなに手荒く使ったら、文句の一つも言うだろうが、明子は、嫌な顔もせず、ベッドの上で裸身を起した。

「プレイって、一体、どん

なこと、なさるのです？ 明子、縛られるのだったら嫌って、申し上げましたでしょう」
「だから、今は、少しも縛らなかつたらう。でもね、少しは写真も撮らなくっちゃ、ホラあそこで、照明器具が泣いているよ」

「でも、明子、縄はこりごりですわ。主人に縄のアトが見つけられたときのことを思い出すと、ぞっとしますの」

「ホレ、縄目のつかない、この白い紐で、両手の自由を、ばっちり奪っておいて、それから、ゆっくりと、湯気の立っているようなヌクヌクの名器の秘境探険とゆこうか」

「まあ、また、変なことを企んでいらっしゃるんでしょう？ 明子の、この体、そんなに特徴がありました？」

「有りも有りも、大有りだよ。とにかく、こっちへ来給え」

私が浴室へ行っている間に彼女の羽織った浴衣を、さっと剥がすと、アレアレ、いつの間にか、ブラジャーもパンティも、ちゃんとおつけている。

すくっと立たせると、ふるいつきたくなる肉づきの良さだ。二十才前後の娘には、絶対に持っていない、こつてりとした濃厚な色気が、体全体から、にじみ出ている。



プロポーションも決して悪くはない。(それは写真を見て貰えば一目瞭然だ) この素晴らしい女体が、一時期にせよ私の「奴隷女」として自由に出来るのだ。

この手も、この足も、みんな、この自分の思いのままに、することが出来るのだ。

そう思うと、私の嗜虐心は、火がついたように、一層あふり立てられてきた。

晒の紐で後手高手小手に縛り上げる。これで、彼女の両手の自由が完全に奪われてしまったのだ。手の自由を奪われるということはとりも直さず、人間性の放棄に外ならない。

私は彼女を、イケニエの祭壇へと導いてゆく。そこで、彼女は、どのような凌辱と、羞かしめを受けることになるのか、それを、じ

っと噛みしめるように歩を運んでゆくのだ。明子は、私に全てを任せて、人形のようにグッタリと身をすり寄せると、次の行為を待っていた。私はパンティに手をかけて擦り下げ、彼女の反応を十二分に味わった上で、足からそれを、さっと抜いた。

彼女は、一瞬、墮落してゆく不安感に襲われたように、全身の力をぬいて、くたくたとカーペットの上に沈み込んだ。

「まだまだ、もっと立ったままで、奴隷の体を、とくと見せるのだ。見せるだけじゃなしに、こうして写真に撮って頂くん。手を縛られているから、ほら、前をかくすことも出来ないだろう。さらけだしたままなんだ」

「ひどいわ!」

「ふふふ、もっと、いじめてやる」

「お願い、ひどいことは、しないで……」

私は彼女の胸にタックルして、スツールにドンと坐らせる。

明子は、従順だった。

たまらなく可愛い。太股をちゅっと、強く吸った。太股から太股のつけ根、そして、お臍の脇へと唇は這ってゆく。

「さあ、仰向けになるんだっ」

「な、何を、なさるの? そんなにしたら倒

れてしまうじゃありませんか」

「そうだ、仰向けに倒れてしまうんだ。文句を言わずに、さっさと、命令された通りに、やらないか。お前は、私に飼われている犬なんだ。ホラ、この通り、犬の首輪をつけてやっただろう。飼犬なんだよ。お前は、私の飼犬なんだよ。ペットなんだよ」

「本当ですわ。こんなに犬の首輪をつけられたら、犬になってしまった気がしますわ。私って、もう、犬になってしまったのね。明子は犬だわ、犬になってしまったのだわ」

彼女は、呟くように、自分に言い聞かせるかのように言うのだった。

私は、自我の強そうな藤田明子が、犬の首輪を嵌められただけで、「犬になった」と、自分の口から言っているのを見て、演技じゃないかと、一瞬、疑ったくらいだった。

読者の方々にしても、きっと、そう思われることだと思う。或は、私が話を面白くするために、作りごとを書いているのだ——と、考えられるかも知れない。

それは当然だと、私も思う。なにしろ、その現場で見ていた私が、急に「変身」した藤田明子を眺めていて、不審に思ったくらいだからだ。

暗示か——、或は、そうかも知れない。

催眠術の一種かもしれない。

それは、私にも、とくとわからないが、とにかく、彼女が「私は犬になってしまった」と、自分の口から喋ったのは事実だった。そして、実際に、それから「犬」のようになってしまったのだ。

平凡で、標準的な家庭婦人である藤田明子に、ピンク女優のようなオーバーなわざとらしい演技が出来る筈がない。

とすれば、真実、彼女は「犬」に変身してしまったのだろうか。

「明子、お前は犬になったのだ。犬の首輪をつけられて、今や、完全に犬になってしまったのだ。メス犬なのだ。私の飼っているペッ



トなのだ。いいか、犬なんだぞ」

そう言いながら、私の手は、首から肩へ、乳首へ、下腹へと滑ってゆき、執拗に脇腹をさする。そり反った明子の腹が、私の掌の下でグルグルと鳴った。

微かに開いた口から、呻き声が洩れる。

私は、弓のようにそった明子を両手で抱えて、寝室へ運んで行った。

「ブラジャーを取ってしまおうネ」

「明子を犬にして。犬のように愛して……」

「この紐は解かないよ。いいかい？」

私は磯ギンチャクのような明子のアヌスに指を近づけていった。

きめが細かくて、精緻な彫刻を見えるようなそれは、思いを含んで静かに佇んでいた。

「犬だ、犬だ。犬にしてやるのだ」

私は、心の中で、そう叫んでいた。

新幹線の始発が激しい振動と共に、鋭い風を切る音を伴って通過した。

☆

三月二十八日――

昨日にひきかえ、今日は朝から快晴だ。

あの暗澹とした空は、一夜明ければ嘘のよう、からりと晴れ渡っている。

五条バイパスを通過して京都市内へ入る。

「昨日の埋合せに、少し走ってみようか」

雨に洗われて奇麗になった舗装道路を快走して鞍馬に着く。門前の三台ばかり置ける素人風の駐車場に車を滑り込ませると、上品な京婦人が出てきたので、料金を払おうとしたら帰りでよいという。

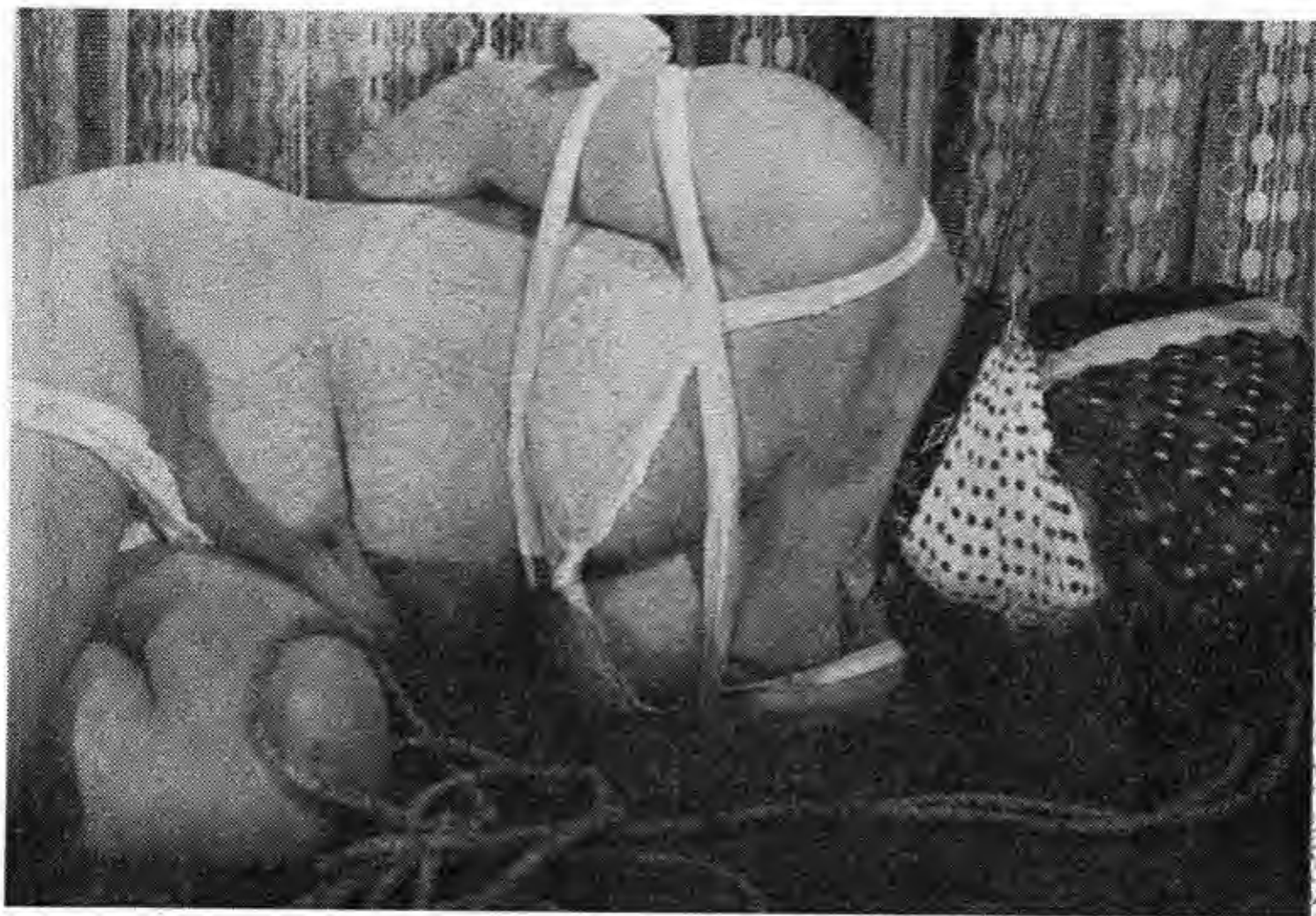
駅前の茶店で、五目ずしを食べる。しば漬の紫蘇の香りが、ぶんと鼻の先に匂ってくる。

静まり返った茶店には、まだ早いのか、私達二人以外に観光客の姿はない。こんな静寂なところに腰かけていると、昨夜の、あのドロドロとしたSMプレイは、一体なんだったのかと、思えるくらいだ。

鞍馬寺は、門を見ただけで引き返して、貴船へ向う。貴船神社から、更に細い道を赤い鳥居のある茶店の前まで乗り入れる。雨上りで貴船川は満水。風が、いささか冷たい。

上賀茂神社まで下ってきて、こ





こで、そばと餅を食べる。甘い物は好かないのだが、彼女が食べたいと言うから仕方がない。

「それで、貴女がSM研究会の会合に出席するのが、お嫌でしたら、私の心当りの人を紹介しましょうか。それとも、貴女のカメラ・ルポの記事を読んで、通信を寄せて来られた人と逢ってみますか？」

「私は、喫茶店なんかで、お逢いして、いろいろ、お話してみたいんです。ですから、今度、私がお電話するまでに、良い方を選んでおいて下さいませんか？ 場所、やはり、梅田の三番街あたりがいいと思いますけれど、御都合で、どこへでも参りますわ」

「じゃあ、必ず、お電話下さいナ」

新快速電車で帰るといふ

藤田明子を、私は京都駅まで送った。

一泊二日に亘る愛玩用女性藤田明子とのSMプレイ旅行は終わった。

犬の首輪をつけてペットのようにして飼育し裸身のすみずみに至るまで弄ぶ、特異体質の女の謎を「粘膜責め」にて究明した上、名器の機構を心ゆくまで愉んだつもりだ。

それなのに、今、こうして別れようとする、まだまだ、彼女の体の上にやりたかったアイディアが、あれもこれも残っているように心残りでは仕方がなかった。

えしやじようり 会者定離——。会う者は必ず離れるという

理(ことわり)から考えれば、藤田明子なる謎の女性と別れなければならないというのも自然のなりゆきで仕方がないことだ。

それはよく判っていたが、彼女の名器の甘美さを味わってしまった今となっては離れ難い念が私の胸を一杯にしてしまうのだった。

この前、二月十二日に別れたときは、ひょっとしたら、もう二度と、電話を掛けてこないかも知れないと思った彼女だったが、今度は、必ず連絡してくるだろう。

私は人混みの中に消えてゆく彼女の後姿を見つめながら、そう確信したのであった。

(おわり)

王 女 無 残

メリー王女は夢の中にいるような気がしていた。バッキンガム宮殿三階の古めかしい寝室では勿論なかったし、ウインザーにある超モダンの居室とも違っている。無駄なものは一切、受けつけない質素な調度が、何か病室にしているような錯覚をあたえていた。だが、どこからか聞えてくるターピンの音が、ここは給だと教えてくれる。

——そうだ、私はゴリラにされて……。

忽ち蘇ってくる苦渋の記憶が、彼女をハッと起き上がらせた。

見馴れた白い二の腕が空を掴んで泳いだ。

その動きが、あまりにも自由だったからである。ゴリラの「ぬいぐるみ」に封じ込められている間は四肢を動かすのに大変な力を費やさなければならなかった。まるでアイスホッケーのゴールキーパーのように進退が重かった。それで、無意識に手足を力一ぱい動かすクセがついてしまったらしい。

見回すと周囲をクリーム色に塗った八畳ばかりの部屋は、片すみに彼女が今まで眠って

いた鉄製寝台が置いてあるだけで、ガラシとしたりノリニームの床が冷たく光っているだけであった。

ロンドンからテムズ河を下って行く間は、檻のまま甲板に放置されていた。それで、ゴリラの目に嵌め込まれたレンズ越しではあったけれども、去りゆくイングランドの景色を悲しい諦めとともに眺めてきた。

エミコ号は、ドーバー海峡に出ると、そのまま進路を北に向けて、全速力で走りはじめた。夜の帳がおりる頃、檻から出されたゴリ



第六十九回

ラは船体中央部の脱出口に移された。

何時間たったか、殆ど次の日の白々明けただろうと思われる頃、スキューバに身をかためた有明たちが入ってきて、いきなりおさえつけ、一カ所だけ露出しているメリー王女の赤く塗った臀部に注射針を突き立てた。

——そうだ——。

何という屈辱だったろう。臀部が剥き出しになって、それも赤く塗られていたと考えただけでも身内がカッカッと火熱ってくる。

身をよじって、腰のあたりを見ると、そこには、もう塗料のシミ一つさえ、残っていない。綺麗に拭いとられていた。誰かが身体を清拭してくれたのだとわかった。無防備な状

前号まで「秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。G号作戦の舞台は、次々に美しい獲物をとらえながらロンドンに移った。有明は大胆不敵にもメリー王女をニセ者とスリ替えることを企て、王女はお付きのイングリッド卿夫人とともに有明の手中におちた。」

態で肌のすみずみまで見られたことが口惜しかった。

それにしても、臀の間に喰い込む布切れの刺激が、さっきから不快感をあたえていた。未決服は、決して愉快的な着物ではない。手足を縛り上げたあとでも、簡単に取り去ることの出来るのが特徴だった。そして前を辛うじて覆った三角形の布切れは、後では一本の紐状になって鼠蹊部から腰の溝に埋れている。

(第22回参照)

だが、どんなに嫌なデザインであったにしても、素肌を曝すことに比べたら、どれ程よいか知れなかった。

まして、鉄製寝台はクッションもなく、皮革で覆われていて、一枚のシートもかぶせてない。そこで気付くと、下の方に、やたらとハンドルや何かがついていて、これでは、まるで産院の検診台のようであった。

もう一つ、変っているのは、一方の壁が全部、鏡になっていることである。

こちらのメリー王女が起き上がると、鏡の向こうの女性も同じ動作をする。

その右手に鉄扉があった。

サッと駆けよって、ノブを握る。

案の定、錠がかかっていた。

苛立ってガチャガチャと、それを回しているうちに、サッと扉が内側に開いた。

エミー司令、高橋淑恵大佐、そしてジャンヌこと小林敏子。読者には、お馴染みの顔ぶれだが、メリー王女にとっては全く未知の女性達である。わずかにジャンヌは会っている筈なのだが変装していたし、それを見わかる余裕などは全くなかったといっている。三人ともアマゾン女兵の正装つまり全裸だった。つけているのは階級を示す髪飾り、腕輪のみである。

女性同士とはいえ、メリー王女にとっては無気味な日本人が三人、揃い、しかも一人残らず飛切りのプロポーション、美貌の持主である。何となく威圧されて王女は、たじたじと後退した。そして、三人に三方を囲まれた形で一方の壁に貼りついたようになってしまったところへ、再び扉が開いて有明がツカツカと入ってきた。

すると、どうであろう。三人が三人ともメリー王女にクルリと背を向けて、かがみ込んでしまった。王女は知らなかったけれども、「開股跪座の礼」は、有明に対してのみ行わ

れる、いわば最敬礼ともいうべきものであった。腿を一直線に開いて、爪先だけで身体を支える姿勢は、特に女性にとって恥かしいばかりでなく、又、肉体的に困難だった。佐瀬直美の若紫の局に仕えることになった富田茂子が受けた矯正器の章（第39回）を読み返していただきたい。

さすがに鍛え抜かれた高官たちの開股跪座礼だった。真っ白な太腿が、まばゆいばかりに横一文字に開いて、その真ん中にあるものを、とりわけ、あらわに見せつけるようであった。

いつもの通り、金の刺繍で縁取りをした更紗の寛衣（トガ）を涼し気にまとった有明はお氣に入りの三美人を満足そうに見回してから、片手を一寸あげて、合図をした。三人はいっせいに立ち上がる。そしてエミー司令がいきなり「ワイ、ドンチュー、フォー、ダウン（平伏しろ）！」



と叫び、メリー王女の栗色をした髪をムンズと握って、ひっぱった。間髪を入れず高橋侍従が王女の右手をねじりながら、足をかけた。

王女はたまらず、悲鳴をあげながら、有明の足下、リノリュームの上に転倒した。最少限度の布切れでしかない未決服は忽ち乱れて

王女は裸同然であった。もっと悪いことに、なまじ未決服を着させられているだけに、余計、肉体のラインが生々しく、あばき出されるようであった。

「やめろ。こいつは服従することに馴れていないのだから……」

わざと英語で有明が言う。三人とも英語はよく理解出来た。

メリー王女をおさえつけていた手が離れると、生れてはじめて受けた屈辱に頬をひきつらせた王女は、有明をきくと、にらみすえながら立ち上がった。

「わたくしはメリー王女です。何の理由があって、このような理不尽なことを、なさるのでですか」

さすがに物腰から言葉に威厳があった。有明は、メリー王女の詰問を全く無視してエミー司令に向って言った。王女にわかるように、わざと英語を使っている。

「こいつは私に直接、話しかけ

るという無礼を意識していない。君から、よく説明してやって貰いたい」

三人の中でも、星エミー司令の会話力が最も、すぐれていた。格調の高い言葉を、しかもロンドナーのような早口で話せるのは彼女をおいて、いない。

「あなたは、まだメリー王女だと、思いでしょうが……」

と、わざと丁寧な言葉をえらびながらエミー司令は語りかけた。

「お国では、あなたのいらっしやらなくなったことを全く問題にしません。今も、メリー王女はウインザーにおられるのです。もっとも、先日、落馬なさって頭をお打ちになったそうで、それが原因で多少、記憶喪失の気味があるというので、心配されておりますが、それとても外部には発表されず、ただご病氣静養中ということになっております。すると、あなたは誰なんでしょう？」

「ち、ちがいます。それはニセ者でしょう。わたくしこそ、わたくしこそ本物のメリー王女なのです」

憤怒のあまり、さすがのメリー王女も昂奮してドモリがちになった。

「フフフフ」

エミー司令が含み笑いをした。有明をはじめ、他の二人もニヤニヤしている。

「どこに、あなたがメリー王女だということを証明するものがありますか。あなたは素っ裸の一人の女じゃありませんか」

「ああ、わたくしこそ、本当のメリー王女なのです」

王女は手をもみながら叫んだ。本物のメリー王女だということを如何に証明したとしても本質的には何の変りもないのだが、動揺した彼女は、自分が王女だということを証明しさえすれば救われるという錯覚にとらわれてしまったのであろう。

「バッキンガムの中のことを、何でもお話ししましょう。王女しか知らない秘密も話してあげます」

「ホホホホ。そんなことをお聞きしても、わたくしどもには、それが本当かどうか、わかりませんわ」

「オオ……」

何という意地の悪さだろう。奈落の淵に落ちかかったような絶望感が不意に突きあげてきて、王女は声がつまり、両手で顔を覆ってすすり泣きはじめた。

「わたくしを、わたくしを、なんでメリー王女だと、わかって下さらないのですか。日本だって、わたくしの写真をのせた雑誌や何かが出ているでしょう。わたくしを知らない人など、世界中にありませんわ」

「思いあがるんじゃないよ」

ガラリと調子をかえた星恵美子の声が鋭く王女の耳に突きささった。

「さっきから言ってるのが、わかんないのかい。いいかい。メリー王女はチャンとウインザー城で医者にとりまかれてるんだ。だとすれば、ここにいるオマエさんは、誰だっていうんだい」

「名無しのゴンベイ」

有明がオドケて言ったので三人の裸美人がドッと嗤った。これは日本語だったのでメリー王女には意味がわからなかった。しかし、嗤われたところを見れば、何か、からかわれているのだということがハッキリわかる。

再びキツとなった王女が言った。

「誰が何とおっしゃろうと、わたくしこそ真正、証明の王女、メリー・ルイズ・ウインザーですわ」

「ノウ」

おし返すように有明が叫んだ。そして、エミー司令に向って、

「これのあたらしい名前は、G—二〇〇だと教えてやれ。王女に似た女のために、私が特別に選んでやった、覚えやすい名前だ」

ジー・ツー・ハンドレッド

(G—二〇〇)

どんなに暴れても、抵抗しても、所詮は多勢に無勢だった。メリー王女は最後まで死力をつくして争ったのだが、こちらは又、手練れのアマゾンたちである。手取り足取りして寝台の上に押し倒される。カチリ、カチリと両手首がバンザイをしたように固定されてしまった。さらに、太いベルトが胴を寝台に押しさえつける。

わずかな布切れは、もうまくれ上がって、股間をかくすものとしては、例のT字型の禪しか、ない。

「何をなさるの、やめて。お願い」

もう王女の権威も気取りもあったものではない。金切声をあげて許しを求める。寝台の左右に立った高橋侍従とジャンヌが、王女の足を、それぞれ、かかえ込むように掴んで、

上に持ちあげたからであった。

「G—二〇〇だよ」

有明が念をおすように言う。

「間違いないですね」

タトウーマシンにG—二〇〇という針を植え終ったエミー司令が答えた。

「アッ、オウ、ノー」

王女の声は、もう悲鳴だった。思い切りよくT字帯が投げ捨てられた。

「ホウ、あれだけピーター伯との間を噂されていたのに、肉体関係はなかったんだねえ」

覗き込んだ有明が、妙に感心したという調子で呟いた。王女の全身が羞恥に染まった。

だが、次の瞬間、その身体は

「ウッ——」

という呻き声と共に、硬直したようになった。

た。菊とサカナ（第25回参照）の間に、墨をたっぷり含ませた針が百本以上も、一気に突きささったのである。

余分の墨が拭きとられる。

「キレイに入ったねえ」

と有明。

「とてもマスターのようにはまいません」
はずかしそうにエミー司令が言った。

「そう、ちょっとしたコツだから……」

すべて英語だったから、気もそぞろになった王女の耳に、嫌も応もなく入ってくる。

——この連中は気違いだわ。こんな残酷なことをしながら、まるで日常茶飯事のような会話を交している。

王女は思った。

上半身はベルトで締めつけられ、両足はかかえ込まれているから、全く身動きも出来ない。出来ることといったら、ただ、声をはなれて泣き叫ぶだけであった。

「ルック、ダウン！」

有明に髪をひっぱられて、王女は無理矢理に頭をあげさせられた。自然に股のあたりが視野に入ってくる。

「……」

王女は声をのんだ。

エミー司令が、ベッドの上に鏡を立てかけていた。そこに映し出されたのは、自分の肉体の一部でありながら、まだ見たこともない場所だった。カーツと全身が熱くなって、かたく目を閉ざしてしまう。美しいまつげの間から、泪の粒が、こぼれ出してきた。

はげしく髪の毛が、ゆさぶられた。毛が抜

けてしまいはしないかという恐怖が起った。
ひどい痛さだった。

「ヒューッ」

自分でも驚くほどの声が出る。まるで獣が
吼えるような声であった。思わず目があいて
哀願のまなざしが有明の顔を追った。

「オープン、ユア・アイズ。アンド、リード
ザ、ナンバー」

と、エミー司令の声が、股間から聞えてき
た。

「オオッ」

そこに黒々とした黥文字を読みとった王女
が絶望の声をあげる。その上、ダメ押しをす
るように、エミー司令が言った。

「ジー(G)・ツーハンドレッド(二〇〇)

ジス、イズ、ユア、ネーム」

その声が遠くなった。今度こそ、メリー王
女は気絶してしまったのである。

すぐに気つけの注射が打たれる。例によっ
て、トランキライザーを混ぜてある。

王女は弱々しく目を開いた。そして、もう
手足が自由になるのを知ってホッとする。股
間にもT字帯が結ばれているらしい。そのあ
たりがシクシク痛い。あの屈辱きわまりない

イレズミのことが、すぐに思い出される。

「グッド、モーニング」

皮肉たっぷりエミー司令が声をかけた。

そして、間髪をいれず、

「G—二〇〇！ お立ちなさい」

と命令した。

「……」

はげしい憤怒がこみあげてきた、王女はエ
ミー司令をニラみつけた。だが、王女の誇り
なんか、これっぽかしも斟酌する相手ではな
かった。

ピシヤリ。

思い切り頬を叩かれると、王女の反抗など
忽ちヘナヘナと、くずれ去ってしまう。

ノロノロと、前をかくしながら寝台を下り
る。巾のせまい布切れは、ともすると素肌を
露呈することになる。

「アテイン、ション！（気をつけ）」

イギリス陸軍風のアクセントで、エミー司
令が号令をかけた。

四人がドツと嗤った。そして、無理矢理に
不動の姿勢をとらせようとする。

有明は寝台の上でアグラをかいていた。

ジャンヌが、その側に仰臥して、自らの肉

体を脇息に提供していた。有明の左肘が、ゆ
ったりと彼女の柔らかな臍のあたりにのせら
れると、手が自然に胸乳のあたりにくる。掌
が盛りあがった乳房を快さそうに、まさぐっ
ていた。

有明の目の前で、今は一切を剥ぎとられた
メリー王女が、屈辱的な身体検査を受けてい
た。エミー司令が色々な器具やメジャーを使
いわけながら読みあげる数字を高橋侍従が書
式通りに記入してゆく。

疲れ果てた王女は、目的が身体検査だとわ
かってからは、抵抗をやめて言いなりになっ
た。それにしても執拗な検査だった。特に局
所のサイズが測定されるとき、王女は口惜し
さの余り、ポロポロと涙を流して哭いた。

ひと通りの検査が終った。

「G—二〇〇」

又しても番号で呼ばれる。つい、うっかり
していると、今度は臀を平手で叩かれる。よ
ろよろしながら、辛うじて

「イエス」

と、蚊の鳴くような声で答える。

「イエス、サーというんだ、大きな声で」
エミー司令が怒鳴った。

エミー司令の言いつけは、マスターの足下に跪いて服従を誓えというのである。

たとえ殺されたって——

と王女は思った。消えかけていた誇りが最後の灯をパッと燃やした。

深い軽蔑の目差しをエミー司令に向けた王女は、

「ノウ。アイ・キャン・ノット」と吐き棄てるように言った。

「そう、出来ないというのね。いいわ、それなら、後を向いてご覧」

高橋侍従が素早く部屋を出て行った。

王女が振り向くと、鏡だとばかり思っていた壁面が、パッとあかるくなった。鏡ではなくて、マジック硝子の壁だったのである。その向うにもう一部屋あって、椅子に腰かけた人影が見えた。いや、自由に腰かけているのではない。裸身にギリギリ巻きつけられた荒縄から、椅子に縛りつけられていることがわかる。

向う側に高橋侍従があらわれて、縛られた女を椅子ごと硝子壁の方に近づけてきた。



黒い布で目かくしをされている。こちら側の照明が消されると同時に、その目かくしがとられた。

眩しように目をしばたたかせているその裸女を一目見て、メリー王女が叫んだ。

「オオ、ジャネットじゃないの。あなたまで……」

ウインザー城で、小さいときから身の廻りを世話してもらっていたイングリッド卿夫人に王女は母のような敬意と、姉のような親しみを抱いている。その夫人が、所もあらうに、こんなところに裸身を曝している。永い間、親しくしていても、まだ見たこともなかった夫人の身体は三十才とは思えない程のみずみずしさであった。その豊かな乳房は、上下に喰い込んだ太縄のために、せり出して一層、大きく見える。

しきりに夫人の名を呼びつづけるメリー王女に、エミー司令が声をかけた。

「よしなさい。聞えはしないのだから」

イングリッド夫人の方から見て、この硝子壁は鏡としか見えない。夫人の方は、ただ自分の無残な姿が映っている鏡を見て、恐怖に戦っていたのである。

「ナウ（さて）……」

エミー司令がメリー王女の、むき出しの肩に手をかけた。ピクッと慄えて、王女が振り

かえった。

「あなたが、こちらの言いつけ通りになさらないのなら、お隣の奥さんが苦しむことになります」

「ヒ、卑怯な……」

唇を噛む王女に、再び跪くようにという命令が下される。だが、その屈辱は余りにも肯んじ難かった。遂に王女は動かなかったのである。

「ギャーッ」

おそろしい悲鳴が、マイクを通して、聞えた。ハッと顔を向けた王女は、思わずヘタヘタと坐り込んでしまった。

ただ見る。夫人の双の乳首に細い針金が巻

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

きつけられて、電撃がその全身を貫いていたのである。

苦痛の余り、小便が洩れ出しているのさえハッキリと見えた。

「どうです。それでも、まだ反抗しますか」
冷静にエミー司令が、たずねた。

顔を手でかくして泣いている王女の頭が幽かに動いた。

「イエス——ですね」

覗き込むようにして確認するエミー司令に今度はハッキリ、

「イエス、サー」

と答えて頭をあげた王女の顔は、ジャネット・イングリス夫人のために、自らをイケニエにしようとする決意の高揚のために、神々しいまでに輝いて見えた。

何か合図があったらしく、夫人の乳首から針金が、とり去られた。グッタリと頭を落した夫人は、死んだように動かなかった。

遂にメリー王女は屈服した。そして、奴隷のように有明の足もとに平伏し、きれぎれな声で、どんなことでも言われた通りにするか、あのように酷い拷問を夫人にしないでくれと訴えたのである。

「どんなことでも——とおっしゃったわね」
平伏した白い背中に片足をかけてエミー司令が冷たく言った。

「今夜一晚、ここにいらっしゃる、わたくしたちのマスターを、おなぐさめするのよ。あなたのサービスがマスターのお気に召せば、あの奥さんを許してあげます。何か粗相があれば、あなたの代りに奥さんを罰します。いいですね」

こともあろうに、大英帝国の王女が、娼婦のように身を捧げなければならぬとは。全身をふるわして悲嘆にむせび泣く王女の耳に更に冷酷な有明の声が聞えた。

「エミー。ジョンブル牝の約束は、あてにはならぬ。あかしを立てさせろ」

「あかし——と申しますと？」

「隣室にひいて行って、自分の手で夫人の肉体番号を隠させるのだ。番号はG—二〇一でよい。だが、夫人に王女のことをわからせてはならぬ。夫人の目かくしは外すな。王女には猿ぐつわをかませろ」

「承知いたしました」

うやうやしく答えたエミー司令は、さっき外した王女のT字帯を、今度は王女の口に押し込み引き立てるようにして隣室へ移った。

Mグループ〔空想創作集団〕作品／ある湯治客の話より

《連載》

女の虜囚

(5)

佐治麻造

謙二は、ふてくされて自分の室で、ごろごろして過した。入浴の際に外された戒具は、風呂を出るや否や、すぐに嵌められた。食事の時には外してはくれない。

「飯ぐらい、両手で喰わせておくれよ。第一これじゃ、どうしようもないですよ」

「駄目。口があれば、充分よ。左手は使えるようにして上げてるんだから」

嫂はピシャリと言って、スーパのさじを音もなく啜った。女中のお菊が、からかうような態度を見せながら手助けしてくれて、ようやく食事が済んだ。

少し歩いても、すぐに腰が痛くなる。立つと腰を伸ばせないのだ。腹が立ってガチャガチャ引っ張って見たが、両首と腿がすりむけて痛いだけであった。左手で読んでいた雑誌をほうり出して彼は、ベッドに転がって寝て

しまった。

翌朝、彼は思い切り、朝寝して昼近く起きた。腰を不自然に曲げたまま左手だけで洗顔し、髪を撫でつけるのは全く、いらいらする思いだった。しゃがむと膝の上が、ちぎれる程に痛くて、彼は飛び上って唸った。意地の悪い嫂を呪いたい気持だ。

「起きたの？ おはよう。どう、気分は？」

良人が不在なのに美しく化粧した嫂は、優雅な部屋着をゆるやかに着て、居間のソファで、からかうように言う。

「気分は、とても悪いよ」

「そう、お気の毒ね。少し庭を散歩したら如何？」

「嫂さん、いい加減にしておくれよ。まさか今日も、このままに、しとくんじゃないだろうね？」

「あら、未だ一昼夜しか、経ってないわよ。『当分』と言ったでしよ」

「ちくしょう！」

「ホホホ、まあ、せいぜいガチャガチャやって見るがいいわ。外せたら、お慰みよ。さて、私はこれから外出するわ。帰りは遅くなつてよ」

衣ずれの音と共に、すらりと立ち上った嫂は出て行った。

「待ってくれよ、嫂さん。お願いだから、もう勘弁してくれよ。外してくれよ、ねえ」

ぶざまな恰好で、びっこをひいてドタバタと、廊下を転げるように走って、そのあとを追いつがり哀訴する彼の鼻先で、嫂の部屋の扉がバタンと閉じられた。むしゃくしゃした彼が、みじめな心地で自分の室に寝そべっていると、お菊がコーヒを運んで来た。

「飲ませて差し上げましょうか？」

「からかわないでくれよ。コーヒー位、独りで飲めるさ。嫂さんの奴、ちくしょうめ」

「けど、遊んでいらっしやればいいんですから、そんなに怒らなくてもいいじゃございませんこと？」

彼が穿かされているピンクのパンティを、ちらちら見ながら、お菊が言った。

「殴るぞ、ほんとに……あつ、痛てて！」

もがいた彼は、呻いて顔を、しかめた。

「いくら、おもがきになっても、無駄というものでございますよ。他に何かお入用のものは？」

「そうだ。おい、これの鍵を手に入れて来てくれよ」

「鍵は奥様がお持ちになりました」

「だからさ、これを買った店へ行つて、もう一コ、貰つて来てくれたらいいじゃないか。

ね、いいだろ？ 外へ出やしないよ。嫂さんが戻って来たら、又、こうしてりゃいいんだしさ。ね、頼むよ」

「そんなこと出来ませんわ。それに、戒具の鍵だけは売ってくれませんもの」

そう言つてお菊は出て行き、彼は「勝手にしやがれ」

と寝転がったが、大の字になる訳には行かないのだった。午後おそく、彼に電話が掛かつて来た。彼が事件を起した時、同乗していた三人の令嬢達からだ。

「保釈になったんですってね。よかったわ。おめでとう。腕のいい、法理士さんねえ」

「あんまり、おめでたくもないんだよ」

「えっ、どうしたの？」

「いや、何……」

「あのね、私達のパーティに来ない？ 蘭子さんのお家でやるの。すぐ来てよ」

「せ、せっかくだけど、まずいんだ。実は禁足、喰ってるんだ。嫂さんの奴、保証人になつてくれたのはいいんだけど、威張り散らしやがって……」

「あら、そうお。いいじゃないのさ、こっそり出といでよ」

「そ、それが駄目なんだってば」

受話器と一緒に左手に持った煙草の煙にむせながら、彼は右手右膝を、いまいましてうに見やうた。

「それなら、私達が、そっちへ行くわ」

「駄、駄目だったら！」

「何故なのさ？ あの時は私達だって大変だったのよ。そっちへ行つて、お話するわ」

切れた電話を持つて彼は舌打ちした。嫂がつくづくと恨めしかった。自室に閉じこもっている、やがてお菊が扉をあけて顔を出した。

「おやっ？ おい、鍵を掛けてあつたら？」

勝手に開けちゃ、いけないじゃないか」

「でも、奥様が時々入つて見るようにと、おっしゃつて予備の鍵を、お預かりしてますのよ。鍵が掛かつていても、あけていいって」

「畜生！ 監視付か。自殺なんか、しやしなから安心しな。所で、何だ？」

「あの、お客様です。お嬢様達、お三人」

「帰つて貰つてくれよ。そう言つてあつただろ。こんなさまで会えるもんか」

「でも、無理に上つて来られるんですもの」

お菊を押しつけて、三人の令嬢達がドヤドヤと入つて来てしまった。

「ああ、その恰好、一体どうしたの？ 保釈になったんじゃないの？」

驚いてジロジロ眺める令嬢達を見上げて、彼はしようことなしに起き上つて、照れ臭そうに笑つた。体を動かすと鋼鉄が触れ合つてカチャカチャ鳴る。

「あ、分つたわ。お嫂さんに、そんな風にされたのね。珍しい道具ね。それじゃ出歩けな

い訳ね。可哀想みたい」

「そうなんだよ。昨日から外してくれないんだ。全く、ひどいよ」

「ぶッ。あんなもの、穿かされて。お嬢さんも意地が悪いのねえ」

令嬢達は、遠慮なく吹き出して笑う。

「脱ぎや、いいじゃないの？」

「馬鹿ね、脱げないのよ。よく見て御覧よ」

「ねえ、鍵を探して来て上げようか？ 私の
とこの奴隷用の中に、合うのがあるかも知れ
なくてよ」

「あら、そんなこと、しない方がいいわ。問題になると大変よ。謙二さんは刑事被告人なのよ。奴隷のような訳には行かないことよ」少しは頭の良い、物の分る美沙子が、たしなめた。

「辛かったでしょ。ひどいんですってね」

「私達も、あの日は大変だったのよ。夕方まで帰してくれないの。いろいろ調べられて、泣き出しちゃったわ。だって、凄く乱暴な言い方で叱るんですもの」

「そしてね、迎えが来るまで、保護室というのに入れられたのよ。保護室といたって、牢屋と同じなのよ。汚れた畳が敷いてあって鉄格子に錠が掛かるの。皆、わんわん泣いち

やっ
たわ」

「同じ年位の婦人警官に体中を調べられてさ
情けないったら、なかったわねえ」

「それも、みんな謙二さんのせいよ」

「No. 6」

令嬢達は口をとがらせて、謙二を責めた。

「でも、いいわ、赦したげる。謙二さんも、

「あら、謙二さんは、これで済んだんじゃないかってよ。裁判、どうなるかしら？」

それを言われるのが、彼には辛かった。間もなく受けねばならない裁きの結果が恐ろしかった。覚悟はしているつもりでも、刑を想うと背筋が凍る思いだった。

「監獄へ入れられるの？」

最も年下の蘭子が、さも恐ろしそうに言つた。

「けど、あんな貧乏人の男の一人や二人、轢き殺したって、いいじゃないの。そう思わないこと？ それに、わざとしたんじゃないのよ。過ちなのよ。そうでしょ」

由紀子がわざとらしい明るい声で言った。

「あ、思い出したわ。あの男のおかみさんや親類の人がね、賠償金を要求してるのよ。いずれ、裁判で決まるでしょうけど、貧乏人の

癖に呆れた額なのよ。それでね、私の父が、賠償金は均等に負担させて貰いたいと言ってるの。この人達の御両親も皆そうよ」

賠償金の一部位を負担して貰って何になろう。俺は監獄へ行かなきゃならないんだのに
と思うと、謙二の胸は悲しさで口惜しさで一杯だった。恐ろしさに思い煩う彼を前に、令嬢達は遠慮なく飲み喰いして騒ぎ、やがて座が白けて彼女達は帰って行った。

「さよなら。外出できなくて、お気の毒ね」

「裁判の時は知らせてね、傍聴に行くから」
「心配しなくても参考人として出頭しなくち
やならないかも知れなくてよ」

美沙子が知ったかぶりをして言った。

「あら、ほんと？ いやあね」

令嬢達が賑やかに去って行ったあと、彼は所在なさに寝そべる他なかった。

嫂は大分、遅くなって帰つて来た。しばらく経って、お菊が呼びに来た。

「奥様が、お呼びでございますよ」

「何の用だい？　これを外してくれるんなら行くけど、そうでなきゃ嫌だと言ってくれ」

「お風呂へ入るようにとのことですよ」

「あがったら又、すぐにガチャンだろ。入らなくてもいいよ。そう言ってくれ」

「あら、奥様のいいつけですよ。でも、いいですわ。そう申し上げて来ますから」

彼は、あわてて起き上った。

「行くよ行くよ。畜生！」

嫂は、浴室に続く豪華な化粧室で、肩を大きく見せて何かを肌に塗っていた。悩ましい香りが、湯気の匂いと共に立ちこめている。嫂は流石に肩を覆いながら、鍵を投げた。

「黙りこんでるけど、怒ってるの？」

嫂は鏡の中で笑って言う。

「当り前さ」

「そう。そんな口を利くんなら、まだまだ外して上げる訳には行かないわね。おや、手首を大分、痛めてるじゃないの？ ホホホ」

外した戒具に鍵を突っ込んだまま、ほうり出して彼は浴室に飛び込んだ。

あがって来ると、お菊が待ち構えていた。

「これに、お穿き替えになつて」

今度は、フリルの付いた黒いナイロンパンティを穿かされた。お菊が持ち上げた戒具が彼の背後でカチャリと音を立てる。

「奥様から、いいつかつたのですから、嵌めますよ」

やり切れない思いで彼は両手を挙げて伸びをした。

「待ってくれよ。体操するんだから」

戒具を手に持ったお菊を待たせて彼が、わざと、いつまでも体操していると、彼女の手が、いきなり彼の右手を捕え、鋼鉄の環が手首に鳴った。

「いい加減にして下さいな」

驚く彼に、お菊が、ぴしゃりと言う。右腕が下に引き下げられ、右膝の上を大きな鉄環が締めつけて喰い込んだ。一瞬、彼は、お菊が冷酷な婦人警官か婦人看守であるかのような錯覚を感じて身震いした。

「畜生！ うまいもんじゃないか、お前は」

「ホホホ。お八重さんと一カ月交替で、奴隷達を監督してるんですのよ。戒具を掛けるのは馴れてますわ。膝の環、もう少し締めとかなくちゃ」

「か、かんべんしてくれ。頼むよ」

「駄目！」

お菊は容赦なく膝の環を両手で押えて、ギリリ、と鳴らせた。

「奥様に検査して頂いて下さいな」

「ちえっ。検査までされるのかい」

「ともかく御寢室をノックして、そう言っして下さい。いいとおっしゃれば、それで結構ですわ。奥様のお言いつけです」

「又、奥様のお言いつけか。馬鹿にするにも程があらあ。畜生、痛てて」

寢室のドアをノックすると、嫂の声が眠そうに返事した。

「ちょっと待ってよ」

体を曲げたまま立って彼は扉の外で、かなり待たされた。

「ガチャガチャ鳴らせて、ほんとにうるさいじゃないの。さ、見せて御覧」

ようやく扉から体を少し、のぞかせた嫂は既に薄いネグリジェ姿だった。ブラジャーをつけていない乳首が透けて見える。

「いいようね、しっかり嵌まつてるわ」

嫂は白い手で、あくびを押えて笑いながら言い、彼は自由な左手の指をパチンと鳴らせて口惜しがった。

「あなた、早苗とかいう女のひとに会いたくないじゃないって？」

嫂は再び乳色の腕を挙げて、あくびを押えながら、からかうように言った。

「そ、そりゃもう……ね、お願い……」

彼は左手で片手拝みをして、思わず哀願の声を洩らした。

「そう。だけどね、この際、別れた方がいいんじゃない？」

嫂は事もなげに言った。
「赤ちゃんの事は、どうにでも出来るわ」
「ともかく一度でいいから会わせてよ」
彼は齒がみしながら哀訴した。

「ホホホ。別れられそうもないようね。しかし、令子さんとの裁判が済むまでは会わない方がいいと思うわ。私だって独りで寝てるのよ。フッフ、おやすみ」



イメージギャラリー

『可愛い女』

岡 かし

鼻先でドアが閉められてしまった。
翌朝おそく彼が起きて降りて行くと、居間でお八重が嫂に叱られていた。昨日、嫂が出掛ける際、塀の外を掃除していた奴隷の男が油を売って怠けていたのを、見掛けたのだった。

「私の車を見ても、土下座もしないで突っ立ってるのよ。怠けた上に、そんな風な所を、ひと様に見られたら恥かしいじゃないの。お前の責任よ。もっと、ちゃんとするようにおさせよ」

安楽椅子の前に立たされたお八重は、うなだれて叱られていた。

「申し訳ございません。今後、気をつけますから、お赦し下さいまし」

「そんなことじゃ、奴隷達を二人共、売り飛ばしてさ、あれ等がやってた事も、お前達にやらせるわよ。いい？ 奴隷を使うのも中々苦労が要ることなのよ。つけ上らせちゃ、ひと様に笑われるわ」

自らは決して奴隷には口も利かず、直接に使う事は絶対にしない嫂は、お八重を散々に油を絞るのだった。

「今後、気をつけなさい。懲罰を与えたら、あとで報告おし。お退り」

「ハイ」

嫂は、かなり不機嫌だった。

「嫂さん、ちょっとでいいから外してくれないか、手首が痛いよ。皮が剥けてるんだよ。薬をつけなきゃ」

顔をしかめて頼む彼に、

「うるさいわね」

素っ気なく嫂は言った。

「わがまま言ううと承知しないわよ。これ、ごらん！」

嫂は外国からの航空郵便の封筒を彼に投げた。兄の俊一からの手紙だった。

「どうしても、予定が五週間、延びるんだって。それは、いいのよ。長くなるようなら、私も行く予定だったんだから。それが、あなたのために行けないじゃないの！」

仕事第一の兄は、彼のために帰って来るところではないのだった。それは仕方ないとしても、保釈保証人の嫂が海外へ旅立てば当然彼の保釈は取消される。

「因果と違って諦めるわ。だから、あなたも私の気に触れるような事しちゃ駄目よ。俊一の頼みだから仕様ないわ」

彼はホッとして煙草をくわえた。

「考えても御覧。本当なら、あなたは今頃、

檻の中で唸ってなきゃならないのよ。そんな煙草なんか吸えやしないし、水一滴だって自由には飲めないのよ。そんなにブラブラしていられるのも誰のお蔭だと思ってるの？」

外国の旅に行きそびれた嫂は当り散らす。

「どうせ監獄へ入れられてしまうんだから、少しの間でも楽にして上げようと思って、いろいろ奔走して上げたのよ。分ってるの？」

「わ、わかっているよ。けど、やはり監獄へ行かなきゃならないのかい？ ど、どの位、入れられるだろう」

「そんな事、知らないわよ。明日、法理士さんが来るから訊ねてごらん」

嫂は冷たく言い捨てた。遠く地下室のあたりで悲鳴が聞え、絶え入るような呻きが断続した。

彼は震え上ったが嫂は眉一つ動かさない。

「くよくよしたって仕方ないじゃないの。そんなに長い事じゃないでしょ。辛抱して勤めて来るのね」

彼は左手で顔を掩って鼻を吸った。

「自業自得よ。知ってるでしょうけど懲役って苦しいわよ。私、学生の時、見学に行ってるの。生地獄ね。身動きも出来ないように枷と鎖をつけられて、労役させられてた

わ。うちの奴隷なんか、それに較べれば天国のようなものね。あなたに辛抱できるかしら？ けど辛抱できないたって仕方ないのよね。謙二さんだって、それしかなければ、あのドロドロの気味悪い囚人食を喰ったんでしょ？」

彼は耳を掩いたい思いだった。

「女囚には使われない銃も嵌められるわよ。

あれ、とっても苦しくて切ないんだって」

「よ、よしてくれ」

彼は片手で頭を掻きむしって叫んだ。

「ホホホ。だからね、今のその戒具だって、ぶつぶつ言わないで我慢おし。少しは馴れといた方が、よくはなくて？」

彼を散々からかった末、嫂は今日も美しく粧って外出して行った。

その日の午後、相前後して二通の告知状が裁判所から送達された。一週間後の第一回公判を通告するものが一通、他の一通は、それから三日後の調停裁判に出頭を命じる家裁からのものだった。

翌日のひる前、法理士がやって来た。引き締まった体つきの精悍そうな男だ。

「ともかく事実については争う余地なしです

からね。非を認めて、ひたすら恐縮する他ありませんな」

謙二は、ただうなづくばかりだった。嫂も同席していたが、戒具は嵌められたままだった。謙二は恥かしくて堪えられなかったが、法理士の男は意にも介しなかった。

「で、その、どの位の刑に？」

謙二は、おそろおそろ訊ねた。

「ズバリ言って執行猶予は難かしいですな。

出来るだけ努力はしますがね。先ず三年か三年半、悪くすると五年ですかな」

法理士は事もなげに言った。

「それに御存知でしょうが賠償金を課されますし、悪質違反ですから、晒しが附加されますな」

謙二は息を呑んで身震いし、法理士はシガーを啣え、嫂が、それに火をつけてやった。

「二、三回の公判で片付くでしょう。もっとも引き延ばせとおっしゃるなら、引き延ばします」

「どうせ同じ事じゃありません？ 早くケリがついた方が、本人も却っていいでしょうし永びくと私が第一、迷惑ですわ」

美しい嫂は薄情だった。

「判決があまりひどいようなら、再審を訴願

できますしね。かなり費用がかかりますが。新聞なんかで大分、叩かれましたね、ちょっと不利ですなあ」

「私、すぐ手を回したんだけど、押え切れな新聞だって相当、あったのよ」

「まあ、ともかく三、四年は辛抱する覚悟でいて下さいよ」

「被害者の遺族に謝りに行っても無駄でしょうか？」

「今となっては、そんな事したって、同じですな」

法理士はシガーを灰皿に押しつけながら続けた。

「今度の国会に監獄法の大改正の法案が上程される筈なんですがね。つまり、これは仮称ですが、刑務所という行刑機関が新設されるんですな。今の監獄より、かなり、ゆるやかな扱いをしようという訳で、非破廉恥罪の連中を収容して強盗や泥棒なんかと區別してやるうという狙いなんですな」

謙二は耳を、そば立てた。

「非破廉恥罪というのは、つまり政治犯とか思想犯とか過失犯とか、それから為替法、税法、労働法、医師薬剤師法、衛生法と……まああったかなあ。自首した場合は勿論どんな

犯罪でもですが、ともかく、そういった行政法関係の違反、それから賭博犯、そうそう選挙法があったつけ。それに、背任罪の一部と……。売春関係は、どうだったかな。まあ、その區別には種々論争があるでしょうがね。そう言ったものですな」

「そ、そしたら私は過失なんですから……」

謙二は勢い込んで言った。

「ええ、勿論そうなんですがね、残念ながら実施されるにしても二、三年先のことになりましょうからね」

謙二は失望して、うなだれた。

「女性は今現在でも大分、優遇されていますなあ。婦人矯正院なんてものがあるんですからな。売春関係は、先ず殆ど矯正院行きで済むし、軽い初犯なら、やはりそうですから、野郎は損ですよ。しかしね、実は刑務所のテストケースとして、非破廉恥罪の囚人ばかりを集めた監獄があるんですよ。四国のK市なんです。そこへ収容して貰えるように工作して見ますよ。そりゃ、大分、違うという話ですな。あなたの場合、どっちにしても、余程のことがなければ三級囚より下がることはないんです」

法理士は帰りがけに費用を請求し、嫂は謙

二に支払いを命じた。すべてを早苗に与えてしまった彼はうろたえ、立て替えて小切手を切った。彼は柳眉を逆立てて立腹した。

「横つら張り倒して上げたい位だわ。ほんとに呆れてしまうわね」

「取って来ようか？」

「いいわよ、あとで固めて払って貰うから。」

あの女のひと、信用できるの？ 万一のことがあったら、あなた一文なしになって奴隷にならなくちゃならなくなるわよ。私、知らないことよ」

彼が何と言おうと、彼は、早苗を信じていた。その心配は全くしない彼であったが、獄に繋がれるまでに、どうしても彼女と会って愛児の籍のことを相談しておきたかった。しかし彼は、彼が如何に哀願しても外出を許してはくれなかったし、お菊は電話の取り次ぎもしてはくれないのだった。公判の前日、彼は頭を坊主刈りにされた。お菊がバリカンを持って来て、

「奥様のおいつけですから、頭の毛を刈りますよ。罪を悔いて神妙さを表した方がいいんですって」

有無をいわさず丸坊主に刈ってしまった。翌朝、法理士が迎えに来て、彼はようやく

戒具を外してくれた。

「ずい分、早いね。けど早く行ってた方がいいわ。遅れると大変なもの。私、用があつて行けないのよ。代りにお菊をやるからね。坊主頭が、よく似合つてよ」

未だ寝間衣の上にガウンを羽織ったままの彼女は髪を撫で上げながら眠そうに言った。

久し振りに服を着て頭をソフトでかくし、腰を伸ばして道を歩くと、体が浮くようだったが、公判のことを思うと気が滅入った。娘が車を使わせてくれないのでタクシーを拾った。指定の三十七号法廷は三階にあった。

「未だ一時間程、ありますな。時刻通り始まることは稀ですがね。しかし、あなたは、ずっと、ここにいた方がいいですよ。呼ばれていないと心証を害しますからね」

法理士はそう言って法廷の入口の壁の掲示を眺めた。

「今日は五件か。三番目だから、ひよっとすると午後になるかな。しかし、判決だったら早いですからね」

謙二とお菊は廊下のベンチに腰掛けて恐ろしそうに、あたりを眺めた。鎖の音がして、やがて二名の囚人が一人の婦人看守に追われて廊下を曲って、こっちへやって来た。鞭痕

だらけの全身の肌を見せたその二名の囚人は屈強な若い男で、鼻環、首環、腰枷、両手両足の重そうな鉄枷は太い鎖で繋ぎ合わされ、胸や両腋下のあたりに、痛そうな鎖を締めつけられている。激しい労役を済ませて来たらしく全身は汗で光り、濡れたバケツを手錠の両手で持って膝や腰を曲げたまま腰の連鎖をジャラジャラ鳴らせ、素足の足裏をヒタヒタとベンチの前を通り過ぎて行く。

「まあ！」

お菊は恐ろしそうに身を引しながら、それでもジロジロと囚人達を眺めた。

「既決囚の奴等ですよ。廊下を磨いてたんだな」

法理士は事もなげに言って磨き立てた靴をこれもピカピカに磨き上げられた廊下にキュツと鳴らせた。通り過ぎた囚人の一人が、両足首を繋ぐ鎖を廊下に、ジャラリと引きずった。あわてて腰、膝を少し伸ばして吊鎖を引き上げる。しかし背後を歩く婦人看守の右手の鞭が早くも振り上げられて、囚人の腿のあたりに激しく鳴った。

「廊下に傷がつくじゃないの！」

もう一撃が更に加えられ、囚人は嵌口具に抑えられた悲鳴を洩らして身をよじった。

「何度、言ったら分るの！ そのために足鎖を短く吊ってあるんだから」

婦人看守のキツチリしたスカートの廊下の角を曲るのを見送ってお菊は、

「どこへ連れて行かれるのかしら？」

「監房に決まっていますよ。さてと、私はちょっと顔を出す所がありますから」

法理士は、どこかへ去った。息せき切って

五人の婦人が現われた。地味なスーツを着た中年の婦人が書類挟みから書類を取り出し、七号法廷の隣の室に、あたふたと入る。廊下に残った四人の婦人は三十前後から四十五、六才位の連中で、地味にしているつもりでもどこか、華やかさが見受けられる和服姿だった。

「間に合って、よかったわね」

「あわてなくてもいいのに。三階まで昇るのは、えらいわ」

扇子やハンカチを使いながら彼女達は口々に言っている間に腰を下ろした。

「今日は、もう判決よ。今更、少し位おくれだって、もう変りはないわよ」

一きわ色気のある女が、そう言って煙草に火をつけた。

「私、こわいわ。どんな言い渡しを受けるの

かしら？ おそろしくて昨夜は眠れなかったのよ」

最も年若い女が、蒼ざめた顔で唇をわななかせて喘ぐように言った。

「ほんとね。手錠や鎖は思っただけで身震いするわ。執行猶予になって欲しいわねえ」

「アラ、執行猶予だってさ、月に何回か出頭して油を絞られるのよ。知らないの？ ちょっと火を貸して頂戴」

体の線が、あだっぽく崩れて小股の切れ上った感じの女がそう言って、もう一人の女の煙草を取り上げた。

「あんたは何したの？」
と、お菊に訊ねかける。

「アラ、私はこの人の付き添いで来たのよ」
お菊が謙二を顎で示して口をとがらせた。

「そうお、結構ね。すると、こちらの丸坊主頭の人が何とか違反の過失致死罪っていう訳

ね。けど人を殺して、よく保釈になったわねえ。私達はね、バクチで挙げられたのよ。も

っと多勢で珠数繋ぎで引っ張られたんだけど私達四人だけ起訴されたの」

もう一人の色っぽい女が煙草を、もみ消し

「私達二人が張本人なのよ。だって、旦那は滅多に来てくれないしさ、この人のバーは暇

で仕様がないうんだもの。二人でお金持の奥様達を誘って、しょっちゅう、やってたのよ。

あっちのお二人は、立派な御亭主があるのにさ、常習犯で余り度が過ぎるって、起訴されたの」

「私達を恨んでるらしいけど仕方ないじゃないの。あら、お邸の人達がお上品な恰好でやって来たわ。傍聴する気なのね」

「私なんか誰も来ないように言っているわ」

「私もよ。アラ私達の坊やがやっと来たわ」

法理士のバッジをつけた若いハンサムな青年が、あたふたと、やって来た。続いて貫禄のある年配の法理士が悠然と現われて、二号

夫人とバーのマダムとハンサムな法理士に手を上げて小馬鹿にしたような笑みを浮べ、そ

して依頼人の夫人に近寄る。人々がざわめいて、若い女が廊下の片側に体をすりつけるよ

うにして、うなだれてやって来た。白い素足に藁草履をはいた、その女のワンピースは、

しわが目立ち、肘のあたりから剥き出しの両手は体の前に揃えて垂れて、両手首には手錠

がキラリと光って居る。その手錠を押えて腰をくびる捕縄の縄尻を握る婦人看守は、女囚

の背を無慈悲に小突いて人々の間を急ぎ立てた。

「あの被告人が最初ですね」

ハンサムな法理士が、法廷の扉に消える手錠の女を見送って言った。

そこへ廷吏が現われて、

「静かにしないか」

と廊下の人々を制した。低い話声が溜息と嘆息を交えて、ひそひそと断続し、裁きを待つ者の顔は次第に蒼ざめて行った。法廷に曳かれた若い女囚は判決だったらしく、間もなく出て来た。血の気の失せた顔は、悲しみと恐怖でひきつれたように硬張り、廊下の曲り角で一声すすり上げた女囚は、婦人看守に背を押されて、よろめきながら、とぼとぼと曳かれて去った。

法吏に抱かれるようにして法廷から、よろめき出た母親らしい小柄な婦人が、女囚の後姿を見送ってハンカチを顔に押し当てて鳴咽した。

四名の婦人の名が読み上げられ、人々は押し黙って、ぞろぞろと法廷に入り、謙二とお菊は廊下のベンチに残された。その時、赤児を抱いた早苗が白い額に汗を滲ませてやって来たので、謙二は驚喜して立ち上った。「今朝になって、やっと分ったのよ。間に合ってたわ」

そっぽを向くお菊をよそに謙二と早苗は、もどかしげに語り合う。法廷の扉が開いて二人の有閑夫人が人々に取り巻かれながら喜々として出て来た。続いて二号夫人とバーのマダムが悄然と足取りも重く、恨めしげな様子で現われた。

「畜生！ あいつ達、うまくやったわね」

マダムが目吊り上げて口惜しげに呟く。「仕様ないわよ。こちららは堅気じゃなし、第一、あの坊やじゃねえ。ああ、ブチ込まれるまで面白く暮そうじゃないの」

「けど、悪くても矯正院で済むと思ってたのにさ、監獄とは、ひどいじゃないの。三年半も懲役暮しじゃ、とてもじゃないけど、死んでしまうわ」

「逃げて隠れてやろうかしら」

流石に悲しそうな彼女達の前に、制服をピツタリと着こなした二人の婦人看守が、つかつかと現われた。金色の襟章が目射るようだった。愕然と息を呑む二人の女を、それぞれキッと正面から見据えた婦人看守達は、きびしい声で

「高倉ゆき。収監状を執行する」

「仰木千影。収監状を執行する」

言い渡すと同時に、二人の女の右手首に手

錠がバシッと喰い込んでいた。二号夫人は抱えた細長いハンドバッグを取り落としたまま左手首にもガチャリと鳴る手錠を見詰めて茫然としていたが、バーのマダムの方は握られた左手を激しく振り払って抵抗した。

「嫌っ、あ、あんまり早いじゃないの。一ぺん帰してくれたら、どうなの！ 痛いっ。畜生！」

襟元をばだけ、裾を乱して精一杯の抵抗を試みたマダムも、数秒の後には両手首を繋ぐ手錠を見下ろして、唇を噛んだ。立ち去りかけていた有閑夫人の団の男女が、振り返って眉をひそめて眺めた。

「あの女達だって私達と同じなんだよ。それなのに……。く、くやしいっ」

マダムは手錠がガチャガチャと引っ張り、粹な草履が脱げて飛んだ白足袋で、廊下の床を地団駄踏んで歯ぎしりして喚く。

「静かにおし」

マダムの頬に激しいピンタが飛び、マダムは身をよじってヒーツと泣き、人々は振り返りながら去って行く。

「そんなに暴れると腕時計が壊れるわよ。素晴らしい時計ね。外しといて上げるわ」

「余計な御世話だよ。ほっとしておくれ」

「すぐに、そんな口の利き方は出来ないようにしてやるからね。覚悟を申し！」

マダムの手錠の環がカチカチと締まって

「い、痛いよ。手が千切れるウ。そんなに締めつけないでよ」

マダムは悲鳴を挙げた。

二人の女に腰縄を打って、手早く身体検査をした婦人看守は、

「さ、ハンドバッグを拾って。お前は草履も拾うんだよ。穿かなくてもいいの」

口惜しげに目を見交わし、恨めしそうに婦人看守を見やったマダムと二号夫人は身を屈めた。腰縄で手錠を抑えられて拾えない二人の女囚は、みじめな思いで顔を歪める。

「早く拾うんだよ」

屈めた腰を蹴られた二人の女囚は、膝を床につき、裾を更に乱して、やっこの思いで拾い上げた。こみ上げるみじめさに、二号夫人の白い咽喉が震えて嗚咽が洩れる。

「草履も拾えと言ったろ！」

「だって指が動かないんだもの。痛いわア。ちよっと、ゆるめてよ」

「口答える気かい？」

縄尻が空を切ってマダムの腿にピシリと鳴った。

「指が動かなきゃ口でくわえるのよ。これ誰が穿いていいと言ったの？」

思い切り腰縄を引かれて、草履の方に延ばした足を空に舞わせたマダムは、尻餅をついて呻いた。

「ひ、ひどいことするじゃないの」

「自分を何だと思ってるの？ 懲役囚なんだよ。鞭を当てようか？」

ビクツとしたマダムは、すすり上げながら床をいざって、ようやく草履をも拾い上げ、手錠の両手に持った。

「さ、お立ち。手数かけるわね」

腰縄をグイと引き上げられたマダムは呻きながら、よろよろと立ち上ってヒイと一声、すすり上げ、二号夫人のあとを追って、うなだれて引き立てられて去った。

「あんなのを見ると嫌で嫌で、おそろしくて堪まらないわ」

抱いた赤児に顔を押し当てていた早苗が、唇を震わせて呟き、謙二の手を、そっと握った。仄温かい柔らかな手だった。

粗末な身なりの男女が三人、現われて、少し離れて佇み、憎しみのこもる目差しで謙二の方を睨んだ。被害者の母と妻と兄が傍聴に来たのだ。謙二の法理士も戻って来て、やが

て廷吏が横柄な態度で入廷を促した。

第一回公判は正午近くに終った。額を拭いながら法廷を出た謙二は、出会い頭に襟章を光らせた婦人看守に正面から出会って恐怖に立ちすくんだが、彼女はそのまま通り過ぎて行った。

「そんなに怖がらなくてもいいですよ」

法理士は精悍な顔に苦笑を浮べて、謙二の肩を叩いて言った。お菊に有無を言わさずタクシーに乗せられた彼を、早苗は赤児を抱いて路傍に佇み、泣きそうな顔で見送った。

「奥様のお言いつけですから真直ぐに帰って頂きますわ」

冷ややかに言うお菊を撲り倒したい程の思いだった。帰郷するや否や、お菊は例の戒具とパンティを持ってやって来た。

「嫂さんは、いないんだろ？ いいじゃないか。少しの間位、勘弁してくれよ」

「奥様のお言いつけです」

お菊は、きびしい声で、ぴしりと言う。口惜しかったが、嫂の怒りに触れると大変だった。今日裁判所で見た未決囚達の姿を思い浮べると、この小娘の女中の命令に従わない訳には行かないのだ。パンティ一枚の姿になった彼は、右膝と右手首を短く繋がるべく身

を屈め、しゃがんだお菊のうなじのあたりを歯ざしりする思いで、睨みつけるのだった。

三日の後、謙二は、やはり、お菊に監視されて今度は家庭裁判所へ出頭した。頭髪を刈られた謙二を令子は嘲りの色を浮べて見ながら己れの主張と要求を変えなかった。調停が始まってからも、謙二が早苗を愛し続けている事を立証する私立探偵の調査書類が提出さ

れた。謙二は、早苗との間に子供すらある事をも、認めざるを得なかった。

「円満に元の鞘に納まるのは、どうしても駄目なようですな」

年配の調停委員の男が言った。

「私も、そう思いますわ。被申立人の方は現在刑事被告人ですし、急がないと……」

上品な老婦人の委員が眉を寄せて言う。



イメージギャラリー

『室内スキー』

岡 かし

「では遺憾なことです、不調と認めます。出来るだけ早く結審します」

調停の最初から沈黙を続けていた立ち会い判事の婦人が初めて口を開いて宣した。

憎悪と嘲りに満ちた視線を彼に投げた令子は、颯爽とあとも見ずに立ち去った。

静かな住宅街の一角にある、家裁の玄関のゆるやかな広い階段を降りたが、タクシーがなかった。令子の運転する外車の後姿を舌打ちして見送った謙二とお菊は、車を探しに賑やかなターミナルの方へと歩いた。

そして彼はターミナルの近くで遂に、お菊の隙をうかがって、その監視から逃げ出したのだった。やさしい早苗の声を聞き、その白く愛らしく、くびれた顎のあたりを、軽くパットしてやりたくて、矢も楯も堪まらなくなったのだ。

早苗は、おろおろしながらも、嬉しさを隠し切れずに迎えてくれた。

近所の公衆電話で嫂の許しを乞うたが、嫂は電話口に出なかった。夕方までには必ず帰るからと、電話口のお八重に、繰り返し言った彼であったが、夜が更けても立ち去り兼ねた。覚悟を決めた早苗は、去れとも去るなとも口には出さなかったが、その愛情は、いつ

になく激しかった。

そして遂に夜が白み、朝が来た。おそい朝食の用意をする早苗の気配を聞きながら、彼は、うとうととしていた。先刻、彼の枕許で早苗の白い胸乳を吸った赤児が傍らの小さな布団に眠る姿を眺めて、彼は満ち足りた想いだった。嫂の怒りを思うと怖ろしかったが、後悔の念は少しもなかった。ただ、嫂の思いやりの情を頼むだけであった。隣室に食卓の音と、早苗が低く口ずさむ古い唄のハミングが聞えた。

その時突然、玄関の戸が激しく叩かれた。ガバと跳ね起きた彼は、下着を抱えて押入れに飛び込んだ。

「森謙二が、いるでしょう？」

玄関に入る足音がして、きびしい声が狭い家の中を筒抜けて響く。

「そんな人は、おりませんわ」

早苗が、しっかりした声で言うのを聞いて彼は驚いた。

「ともかく探しますからね、退きなさい。邪魔すると、公務執行妨害になるわよ」

謙二の胸は、割れんばかりに早鐘をつき、目も昏み、咽喉がカラカラに乾く。狭い家は一步入れば見通しだった。

「フン。嘘をついたって駄目よ。お前さんも逮捕しようかしら。被告人隠匿罪よ」

もう一人の婦人係官が、かすれ気味の声で言うのを模越しに身近に聞いた彼は、堪まらなくなつて押入れから転がり出てヘタヘタと坐り込んで喘いだ。

「ホホホ、いたわね」

ドレスを着た婦人と制服制帽の婦人が、彼を見下ろして笑った。

「保釈取り消しよ。収監します」

ドレスの婦人が、令状を突きつけた。

「令状を読まないの。読む力もないようね。」

読んだって同じことだけだ。さ、お立ち」

制服の婦人がスカートのポケットから手錠を取り出し、環をギリギリ鳴らせて握り直しながら、長いまつげの目を少し細めるようにし、唇に冷笑を浮べて言う。

「な、なぜですか？ 逃げた訳じゃないんです。ちゃんと電話で知らせました」

やっとの思いで立ち上がりながら、彼は必死に抗弁した。

「ホホホ。保釈保証人の要請なのよ。今更、何言ってるのさ。手を出して」

彼の両手に非情な手錠が鳴って喰い込み、早苗が隅に崩折れて顔を掩った。眼を覚まし

た赤児が泣き出した。

「パンツ位、おはきよ。許したげるわ」

気付いた彼は全身を赤くしながら不自由な両手でパンツを穿き、再び向き直って立ちつくんだ。

「服を着せて上げて下さいまし、お願いでございます。これじゃ、あんまり、可哀想ですわ」

いざり寄った早苗が、彼の両手首の手錠を撫でながら、制服の婦人のスカートに取り纏るようにして哀願した。制服の婦人の手は、既に捕縄の束を解いていた。

「そのままの状態で拘引するのが規則です。」

邪魔しない。何なら、差入れおしよ」

婦人刑務官は、きびしく言って早苗を突き退け、彼の腰に捕縄を回した。

「手を下ろすのよ」

叱り飛ばされた彼は両手を顔から離し、その両手の手錠は腰縄で、しっかりと抑えられ腰をきつくくびった捕縄は、腰の後ろの結び目から二条延びて、制服の婦人が握った。

「さ、来るのよ」

ぐいと曳かれる縄尻に、腰縄が更に喰い込む。赤児を抱いてべたりと坐り茫然と見送る早苗の悲しげな顔が、もはや拭うすべもない

涙でかすむ目にボンヤリと映って、彼はよろよろと引き立てられた。開いたままの玄関には、覗き込む顔が、ちらちらした。

「退いて、退いて」

近所の人々の、ひそひそ声を背に受けて、素足で道を数歩、曳かれた彼は、激しく噁り上げて振り向いた。群がる人々の視線を受けながら、赤児を抱いて立ちすくんで見送る早苗の姿があった。もう一度だけ、その頼りなげな体を抱き締めてやりたかった。しかし、もはや手錠、腰縄付きのこの身には、許されることではなかった。

「さっさと行くのよ」

縄尻が腿のあたりに鳴り、背を邪怪に押されて、彼はガクガクする足を悲しく踏みしめる。薄情な嫂の仕打ちが身に沁みて怨めしかった。しかし最早、如何ともするすべはないのだ。みじめな姿を人々の眼に晒して街を曳かれて行く彼を待っているのは、冷たく暗い監房と鉄鎖なのだ。婦人係官達は自動車を拾おうとせず、駅の方へ彼を曳いて行く。賑やかな街が近づくにつれて、彼は恥かしさに堪えられなくなった。

「お願いです。タクシーに乗せて下さい」

「フン。お前が払うのなら、乗ってもいいわ

よ。お金あるの？ ホホホ」

縄尻を握って彼の右側を並んで歩く制服の婦人は、背後でハイヒールを鳴らすドレスの婦人と声を合わせて笑うのだった。彼と同年輩の制服の婦人の紺色のスカートが揺れて、時々彼の右足に触れる。嫂やお菊に自由を拘束されたのとは違って、この婦人は職権を以て彼を拘束したのだ。その権力の非情なきびしさと強大さを見ると、彼の胸は絶望に打ちひしがれるのだった。並んで歩くこの婦人に嵌められた両手の手錠が、手首に重く重く喰い込んで、これからの日々のみじめさ、辛さを思う彼は、課される刑罰の恐ろしさに、わなないた。この婦人は職務を果しているだけなのだ。と、諦めては見るものの、事もなげに手錠を嵌め腰縄を打ち、そして街中を引き立てる彼女が恨めしい。逮捕される時に抵抗もしなかったのが悔まれさえした。浅間しい姿を人目に晒すのは彼には初めてではなかった。高校の時には手錠、足鎖姿を学友達の目に晒して労役させられたし、人を轢いて逮捕された時には手錠姿で息も絶え絶えに走らせる様子を友達の令嬢達や人々に見られ、嘲られた事もあった。婦人警官に護送されてバスに乗った事もあった。しかし、今こうして二人の婦

人係官に曳かれて街を行くのは、何故か嘗てない程の恥かしさ、情けなさだった。駅の中に入るのは全く死ぬ程、辛い思いがした。しかし、冷やかな婦人刑務官は、彼の気持等は全く眼中になく、少しでも足が鈍れば容赦もなく縄尻を鳴らせ、そしてよく透る大声で叱り飛ばすのだ。

「恥かしがったって仕様ないじゃないの。まあ今に慣れるわ。ホラ、あそこを見て御覧。皆、割と平気な顔してるじゃないか」

小突かれた彼が、深々とうなだれた顔を僅かに挙げて上目使いで見ると、駅の一隅に四人の男奴隷達が鎖で繋ぎ合わされて並んでいた。人々は品物を見るような目で彼等を眺め彼等も又、あたりをキョロキョロと平気な顔で見回しながら、後手錠をガチャガチャとその許す僅かな範囲の肌を搔いたり鼻環を舐めたりしている。奴隷にされてから既に永い連中らしく、若い女性に露わな視線を注いで奇声を洩らし、却って社会人の女性の方が赤くなつて、こそこそ去って行く。

彼等奴隷達のマーク刷りの顔にすら、自分に対するさげすみの色を感じて、謙二は消え入りたい程の心地だった。二人の婦人係官に挟まれて電車の席に腰掛けた彼には、周囲の

人々が、すべて敵のような気がした。自由な人々が、ねたましく恨めしかった。パンツ一枚の腿の付根においた両手の手錠に涙がポタポタと落ちた。

この手錠を外して自由にしたい。欲しかった。いずれは監獄に繋がれる身ではあったが、せめてそれまでは自由の身でいたかった。

「お立ち！」

腰縄がグイと曳かれ、彼は辛うじて目頭を指先で押えながら立ち上がった。電車の扉の所で、若い男に素足の指を踏まれて、彼は呻いた。

「フン」

男はジロリと彼を見て鼻の先で笑い、彼は唇を噛んだ。雑踏する駅の階段で若い娘が、ぶつかりそうになって、あわてて、おどましげに身をよけた。

「奴隷かと思ったら囚人なのね。ああ怖い」

彼女は連れの娘さんと顔を見合せて駆け昇って行った。両手を、しゅっ中、顔のあたりへ持って行こうとするので、手錠を抑えた腰縄が少し上へ、ずって来た。

「ちよっと、お待ち。少し、ゆるんだわ」

人通りの激しい通路に立ちすくんだ彼は、腰縄を締め直された。

「どうして、そんなに手を動かすの？　こうしとこうね」

婦人係官の手で、いきなり股縄を掛けられて締め上げられた彼は、その無慈悲さに呻いた。喰い入った腰縄は腰骨一杯まで引き下げられて、もはや、びくとも動かない。再び曳かれて歩み出す彼の尻が、縄尻で軽く打たれた。こうなった上は一刻も早く拘置所へ着いて、人々の目から解放されたかった。知人に会うのが恐ろしい。特に会社の連中に見られたいと思うと、堪まらなかった。謙二の会社は、そんなに遠くない所にあるのだ。深々とうなだれたまま懸命に歩く彼の腰縄は、ともすれば強く張るのだった。

「どこへ行くの？　こっちへ曲がるのよ」

ピンと張った腰縄の縄尻を握った制服の婦人は意地悪くそれを少しゆるめ、そしてすぐにグイと、しゃくるように引っ張って嘲笑った。バランスを失って彼は、よろめき、舗道に膝をつく。

「そんなにあわてて歩かなくてもいいじゃない？　お立ちよ」

股縄は容赦なく喰い込み、彼は大きく喘いで立ち上がった。顔をそむけて通り過ぎた女性の、すんなりした足と体臭が、何故か彼の

目と鼻に強く灼きついて残った。

漸く辿り着いた拘置所で、彼は係から係へと回された。勝手が分らないでウロウロしては叱り飛ばされ、態度が悪いといつては撲られる。

「初めてじゃないんだから、規則は分ってるだろうね？　目をこすっていいと誰が言ったの。顔を、こっちへ出して」

膝を曲げ上体を屈めて、頭を差し延べた彼の頬に、婦人係官は椅子に坐ったまま、デスク越しに往復ビンタを喰わせた。諦めてはいらぬものの、ともすれば口惜しさが、こみ上げて来る。

「お前は四十五号。あっちへお行き」

殺風景な一室で体の隅々まで調べられた。コンクリートの床を、高く尻を上げて四つ這って一回りさせられた彼は、革の首環を嵌められ、囚人番号札を前後につけられ、写真をとられた。

「身長や体重は、この前、調べたんだから、省略していいわね」

「頭も刈ってあるし、世話なしだわ。パンツ穿いていいわよ」

白手袋の手で彼のパンツをつまみ上げて振って調べた婦人看守が、それを彼の足許に投

げ与えた。

「パンツ一枚で引っ張られて来たのね」

彼女がカチャカチャと取り出す手錠を見て彼は両手を差し出した。先刻、外されたばかりの手錠が、再び両手に喰い込む。婦人看守に曳かれて、とぼとぼと陰うつな廊下を歩くと、首環につけられた番号札が胸と背に冷たく揺れ、重々しく軋む鉄格子扉が、何度も開いて閉じられた。鉄格子の太い鉄棒は黒光りに光って、寒々とした絶望感を囚人の胸に叩き込む。第一種未決監区画に連れ込まれた謙二は、頑丈な鉄扉が黒々と並んでいるのを眺めて、逃げ出したい程の思いだった。しかし逃れるすべは、もうないのだ。鉄扉の一つがギイと開かれ、そのすぐ内側の鉄格子扉もガチャガチャと開けられた。突き入れられた彼の眼前で、鉄格子扉が閉じられ錠がおりる。鉄棒の間から差し出す両手の手錠が面倒臭そうに外され、婦人看守は無表情に一べつをくると、鉄扉を閉じた。鉄格子にしがみついた閉められる鉄扉を見やった彼は、叫び出したい思いをこらえて、膝を床について喘ぐ。鉄扉の外でおろされる錠の音が、骨身に沁みて悲しかった。

鉄扉の上方の小さな窓がカタンと開いて、

「所定の位置に、坐ってなきや駄目じゃないの。懲罰が欲しいのかい」

冷やかな声が浴びせられ、びくりと震えた彼は、這うようにして壁に向って正坐したのだった。

収監された翌日、早苗が差し入れしてくれた衣服を着て、彼はホロリと泣いた。バンドは許されないのを知っている彼女は、ズボンに短い紐をつけてくれていた。嫂からは何一つ、差し入れはなかった。異臭を放つ囚人食を啜るのは死ぬ程の思いだったが、渴きと飢には勝てない。嫂の力なら、或いは食事の差し入れも、許されるかも知れないのと思うと、その薄情さが恨めしい。早苗の思案では一通りの衣服が、ようやくのことだったに相違なかった。

鉄扉が開かれ、手錠を束にして持った婦人看守が鉄格子越しに顎を、しゃくった。運動の時間なのだ。第一種未決監の男女の囚人達は十名位宛、順繰りに獄庭に連れ出されて三十分程、運動させられるのだ。日に一度のこの運動は、雨が降っても日が照っても行われる。

謙二は痺れた足を踏ん張って立ち上がり、

首の番号札を、まっすぐに直しながら、鉄格子の間から両手を差し出した。鉄格子扉を出ると、既に曳き出された男女の未決囚達が素足に藁草履を穿いて両手に手錠を光らせながら、それぞれの監房の前に立ちうなだれていた。彼は二人の女囚の間に挟まれた。一列に並んだ囚人達の手錠に太いロープが通されて芋繫ぎにされる。監房の小さな窓からは分らなかったが、獄庭に曳き出されて見ると、しとしとと雨が降っていた。金網で囲まれて区切られた獄庭の一隅の砂利を踏んでグルグルと唯、歩かされる。雨をよけて庇の下に立つ婦人看守は鞭をこわきに抱えて監視し、時々手を叩く。二度、鳴れば歩度を早め、一度でゆるめ、そして鞭が地面を叩けば、止まるのだ。然るべき生活をしてきた者が多い第一種未決監の男女囚人は、みじめな思いに涙しながら、両手の手錠とロープを首の番号札越しに見詰めつつ、若い婦人看守が面白半分命ずる合図のままに、小雨に濡れそぼって黙々と輪を描いて歩くのだった。列を乱せば、素足の甲に婦人看守の革鞭が狙い誤たず飛んで来るのだ。私服の差し入れがないのか、或いは着た切り雀のそれを出廷等の時のために取っておくのか、官給品の囚衣を着た者も、か

なりいる。謙二のすぐ前を歩く中年の婦人も
 そうで、膝までの半股引と肘までの上衣は、
 褪せた青灰色の継ぎはぎだらけ。うなだれた
 首筋の首環のあたりは薄汚く汚れて、すり切
 れた藁草履を穿いた素足のふくらはぎには、
 鞭痕が痛々しく残っていた。彼女が時々顔に
 両手を挙げるので、小雨に濡れたロープが張
 られ、謙二の手錠の鎖の環を前後に、すれて
 動いた。同僚と雑談していた監視の婦人看守
 が、ケラケラと笑い、そして鞭を地に鳴らし
 た。濡れそぼったまま囚人達は監房に追いつ
 まれ、濡れた手錠を丹念に磨かされるのだっ
 た。

一日おきの、それも極めて短時間、許され
 る冷水のシャワーだけでは、二週間も経つと
 下着が汚れ切ってしまった。しかし、私服の
 洗濯は原則として許されない。既に下着だけ
 になっていた彼は、その下着も脱ぎたかった
 が、貧乏な生活に慣れた身は、固いコンクリ
 ート床に肌を直接、当てては、とても寝れな
 かった。秋の夜の独房は冷え冷えと肌寒かつ
 た。とうとう彼は朝の点呼を受けた時、囚衣
 に着替えたいと願ひ出た。みじめな思いだっ
 た。

「お気に召すようなスタイルの物じゃなくっ

てよ。フフフ」

婦人看守が鉄格子越しに正座の彼を見下ろ
 して、からかって笑った。

「それはもう……お願い申し上げます」

「そう、随分、汚れたわね。臭うわ。じゃ、
 ちょっと待っていい」

法廷や検事局へ曳き出される者が連れ去ら
 れ、当番の未決囚達が腰縄をとられながら這
 い回って、通路や壁や鉄扉の外側等を磨き終
 えて、監房区画は静かになった。房内を拭き
 掃除し、鉄格子の鉄棒を磨き立てた謙二は、
 壁に向って正座した。死ぬ程、辛かったコン
 クリート床での正座には少し馴れたものの、
 終日、壁を睨んでいなければならぬ退屈さ
 は気が狂う程だ。今日も一日、こうして暮す
 のかと思うと、切ない溜息が洩れる。みじめ
 な運動の時間が今頃では待ち遠しかった。朝
 食は与えられず、日に二食なので、いつも空
 腹だった。ドロドロと異臭を放つ囚人食を与
 えて貰える時間が待ち遠しい。いつだったか
 いい加減に拭った便器を舐めさせられたのを
 思い出して、彼はもう一度、隅の便器を入念
 に眺めた。薄暗い、灰色に囲まれた監房の中
 で、その便器だけが白々としていた。掃除時
 間の終りを告げるベルが鳴ったが、彼の監房

の鉄扉は開かれないで看守の靴音は通り過ぎ
 た。屢々、検査は省略されるのだが、懲罰を
 思うと毎朝の清掃の手を抜く訳には行かない
 のだ。

不意に鉄扉の小窓がカタンと開き、彼はび
 くりと身を硬くして姿勢を更に正した。

「囚衣を支給したげるわ。全部、脱いで出て
 おいで」

鉄扉を開いて言う婦人看守を横目で、ちら
 と見て彼はホッとした。思いやりがある小柄
 な婦人看守だ。

「規則なんだから全部とるのよ。早くおし」
 「お願い致します」

と鉄格子の間から両手を差し出しながら彼
 は、さすがに恥かしかったが、破廉恥罪の既
 決囚達を取り扱うこともある婦人看守は全然
 平気な顔で彼の両手に手錠を嵌める。向き合
 った小柄な彼女の制服の胸の豊かな盛り上が
 りに目を灼きつかせた彼は、両手首に手錠を
 叩き込まれて一瞬の想いも吹き飛んでシユン
 となった。鉄格子の外に出て更に腰縄を打た
 れる。

「そんな恨めしそうな顔をしないでよ。両手
 を、ちょっと体から離して……」

手錠の鎖に捕縄を通し、慣れた手付きで結

んで、ギョッと腰を締めつけながら彼女は言う。

「どうせ刑が決まったら、最初はどうも着せて貰えないのよ。鼻環をつけられたら諦めがつくらしいけど。さ、お歩き」

囚衣を支給して貰うために謙二は婦人看守に曳かれて、あちこちの係を連れ回された。

屈辱と口惜しさに彼は、もう囚衣など着せていらないと思う程だった。

「強盗や窃盗なんかには比べ、いくらかはまし、」

なんだからという、お上のお慈悲なんだからね、有難く思っているんだよ。破いたりしたら承知しないからね」

最後に連れて来られた用具係の婦人係員は仏頂面でそう言って彼の体中を眺め回し、さも小馬鹿にしたように鼻で笑った。

「さ、分ったら、これに拇印を押すんだよ」

婦人係員は用紙と朱肉をデスクの端に面倒げに押しやり、椅子にそり返って煙草をくわえた。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

| | | |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 五万円 |
| 良作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 貳万円 |
| 佳作 | 一篇につき | 壹万円 |
| 可作 | 一篇につき | 五千元 |

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

「何をボヤボヤしてるの？ そのままで出来るわよ」

叱りつけられた彼の鼻先に紫煙が吹きつけられ、謙二は手錠をガチャつかせて身を悶えた。腰縄を握る小柄な婦人看守は捕縄をゆるめてもくれはしなかったが、それでも用紙と朱肉を彼の指先に持って来てくれた。

「囚衣貸与歎願書」

という文字を、みじめな思いで見ながら彼は、書き込まれた自分の囚人番号の下に不由な恰好で拇印を押した。婦人係員が戸棚から取り出した囚衣を床に投げ出して、顔をしゃくった。

「拾うのよ」

婦人看守に命じられて、彼は膝をひろげて床につき、ようやくのことで手錠の両手に囚衣を持った。

「さあ、帰ろうね」

腰縄が曳かれて腰に喰い込む。ここで、すぐに着せて貰う訳には行かないのだ。情けない思いが又こみ上げて来たが、両手で囚衣を体の前で持って彼はホッとした心地だった。

その時、戻って来た監房区画のどこからか悲しげに哀願する女の泣声が聞えた。

(続く)

〔体験告白〕

☆私の飼育したトモ子☆



新 丸 清

一、

今度、初めて奇クに投稿する一青年です。私の、ささやかな体験を聞いてもらおうと思ってペンを執りました。私が、この雑誌を手にしたのは中学生の頃でした。

街の小さな本屋さんの奥の方の棚に、銀色の表紙が目についたのです。ふと開いてみて「何て変な本だろう?」と思いましたが、その強烈な印象は今も忘れることは出来ません。

それから長い間、この雑誌も、自分の目に

止まるようなことはありませんでした。しかし、中学を卒業して高校入学のため、親元を離れて寄宿生活をしていた時のことです。街の書店で、再びこの雑誌を見かけたのです。

中学生時代から忘れかけていた、私の秘かなアブの芽が、春の陽を浴びたように、吹き出してきたのです。こんな雑誌があるのだ、ということが、私の心

を安心させ、そして雑誌の終りの方に出てくる「読者通信」に、自分と同じような気持を持った仲間が、沢山いるのだなということを知って、妙になつかしさを、感ずるのでした。

一冊、二冊と読んでゆくうちに、だんだんと、こうした世界に憧れにも似た気持を抱いてゆく自分を、どうすることも出来ませんでした。同志の人たちの沢山いる、この雑誌。しかも、こんなに長く続いて発行されているのだと思うと、ひとりでに微笑が頬に湧いてくるのでした。

そして、その次には、一度でいいから、女というものを、自分の思い通りにして、羞恥にうちふるえさせてみたいという欲望を強く覚え、夜、一人でいる時など、そうした妄想が、次から次へと湧いてくるのでした。

といっても、高校生の身で、そんなことが出来る筈もなく、只徒らに妄想と空想をめぐらすに過ぎませんでした。やがて、高校を卒業すると、そんな思いを秘かに胸に抱きながら、私は単身、上京しました。

二、

大学に入学して、下宿生活をしている間、勉強とアルバイトに追われて、何事もなく過

ぎました。そして、大学を卒業して、会社勤めをした年の秋、私にも春が訪れました。

可愛いガールフレンドが出来たのです。

彼女は、トモ子と言ひ、私よりは一つ下の可愛い女でした。

喫茶店などでデイトして話し合ってみても彼女はSEXに関しては、全くの無知で、週刊誌のSEX記事なんか、そこを飛ばして読むようなネンネ育ちでした。

私は、なんとかして、このトモ子を飼育して、自分好みの女にしてみたいと期待しましたが、表面はノーマルな交際を続けていました。私の下宿へ遊びにくるようになり、いつとはなしに、ノーマルな結ばれ方になってしまいました。

しかし、私は、トモ子を奇クに出ているようなマゾの女性に飼育したいという欲望を捨てきれませんでした。自分の体の奥底に、ドス黒く淀んでいるアブの欲望を、満足させて仕方ありませんでした。

ノーマルな交際は、秋から冬、そして年を越してから順調に続いてゆきました。

私は普通のSEXによって徐々に彼女の体を馴らしてゆき、なんとかして、緊縛の機会を狙っていました。

トモ子と知り合って半年程してからのことでした。私は彼女の帯締めを手にして、「手を軽く縛らせてくれ」と頼みました。

「変なことをするのね」と、彼女は一瞬、ためらっていましたが、既に、性感も覚えはじめていたトモ子は、私のくちづけに誘われて両手をうしろへ回しました。

それからというものは、私のSとしての欲望が、次第次第に表面に出てきて、いつとはなしに、彼女を後手に縛ってしまうというところが、あたりまえのようになってしまいました。自分の思い通りに、飼育出来そうなトモ子の様子を見て、私の心は躍りました。

三、

例によって、その日も、トモ子を全裸にして後手に縛ったのです。そして、電灯のスイッチをひねってパツと点灯したのです。

そこには、自由を奪われた彼女の真っ白い裸身が、横たわっていました。髪をふり乱して消え入るような、か細い声で、身を縮めながら言いました。

「恥かしいわ。電気を消して……」

この時の、この声。この乱れ方。この羞恥にまみれた可憐な姿。私が、長い間、夢みていたことが、現実に目の前で起ったのです。

私は、自分の体のあらゆる所からSの気持が鬱勃と湧き上り、迸り出るようなリビトから彼女を責めて、責めて、責め抜いてやろうと決心しました。

布団を縛るのに使った麻紐をとり出して、トモ子の乳房の上下をヒシヒシと縛り上げました。麻紐に締め上げられて、ピンク色の乳首が心持ふくらんでいるのを、指先で摘んでひねりました。

「勘忍して……」

トモ子は、足をばたつかせて、もがきました。もう一本の麻紐を左足首へからみつけて、鴨居へ引き上げました。左足は垂直に上に引き上げられ、右足は、まるで左足と十字を綴るように直角に開きました。

私は憑かれたように、トモ子の臀部に枕を敷いて、丁度、産婦人科医が行う診察のように、羞恥の極点が目の前に露わにさらけ出すようにしたのです。

「ねえ、お願い。電気だけ、消して……」

彼女が余りにも恥かしがるので、電気だけは消しましたが、私のSの血は治まらず、ますます、さかってくるばかりです。私はローソクを取り出して火をつけてみました。

ぼおっと、ほの明るくなったローソクの灯

の中で、トモ子の縛られた真っ白い女体を見ていると、益々、私のSの血が騒ぎます。

うす暗さの中で、ローソクの灯だけで浮かび上る責められる女体。これはサジストが見れば、気が狂わんばかりに喜ぶ垂涎の状況なのです。私は、先ずローソクの灯を顔に近づけてみました。トモ子は、口をしっかりと結んで目を固く、とじています。

「トモ子。今、どんな格好をしているか、言ってごらん」

私は、やさしく尋ねました。

「人には、とても見せられない、ひどい格好ですわ。私、恥かしくて……」

「それなら、ここは何と言うの？」

桜色の乳首に手を触れて言いました。

「オッパイ。あなたの大好きなマシマロちゃん」と答えるのです。

私の手は、次第次第に下へ滑ってゆき、彼女の羞恥の極点の秘めた部分を指さして、同じことを言いました。しかし、彼女は、「トモ子の、トモ子の……」と言ったきり、あとは言いません。私が何度も強要しましたが、とうとう、彼女は言いませんでした。

「それなら、もっと恥かしい事してやるぞ」私は、怒り狂ったように言いました。彼女

は、やはり女。どんなことをされるのかと、恐怖に身をふるわせています。

私はローソクを畳の上に置いて、トモ子の両腿に手をかけて、イヤイヤしている彼女の股間を無理矢理、押し開きました。あたりは日が暮れて真っ暗闇です。ただ、ローソクの淡い光だけが、彼女を照らしています。

私はローソクを近づけて、彼女の、すべてをさらけだしたのです。

彼女は、いやいやをしていましたが、その身のこなしや言葉の中に、甘い誘いがのびているのが、私にもよくわかりました。だが、私は、その誘いにはのらず、羞恥責めにするため、彼女の体には手は一切触れずに、声だけで彼女を責め上げて行っただけです。

甘い誘いの声が、いつしか悦楽の吐息に変わり、トモ子の肉体には顕著な現象が目に見えてきました。彼女の体は、しっとりと、ぬめったようになり、肌は愛の涙で、うるんできました。

私は遂に耐えきれなくなって、顔をその双臀に近づけていました。繁みの中に埋めつくしてしまおうと、狂ったようにネズミ啼きめいた囁き音を出してしまいました。

それからのトモ子の体の変化、声の変化は

とても、筆舌ではつくせません。彼女の体の周囲には、甘酸っぱい愛の薫りで、いっぱい満たされていました。私も、まるで自分を忘れたかのように振舞っていました。

私の顔の右には、高く上げられたトモ子のカモ鹿のような脚が、ふるえていました。

四、

私の目の前では、トモ子の可愛いおへそと、双つのピンクの果実が、男心をそそるように動いています。

やがて私は、顔をその薄い繁みから離して側に置いてあった（いつか、必ず使ってみたかと思っていた）ピンクのバイブレーターとそれより一回り太い目の白いプラスチックの中空の棒を手にしていました。

その白い棒は、まるで女体を責めるためにのみ、作られたもののような形状をしておりました。この二つを、自分なりに改造して、彼女の体にぴったり合うように、周囲に黒のラバーリングをつけておいたのです。

先ず、ピンクのバイブが甘い快音を立てて双方の桃色の果実を滑ってゆき、もう一方はトモ子の秘められた羞恥の極点を執拗に責めたててゆきます。

或は激しく、或は優しく、私は自分の全エ

ネルギーを打ち込んで彼女を責めてゆきました。この責められている間、トモ子は不自由な女として、見るに耐えない姿態をさらけだし、何度となくアクメに達したようでした。

トモ子の声は、何度、死んでしまったことでしょうか。突然、死んでは黙り、また叫ぶのでした。これが、先程まで、あれほど激かで大人しかった何も知らない彼女なのでしょうか。私にも不思議なくらいです。

私が脳裡に描いていたことを実行に移し、十二分に満足して、トモ子の足の縄を解いたのは、すでに二時間も経過していました。

私は、トモ子のその足、その体を、次の日も、ゆっくりと愛撫してやり、自然に深い眠りに陥ってゆきました。二人は、この秘密の戯れに溺れ、そして、いつとはなく、二人とも、こうしたSMプレイが忘れられなくなっていました。

五、

この二人の秘密の遊戯を、ただ二人だけの物にしたいため、カメラに撮りたいと前々から考えていたとトモ子に話してみました。

彼女が快く承諾してくれたので、その日を私が出張で帰ってきた日に決めました。

東京空港ホテルで、それを実行しました。

八月の、とても暑い日でした。

OLの彼女は、勤めが終ると私を迎えに羽田へ来てくれました。一緒にホテルに入り、部屋のライトを全てつけ、クーラーも入れてカメラが使えるようにしました。

二人は、先ずお互いの愛を確かめ合いました。トモ子が、もっと深く愛を要求しているのは判りましたが、私は、彼女が私に飼育されているということを自覚させるために、きびしく命令しました。

「パンティを残して、全て脱ぐんだ」

「ねえ、もっと愛して。その後からは、あなたの思い通りになるわ」

そう言いましたが私は許しませんでした。

私は、無理矢理トモ子を裸にひんむいて、パンティ一枚のあさましい姿にしたのです。この日のために、真新しいピンクの刺繍のついた白のパンティをつけていました。

すぐさま、帯紐で後手高手小手に縛り上げて四つん這いにさせ、顔を枕につけさせたまま、双尻を掩っているナイロンのパンティを膝下まで一気に、ずりさげました。そこには女体の最高に秘められた女としての印が、あきらかに剥き出しにされていました。

私は、けがらわしいものを見たかのように

トモ子の白く輝く双尻を平手で叩きました。

見る見る赤い掌のカタがついてゆきます。浣腸にうってつけのポーズです。イチジク浣腸があつたらと思いましたが後の祭りでした。

その悔しさから、トモ子の両足首を縛り、思いきり左右に押し開いてからベッドの端に結びつけたのです。そんな羞恥に満ちたトモ子の姿態を持って来たカメラで余すところなく撮りまくりました。素晴らしい緊縛写真。

ピンクにふるえる可愛い乳房。タテに鋭く切り込んだ小さなおへそ。真白に輝く双尻。魅力的な羞恥の極点。激しい責めを加えたあと、ゆっくり縄を解いてみると、乳房には、縄のアトが、くっきりと残っていたのです。

二人の愛の戯れの証しは、今も私の手元にあります。自分で現像焼付の出来ない私は、町のDPに頼むこともためらわれ、未だに、そのままになっています。

私とトモ子とのSM的愛の交歓は、これからも長く続くことでしょうが、私は彼女をM女性として立派に飼育し上げてゆくことに情熱を傾けたいと考えております。

このペンを走らせている間も、トモ子の白い肉体に縄の喰い込んでいるあさましい姿態が目につかんでくるのです。

(おわり)

連載時代S小説

紫

蘭

の

門

(35)

——わからないことがひとつ
大義のために死すべきなのか
それとも我が眷属一門のために
節操を屈しても敵軍に降るべきなのか

カット・須坂 旭



旭

風 流 極 道 軒

ら、昭和四十九年の米価を基準にして換算すると約三億五千万円ほどになるうか。

「たいした金でないではないか」

と主人の元禄屋は言うのだが、一番々頭の昭吉は、その引き廻しが見たくて、伊皿子から泉岳寺の

門前までやってきたが、午下りになっても、

なかなか行列は来ない。

待ちくたびれて、どこかで休もうと辺りを

見廻すと、緋毛氈の敷かれた茶屋が目にはいった。昭吉も嫌いなほうではなかった。

「酒だよ！」

と声をかけると、そこは、引き廻しを見に

きなすった人だと酌婦が、白木の一台枧に酒を満たし、塩をちよっぴりすみに載せて持ってくる。それを受けとってグイッと一杯、昭吉がのみほした時、そばの女が目に入った。年の頃、三十をすぎたばかりであろうか、真砂錦の帯に桔梗納戸の結城紬は、どこか富裕な村役人のお内儀のように見えるが、胸もとにのぞく金欄の布につつまれた懐剣は武家の奥方のようにも思われる。

ただ睫毛が長かった。スキ者の昭吉が、

「お内儀さんも引き廻しのご見物ですかい」思わず声をかけたほど、美しい眸と、ほのぼのとした女の情感を、ただよわせていた。

「えっ」とこちらを振り向いたその女は、も

朱 鞘 の 浪 人

鼠小僧次郎吉が、盗みに入ったのは武家屋敷か、札差・蔵元をはじめとする所謂、お大尽の邸ばかりであわせて九十八カ所、盗み取った金額は総計二万四千五百九十両というか

う一度、「ええっ」と深くうなずいて見せたが、その瞳には、夢見るような憧憬の光がこめられていた。

いまから引き廻しを見ようというのに、この女、少しいかれてゐるのじゃあねえのか。チラッと昭吉がおもったとき、

「鼠小僧次郎吉が来ましたよう！ もうすぐ角を廻ってきますよう！」

小娘がとびこんできて酌婦の腕に縋りついた。よほど恐いものをみたのであろうか、小さな心臓がドキドキとうっているのが、昭吉にもよくわかった。

そのとき往還から群衆のどよめきがあがって「あれが鼠小僧だ」「あれが浜町の松平宮内少輔さまのお邸に忍びこんで二千両もの大金を奪いとった次郎吉だ」という声が聞えてきた。昭吉がおもわず立ち上り、細川藩邸から、ここ泉岳寺へと通じる角を見守った。

前号まで——戊夜のロザリオの秘密を白状せようとして元禄屋は、和蘭人・ヘンドリックに小紫のお景を責めさせたがお景は屈服しない。その頃、江戸の町で義賊と評判の高い鼠小僧次郎吉が捕まり鈴ヶ森でお仕置にされるというので元禄屋の番頭・昭吉は見物に出かけた。

カツ、カツ……という瘦馬の蹄のおとが一瞬、シーンと黙りかえった界限にこだましてあらわれたのは罪状札をもち、浅黄木綿の衣服をきた男が二人、続いて陣笠をかぶった伝馬町の与力が二騎、同心六人、それに岡っ引きが四人もつくという、ものものしさで谷の者・非人の手にする突棒や、さすまた、そでがらみなどが林立して、まるで大名行列を思わせた。

「あ、あれが、鼠小僧……」

「バ、バカ野郎！」「盗っ人！」

「謀反人！」

昨日まで「義賊」と囃したてた人々であったが今、罪人となってしまう男をみると、町役人や大店の旦那衆に煽動されるまま悪しざまに罵りの声をあげた。尻馬にのった昭吉が、いっちょうちここでとばかり、

「いよう」と声をはりあげると「気狂い、阿呆、おタンコナス！ 甘茶でカップレ、湯文字でカップレ、カップレ、カップレ。穴をばカップレ。鼠小僧の次郎吉なんて、たかが盗賊野盗の類、磔、火焙り、獄門首、地獄の果てまで、とんでゆきやがれ」

と酒の酔いもあって大声をあげたその時、「地獄にも、いろいろありますそうな」

睫毛の長い女がもの静かにいうのが、耳に入った。

「な、なんで、茶々を入れやがる！」

昭吉が、フウ——と我に返ったときには、囚衣に、北町奉行所御制式の白色の縄で、岩関流四天王の縄掛けを犂々と受け、左右に多くの忘八者を従えた鼠小僧次郎吉が、すぐ近くに迫っていた。

「地獄には、等活・黒縄・衆合・叫喚・大喚・焦熱、それに、大焦熱、阿鼻の八大地獄がござりまする」

透きとおった女の声が泉岳寺のあたり方数町に響かうように、昭吉には思われた。

「人には、人それぞれの生きかたがあり、どれが正しいとも、どれが悪しとも、女の妾にはわかりませぬ。ただこの世は穢土、まさに穢土。何万人、いや何十万人の人々が飢えに苦しんでおりましよう。そのとき、この人が、あ、あの人が」

嗚咽に近かった。が、どよめく群衆は、おそらく何ひとつ気づかなかったであろう。

「あの人は、いったい誰のことでごぞんすかい、お内儀さん」

昭吉は、瘦馬の上にまたがっている死刑囚を、はりさけんばかりに瞳を見開いて凝視し

ている女の耳に、口を寄せて尋ねた。

こいつは、元禄屋の大旦那さまにとんだ土産話が出来るかも知れねえ——。

「あの人が何をしたというのです。小田原在飯能に生れて……ア、アッ！」

さきほどまで、三十女的情感をほのぼのとしたよわせているように思われた女の瞳に、いま、殺気にも似た凄愴の影が刷かれているのを知って、昭吉は愕然とした。

「お、お内儀さんは、いったい……どこの誰なんぞでございますのか？ 鼠小僧次郎吉と、もしや、何か……」

いいよんどんだとき、その右手を、がっしりと把んだ男がいた。

年の頃、五十にはなるまい。色があさぐろいだけで、何の変哲もない着古した羽二重に朱鞘の大小を差した男であった。

いまだき、大江戸八百余町、こんな瘦浪人は、いくらでもいらあ。日本一の豪商、元禄屋さまの一番々頭、昭吉の右腕をとって、どうしやがる——と、懸命の力をこめて振りほどこうとしたが無駄であった。

この間、今の時間にして、二、三分にもなるうか。もはや、鼠小僧次郎吉は数町の西に去って、ただ四天王の縄掛けに縛りあげられ

た背が夕陽にあかあかと輝いているばかり。

「操殿。地獄、地獄と言っておいでじゃが、地獄に墜ちるまでに人には為さねばならぬことがあろうものを。それを為しとげたあとならば地獄とて、なんのことがあろうや」

瘦馬の蹄のおとも消えたが、睫毛の長い、そしていま見知らぬ浪人から「操どの」とよばれた女は、いつまでも夢みるように西のかたを見つめていた。

「ア……ア……あ、あ……」

あとは、必死で押しこころす唇のわななきで昭吉にも（あなた……あなた……）と叫んでいるのがわかった。

「地獄に墜ちるまでに、人間には為さねばならぬ次の道々がある。『道』じゃ。まずは餓鬼道、畜生道。つづいて修羅道。そして、人道じゃ。いたずらに地獄・地獄と騒いでおるが、八大地獄に墜ちるまえに、はたして餓鬼・畜生・修羅の道を、そなた、真剣に踏み歩まれましたかの、操どの」

昭吉には何のことか、まったくわからなかった。ところが、操の長い睫毛があがった。

「あの人は、あ、あのお方は、天、天道のため……ただ、天道のために！」

朱鞘の浪人の眸が、爽やかに閃き、

「それほどまでに惚れておられたのか、あの鼠小僧次郎吉に」

「ハ、ハイ……」

「あの男が、世間で言われている如く江戸は堺町の生れでも四国宇和島・鬼ヶ城の麓で育った伊賀者の流れでもないこともご存知か」

「ハイ」

金襴緞子の袋につつまれた懐剣の柄に手をかけて、操は、言った。

「あのおかたは、ただ、ただ……」

長い睫毛のさきの涙が、夕陽をあびて七彩に輝いた。

「あのおかたは、妾に、夢を、夢を、夢をお与え下さりまして、あとは、もう、消えて、消えてしまわれました……」

「何条もって消えようものを！」

浪人の爽やかな眸が操の懐剣に注がれた。

江戸は北町奉行所の犯科帳によれば、鼠小僧次郎吉、本名は幸七といい、中村座の下足番定七なる男の長男に生れ、才智煥発なるをもって麹町四丁目の質屋・大和屋の養子として貰われていったという。

所が、養家に子供が生れてのち冷遇されて養家をとび出し、遂には悪の道に入ったというのだが、はたして如何なものであろうか。

今も昔も、公式文書というやつは、アテにならないことが多い。遠くは鎌倉時代の正史と言われる「東鑑」、近くは「大本営発表」さらには、日本××……分析研究所、△△△白書、○○○黒書の類が、すべて皆そうである！と断言したくなる世の中であらう。

だが、ここに――

操と朱鞘の浪人は、『地獄の底の真実』を会話していた。

「男の夢は、いついつまでも残ろうものを」「残りませぬ。ア、ア……あのおかたの、あのかたの……あ、あ、あなた！」

今度は、はっきりと昭吉だけにではなく緋毛氈をしきつめた茶店に座っている他の客にも聞える声であった。と、浪人が、

「聖徳太子は伊賀者をつかい、天武天皇は甲賀者をつかった。伊賀も甲賀も同じ忍び。伊賀の字と甲の字とは同じ字……大塩平八郎中斎も鼠小僧次郎吉も、所詮は同じ。ご案じ召さるな、あの男、決して殺しはいたさぬ！」

言下に、「ウ、ウッ……」という呻きがあり、昭吉がハッと見構えたときには、すでに操を小脇に抱いた浪人は、

「元禄屋によろしゅう伝えい！ 昭吉」

颯々とした声をおぼろおぼろの春の空に

研ませて姿を消してしまっていた。

鼠小僧、誕生す

引廻しには、江戸中引廻しと五カ所引廻しの二つがある。前者は伝馬町の牢屋敷裏門から出て江戸橋を渡り、坂本町・八丁堀・岡崎町・因幡町通り……と、京橋まできて、そこで折り返し、三田の赤羽橋から溜池・四谷・市ヶ谷を経て、牛込御門外を通り、水戸殿屋敷脇より右へ壱岐坂を上る――という具合に江戸市中を一巡して、もとの伝馬町に帰るのに対して、後者つまり五カ所引廻しは、捨札を立てられた場所、日本橋・筋違橋・赤坂御門・両国橋・四谷御門と計五カ所を廻って鈴ヶ森のお仕置場に行き、そして処刑されるというのが御定書百ヶ条による慣例であった。

いま――

御作法どおり、岩間流四天王の縄掛けを幹々とうけた身を裸馬の背中で揺られながら、鼠小僧次郎吉は、心のそこから満ち足りていた。

――あの操が、来てくれたのだ。もはや、この世に何ひとつ思い残すことはない。男として生れ、為すべきことは、天の命するままに

総てなし終せた。

「フッフッフッフ……」

あさ黒く、ひきしまった次郎吉の顔から洩れた含み笑いが、思わず呵々とした高笑に変わったとき、背後を行く北町奉行所与力・黒尻善内から声がかかった。

「何が可笑しいのか、鼠。あと半刻もたたぬうちに、死罪にされようという身で」

「男は地獄で歌うもの。黒尻善内殿にはとてもではないが、わかるうはずはないて」

なおも哄笑を惜しもうとはしない次郎吉の眼に、とある小さな神社の境内の桜の花が入ってきた。

その小さなつぼみに、

（俺のこどもではないか。今をときめく二宮四郎兵衛殿の御子は）

二宮四郎兵衛尊栄――幕府お抱え御普請役六百石、数年前に荒廃しきった日光神領三十箇村をみごとに立ち直らせた経世家として関東では誰知らぬもののない人物であった。

経世家というものが己れの一身を犠牲にするものであれば許せもしよう。だが飢えに苦しむ人々を踏台にして自己の栄達を企むためのものであるとしたならば……。

もう一度、高らかな哄笑が、冴えた春の大

気をつんざいた。

「ひかれものの小唄というが、のう鼠」

「なんのなんの、ひかれものの雄叫びでござろうものを」

鼠の声には何の屈託もなかった。

東禅寺を過ぎるとお仕置場が近い。御殿山から六郷の渡しへかけて一面に桜の花が咲き誇っていた。

(あの桜の花びらをたべたことがあった)

次郎吉の臉のうらに十数年まえの相模国飯能在での幼い頃の生活がうかぶ。

あの頃、俺は小吉とよばれていた……四郎兵衛の幼名は、富次。そして操が七つか八つであつたらうか、喰うものがまったくなくなつて、自分が、自分の指を噛みちぎって喰うという、ひどいひどい飢饉がつづいていたわけ——。

徳川時代二百五十四年の間、天下泰平、平和がうちつづき、人々が生活を享樂していたというのはマツカな偽りである。この間に日本全土を襲った凶作飢饉百五十四回、百姓一揆の件数は三千二百五十回をこえる。つまり二年に一度は飢饉に苦しみ、一カ月に一回は必ずどこかで数百数千の百姓が、磔・獄門もおそれず、むしろ旗を押したてて暴動をおこ

イメージギャラリー 『可愛さあまって』 岡 たかし



した。京都の医者・橋南谿の「東遊記」によると、奥州・羽州大いに飢饉して人、互いに食しあふに至れり」と記され、信濃国伊那の人・須田正璋の記録によれば、

桑葉ニ糠ヲ交ヘテ食ス。乞食ミナ農人ナ

あつた。

り、顔色悉ク疲レ色青ク腫ルルアリ。飯田城下、極月一ヶ月ニシテ捨子十八人、八幡ニ廿余。処々捨子多シ。

という惨状が日本国中に現出していたので

そんなときに小吉が、桜の花びらを荒塩で煮めて、操のもとへ駆けつけた。

「操、食べな」

「ありがとう、小吉さん！」

土鍋に盛られた桜の花びらを前にして操はすぐ手を出した。が、

「小吉さん、まだなのでしょう」

「お、おれは、いいんだよ、操。お前、食べなよ。大丈夫喰えるよ、それにうめえんだってさ。腹を痛めることもないって親父やお袋が言っていた。さあ！桜の花びらなら、いくらでもあるから、遠慮するなよ」

「けど、お塩が……大切な、お塩」

「なあに塩なんか、酒匂川を、こうずうーと下っていけば海があらあな」

酒匂川を下って相模湾にでるまで、どのくらいの道程なのか操には、わからなかった。

「小吉さん。海でこのお塩を採ってきたの」

「そうともさ。いくらでも俺、取ってくることもできるんだぜ」

「えらいのねえ、小吉さんて」

三つ年上の小吉にすすめられるままに操が桜の花びらを指でつまんで口に入れる。

「お、おいしいわ。ほんとに、おいしくつてよ。小吉さん、ありがとう」

塩のしみこんだ桜の花びらは、麦藁とせりと米ぬかだけで生きつづけてきている七才の少女には何ものにもまさる食物であった。

貪るように操がたべ、小吉もまた喰った。ままごとのような食事がおわろうとするころであった。

土堤に沿って走ってきた富次が、

「おい、操。これを喰え！」

さし出したのは稗のかたまりであった。富次の父は、このあたりの名主をつとめており稗や粟をたっぷり貯えているという噂であった。こども心にもそれを知っている操は、

「あ、あたい、いらない……」

「なんだと、せっかく持ってきてやったに」

そばから小吉が、

「フン、どうせお前の喰い残しだろう。操、喰うんじゃあねえぞ」

「なんだと、小吉！もう一度言ってみい」

「おう、なんどでも言ってる。みんなが犬や猫、鼠、みみずまで喰っているというのに

お前の家だけ五穀を喰っているそうじゃ」

「こ、この野郎！」

十才のこども二人が、母子草やぺんぺん草のおいしげった土堤で、くんずほぐれつの突っ組み合いを始めた。

西のほうに丹沢山塊がそびえ、富士につらなる三国峠のあたりには、黒い雲がかかっていた。

「カニ、カニよ！カニよ、小吉さん！」

おろおろしながら「決闘」を見守っていた操が叫んだ。

「な、なに！カ、カニだって！」

カニといえど大人たちでも血眼になって捕えようとする貴重な食物であった。

突っ組みあいをやめた二人のうち、富次のほうが、その大きな沢蟹の近くにいた。

とっさにつかみあげると甲羅をはぎとって口に入れ、目玉も腹もいっしよにのみこんで

しまってから、ふと操に気がつき、

「そ、そうだったな、さきに見つけたものに七割の権利があるのだった」

と、おとなっぽい口をきき、

「ほれ、喰いな」

操にさし出したのはわずかに二本の細長いカニの足だけだった。

そのあと、——富次が引きあげたあとで操は、あなたのお嫁さんになりたいと、たしかに言ったつけ。

御定書百ヶ条にいう「品川」お仕置場、俗称・鈴ヶ森処刑場についた鼠小僧次郎吉は、

馬上の曲景（きよくろく）から非人たちの手で抱えおろされると首の座にすわった。

桜の花びらが、ひとひら、ふたひらと、その端麗な横顔に舞いちってくる。

あなたのお嫁さんになりたいと言った操の両親は、数年後に死んだ。小吉の両親も同じ年に死に、十四才の小吉は、操に心を残しながらも江戸にでた。大工、左官、植木屋、あちこちの店の丁稚奉公と苦勞を重ねているうちに、名を四郎兵衛と改めて父のあとをつぎ飯能村の名主となった富次が、操を嫁にしたという噂をきいた。

小吉が悪の道に足を踏み入れたのは、それからまもなくのことであった。

まずは「置引き」ついで「ひったくり」そして次第に腕を磨いて拘摸（こも）となり、二、三人の弟分ももって「飯能の小吉兄弟」と、いつしかよばれる身となった頃、十三年間つづいた文政という年号が天保に変わり、その秋、忘れられない、あの日がきた。

四ツ谷から市ヶ谷への道で、すれちがった大店の旦那風の男の懷から、ずっしりと重い財布を抜きとった瞬間、背筋が凍りついた。

あの日がきた。

人影のないところに連れこんだあの旦那は

「どうせ盗みをするなら大きく盗め」とおっしゃった。

「天下を盗めば天下人として尊敬を集め、財布を盗めば罪人として仕置される。古くは右大将源頼朝も、足利高氏も、近くは豊太閤も徳川家康も、みな天下を盗んだ大盗人だ」

五両や十両のはした金を盗むより、なぜ何千両、何万両の金を強欲な札差、蔵元たちから奪いとらぬ。なぜ、大名屋敷を荒し廻らぬのか——それはお前が「小さい志」の持主じゃからじゃ。「大きな志」を持て。餓死する人々が巷間にみちあふれているときに、奢侈の限り淫楽の極みをつくすものどもに一泡も二泡も吹かせてやれ。

こんなふうと言ったあの旦那は、今日から鼠小僧次郎吉と名乗れ、鼠というのは十二支の初め——なにごとでも第一番に立つものの意味じゃと仰言って、乾分の一人に加えて下さった。

それからというもの生れ変わった俺は、江戸中をかけめぐり始めた。盗んだ金は片っ端から、あちこちの貧乏長屋に雨と降らせた。鼠小僧次郎吉の名が、いっぺんにあがった。あの旦那は、一年に一度か二度、浪人姿や商人虚無僧などになり形をかえて顔を見せた。ど

うやら関西の人らしいが、一日に四十里、五十里は走りつづけることができるというから伊賀か甲賀の忍びなのかも知れない。

乱れる夫婦鬻

「操……殿。もそつと前へ参られよ」

勘定奉行・肥田若狭は、飲み干した盃をさし出した。酌をせよというのであろう。四疊半ほどの瀟洒（しょうしゃ）な部屋であった。

鶯色のお召に柑子色の帯をしめた女は、チラッと初々しく結いあげられた夫婦鬻（めようこ）をあげると、

「主人がまだ参りませぬので」

「四郎兵衛殿かな。フッフッフ」

自ら盃に酒をみだした肥田はグイッと一杯傾け、

「参られぬわ」

「な、なんと……仰せられました」

「四郎兵衛殿はこぬと申したのじゃ」

「そ、そのような、それは、また、なぜ」

狼狽する操をよこめに肥田が傍らの鈴を鳴らすと、隣室で待ちうけていたのであろう、すぐに襖がひらいて二人の男が入ってきた。

一人は高名な札差の笠倉屋藤十郎、いまひ

とりの茶筌髷の瘦せたほうは昌平坂学問所の
林大学頭有文であった。

ジロリと操を見おろすと、

「これが二宮四郎兵衛の妻・操殿か。まさしく美形でござるな」

いい捨てたかと思うと笠倉屋のブクブクふとった腕が、とっさにお召の襟にのびた。

「な、なにを！ なにをなされます！」

あまりの無礼に操がその手を払ったが、林大学頭が早くも帯締めを解きさっていた。

「ア、アレッ！ ご、ごむたいを！」

崩れかけた帯に手をやろうとしたが、弱腰を蹴られて倒れ、うぐいす色の裾のなかからちらりと真紅の湯文字がのぞく。

「おとなしくすることじゃて。主人のためであらうかの」

「な、なんのことでございましょう。アッ、アッ、アレッ……」

激しい息づかいと叫び声のなかで、幾筋もの腰紐がぬきとられ伊達巻が舞い、帯がながれた。狭い部屋である。足の踏場もないほど散らばった小物類からだだよう芳香が、伊勢おしろいの匂いにまじって、なまめかしい気配をたちこめさせた。

「静かにすることじゃ」

笠倉屋が背後からお召を剥ぎとると、「キヤアッ」という悲鳴があがった。

「ついでに長襦袢もな」

肥田の声に応じて林が、前からたてしほの腰紐をとりさり、水色の長襦袢をぬがせてしまうのに、さほどのてまはかからなかった。「フッフッフ、佳い肌じゃ。茹で卵のからを剥いだよじゃ」

半袖の肌襦袢からのぞく二の腕や、首頭のあたりをみとった林は言ったが、操の肌は茹で卵の剥身のように病的な白さではない。いきいきと血のかよった健康な、ひらき始めた桜の花びらのような美しさと言えた。

「ついでにこれも」

肥田の指示もまたずにゴクツと生唾をのみこんだ笠倉屋が、三河もめんの肌襦袢の紐をひきちぎったものだから、操の唇から、けたたましい悲鳴がほとばしった。

「よい声じゃ。美しい女の絶叫というものはいつ聞いてもよいものじゃわ」

二人の男の手で裸にむかれていく操を心地よさそうに見守っていた肥田は、

「ほれ、大学頭殿。これじゃ、女はいつも自分を縛るものを身につけているものじゃて」小物類のなかから幅三寸ほどの帯下につか

われていた紅色の伊達巻を、ほうり投げた。

承知しました——というように頷いた林はニタニタ笑っている笠倉屋に、操の右手をつかませておいて、自分は左手を背後に搦めとり伊達巻で縛りつけていった。

「ア、アレッ、なにをなされます！ ヒ、ヒヤアアッ……ウ、ウウッ……」

絶間なく叫びがあがったが、二人の男の手にかかつては禿鷹につかまった白鳩のようなもので、またたく間に肌襦袢をむしりとられ後手に縛りあげられてしまう。

こうなると女は、別して人妻は弱い。

夫以外の男のまえで裸身をさらしていると、いうだけで、もういてもたってもいられない焦躁感と羞恥にかられるもので、しかもそれから逃れるすべもないまま、五体を縮めて息づいてはかばかしくなかった。

その操の肉の盈ちた肩口から二の腕、乳房へと三人の男の淫らな視線が走った。

「美形のうえにこの肉づき、それに肌の匂いのなんとも言えぬ女でござりまするな」

捕えた獲物をまえに舌なめずりする禿鷹のように笠倉屋がいうと、

「『花の露』であろうよ、この香りは」

「そういわれてみれば、肥田さま、まこと、

これは「花の露」

笠倉屋が、燦くように美しい背中から脇腹へかけて、あから顔を押しつけた。

「花の露」とは、この頃とみに名の高い滑稽本「浮世風呂」の作者である式亭三馬が、オランダの秘法をまねてつくったと称される女性専門の化粧水であった。

「フッフッフ、小田原在の百姓の女房ならこのように高価なものを身につけることはかなうまい。これも主人の四郎兵衛の働き、のう操殿。少しは恩返しをせざるまいぞ」

若桜の花びらのように色づいた乳房を眺めながら肥田が誘いをかけるように言ったが、じいっと下うつむいたまま操は、顔をあげようとはしなかった。

「フッフッフ、なぜこのような目にあうのかは明後日にでも、ゆっくりと四郎兵衛に尋ねてみるがよからう。では、笠倉屋、準備はよいかな」

「もちろんでござります。女一人の地獄責めじゃあ刺戟が、うすかろうとの殿の御命令どおり、陰間の架助を口説きおとしまして、ほれこのとおり」

あいの襖がひらかれて、新しい空気がながれこんでくると、かすかな身じろぎとともに

操が顔をあげた。

そして、隣の部屋をひとめみて、ハッと顔を伏せたが、いま見たものが真実、この世のものであるかどうかを確かめるように、もう一度、はりさけるほど瞳を見ひらいた。

「ア！ アア……ア……」

声にならない呻きが、あがる。

「こ、こ、これは、いったい……」

裸身の羞恥も忘れたように操が呟いたのももっとものことだと思われるほどの光景がそこには展開されていた。

全裸の男が、そこにはいた。

筋肉逞しい裸身を高手小手に縛りあげられて吊り下げられていたのであるが、尋常の吊りではなかった。縛られた裸身を逆海老の姿にされて、反りかえった腹部を上、つまり天井に向けているのだが、滑車から垂れる縄は、そのどこを釣りあげていたか！ 普通ならば、肩口と太股に縄をかけてその四筋の縄をひとつにして滑車から垂れる縄に結ぶであらうに、この男の場合、裸身を縛る荒縄以外どこにも吊るための縄などはなかった。

見ひらかれた操の目が、滑車から垂れた縄を上から下へと眺めおろして、その男の裸身との接点を見つめたとき、

「ヒ、ヒアア……」

けたたましい叫びをあげて、ふらふらとなりかけた操の乳房をギュッと笠倉屋が、つねりあげたのは失心を防ぐためであった。

今度は、おのれの身に加えられた苦痛に操が悲鳴をあげた。

「よくみるのじゃ。どうじゃ、面白いものであろうが」

夫婦鬚を肥田に驚づかみにされると、どうしても瞳がひらき、恐怖にふるえながら操は目前の無残な光景を再確認しなければならなかった。

吊られているのは笠倉屋がいったとおり逆剃の美女衛門の自分・陰間の架助であった。そしてこのような芸当は、彼のほかにちよつとやそつとで、できるものとは思われない。その肩に手をかけて、くるりっと架助を一回転させながら肥田はいう。

「次は、操殿。あなたの番じゃ。この男のように吊られて、二人でくるくるくると手妻傘のように廻るがよい」

「イ、イヤ！ ゆ、ゆるして！ ゆるしてくださいまし！」

動物的とも言える自己保存の本能が、操を立ちあがらせ、襖から廊下への逃亡を試みさ

せたが、三人の男にかかつては、かなうはずもなく、腰紐、帯締、細紐と、色とりどりの小物類で、高手小手に縛りあげられると、虚空を蹴りたてる両足首を押えつけられ、両手首を縛った縄とひとつにして厳しい逆海老責めの姿にされてしまった。

肥田の手が真紅の湯文字の裾をサアッと左右に思いっきりひろげたのと、勘定奉行・肥田若狭の邸を襲うべく鼠小僧次郎吉が、高さ九尺はあろう海鼠塀をのりこえたのが、ほとんど同時であった。

庭先から石灯籠の灯りをめやすに次郎吉が走り、部屋の中では笠倉屋が三味線の細い三の糸を肥田の手にわたす。肥田が、目の前にあますところなく曝け出された操の花園に手をのばす。雨戸を外した次郎吉が、廊下に忍びこむ。肥田の手が花園をかきわけ、次郎吉が天井裏へと、とび上る。と、その時、操のすさまじい絶叫が迸った。

節 操 と は

眼下の光景を次郎吉は信ずることができなかった。これまで何百回となくあやしく繰りひろげられる絵巻物を天井裏から眺めてきた

が、これほど妖美・陰惨な光景に接したのは始めてであった。

逆海老縛りにされて奇態極まりない吊られかたをしている男をみるのも始めてなら、そのすぐそばで、赤、紺、桃色と色とりどりの細紐類で縛りあげられた女が、これまた逆海老責めの姿で、乳房や腹を上に向けて、口に出せない恥かしい箇所を吊りさげられているのを見るのもこれが最初。まさか、このような「吊り責め」があろうとは次郎吉の想像も及ばぬところであった。

「フッフッフ、四郎兵衛の申したとおり、並みよりも数倍、毛深い女じゃ」

肥田が、二の腕のつけねからのびている長い腋毛をもてあそびながらいった。

「いかにも、驚きました」

「これで架助も満足でござりましょう。一人ではイヤじゃと申ししておりましたゆえ」

四郎兵衛だと！ 次郎吉がハッとなった。

久しく耳にしない名ではあったが、忘れられぬ男であった。そしてすぐ、操の顔を思いうかべたが、天井にあけた小さな穴から見える惨めな姿の女が操だとは、とうてい思われな。四郎兵衛という名など、どこにでもあるではないか——と自分の胸にいいきかせて次

郎吉が見おろしているのに気付こうはずはなく、肥田たちは、いよいよ淫らな攻撃を開始するのであった。

まず、大きなこけしを持った林が、吊り下げられている操の右側に陣取り、つづいて象牙の匙をもった笠倉屋が左太股を抱えこむ。

「もう無用のものじゃな、これも」

わずかに腰のまわりにまつわりついているだけの真紅の湯文字を肥田がむしりとりて抛りなげると、女体がピクッと震えた。

このとき次郎吉は、女体の下に脇息のようなものがおかれているのを知って、（なあんだ）と思った。いくらなんでもアレだけで女体を支えることは不可能というものだろう。

肥田の指が、柔らかにうごめいていく。

「ア、アッ……お、おやめ下さいまし！」

女が耐えられぬように訴えた。「八」の字なりにひろげられた太股のあわいに、林大学頭の握ったこけしが迫り、やがて、鈍くやるせない、ひびきがした。

「ヒ、ヒ、ヒイイッ……」

元結のきれた黒髪がサアッと青畳にながれて、女が苦しみのあまり逆さになった顔を必死で、もちあげようとした。

と、（あ、あれは……）次郎吉の胸が早鐘を打つように鳴り始める。それに追い打ちをくわせるように、「操殿。どうじゃな。ちようどよい太さじゃと見たが」

笠倉屋の声が聞えてきたではないか。

（み、みさお！）

叫びをどうにか押えたのは日頃の習性のせいであつたろう、が、やむにやまれぬ激情が次郎吉を部屋へと飛びおりさせようとした。

と、そのとき、右手をがっちり捕えて離さなかったのは、渋柿色の忍び装束に身をかけたあのだ那であつた。

言葉では説得できないと、見抜いたのだらう、俺を当て身でおとす何十人という警護の侍たちをだし抜いて隠れ家へと連れこんでくれた。

たとえどのようなことがあろうとも冷静さを失つてはならぬぞ、鼠。

こんこんと論された俺は、前後不覚に陥つた我が身を恥じた。

そして、次の夜――

心をきめて忍びこんだ俺がみたのは、昨夜より、もっと惨めな操のすがたであつた。

首枷――ただ単に枷ともいい盤枷ともいう三尺三寸四方の厚板に径七寸五分の穴をあけ

た、おぞましい責具を、いまにも折れそうな細い首に、はめられた操が、三人の、いや、四人にふえた男たちに翻られていた。

ひとりふえた男が、昨夜、操とともに残酷な「吊るし責め」にあつていた若者にまぎれもないと知った俺は、ことの次第を天井裏から冷静に見守つた。

俺がいるのも知らず勘定奉行の肥田が、満足そうな笑いをうかべると、

「ときに、操殿。こうして拙者たちと肉体の交わりを結んだ以上、事実をありていに教えてさしあげよう」

首枷だけではなく、長さ十尺はあろう細い縦長の足枷に、はり裂けるほど両股を拡がせられて座っている操が、力なく眉をあげた。

「四郎兵衛殿がの、このたび野州松山町の天領御差配格に召し抱えられることになった。

その引出物として、そなたを拙者たちに献上してくれたのよ。おわかりかの。四郎兵衛殿のおかげで「花の露」をふんだんに使うことの出来る身分になったのじゃ。たまにはこうして愛する御主人様のために恩返しをせねばなるまいて」

「なんの、なんの、御奉行様。これが、ご恩返しでございましょうか。昨夜は、あのよう

に喜悅の声をあげておりましたのに」

「笠倉屋さん。女とはそのように果報なものに生れついておりまするわ」

盃をあげながら林大学頭がつづけた。

「責められて喜ぶ。亭主のために犠牲になるというのは表面のこと。内心では、われ自身が十二分に楽しみ、ほれ、今でもこのように喜悅にうごめいておりますぞ」

なぜこのようなめにあわされるのか、まったくわからなかった操は、肥田の言葉でやつと夫・四郎兵衛の企みが理解できたものの、それを怨むひまもなく林の執拗な指さきを股間にうけるのであつた。

反抗しようにも高手小手に縛りあげられたうえ、足枷、首枷を科せられている身に、なにができれば。むき出しの下腹を翻るにまかせるのみであつた。

そばから、昨夜、最後に自分を抱いた陰間の架助が、

「ヘッヘッヘッ、お内儀さん」

と秘苑を撫で廻す。

四人の男の高笑いにかこまれて操は、ただ真っ赤になって、うなだれるだけであつた。

「それにしても四郎兵衛殿も幸せなことよ。大きくもなり小さくもなる千変万化の絶品の

壺を夜毎、楽しむことができるとは」
 笠倉屋が、首枷の上にのっかっている操の顔を抱き、額といわず鼻と言わず舐めていくと、右からしなだれかかった林が朝日をあびる淡雪のような乳房に吸いついていった。

「ア、アッ……」
 身じろぎもできない操であってみれば、あらがう声も、かばそかった。
 架助が背後からむき出しの双臀に喰いつき象牙の匙を握った肥田が、四つ這いになって



イメージギャラリー

『両手に花の素浪人』

岡 たかし

張りさけるほどひらかれた太股のあわいへとにじりよっていく。

あの旦那の説諭がなかったら次郎吉は、きっと昨夜と同じようにとびおりようとしたに違いない。が、警護の侍よりもっと面倒な小牛ほどもある猛犬が十数匹、夜に解き放たれているのを知っている今夜の次郎吉は、慎重な態度にでた。この邸から救出することは不可能——四郎兵衛の家で様子を探りそれによって行動を起そうともの狂おしいまでの怒りと嫉妬を必死で押し鎮めたことであった。

そして、二日後——

次郎吉はそれを実行した。四郎兵衛の家は四谷にあり、忍びこむのに何の造作もなかったが、その経世の才をみこまれて幕府要人にとり入ろうとするだけあって、広く、築山や池など、みごとな、たたずまいといえた。

中庭に抜けると茶室風の離れから男の罵声が聞えてくる。

床下にもぐりこんだ次郎吉は、床板をはねあげてその隣室にとびあがると、合の障子に穴をあけて、なかを覗いた。

丸行灯がひとつ——そのそばで大盃をあげているのは、四郎兵衛であろうか。幼時の面影の残っているのは驚鼻の形くらいのもので

あとは肥満した躰といい狡猾そうな眼といい人間どうも変るものかと思われるほどの変りようであった。

そのまゝに豪華な夜具がのべられてゐるのをみれば、この離れは寝所なのであろう。

操が、そこにいた。

一糸もまとわない赤裸の身を後手に縛りあげられて四郎兵衛の膝のそばで横たわつていたのである。

「女には三従の徳があるはずじゃ、操。いったん嫁したうえは、たとえ火の中、水の中、夫の命令どおりにするのが妻のつとめじゃ」

「……存じませぬ！ あ、あのような屈辱を妻に与えるあなたは、鬼じゃ、悪魔じゃ、立身出世のほかには、なにもない外道じゃ！」
「なんと申す！ それが夫に向つていう妻の言葉か」

四郎兵衛の手が、操の裸身にのびたかと思つと、乳房といわずへそといわず内股と言わず、あたるを幸いに抓りまくつた。

丸行灯の光をあびてうっ金色に燦く操の肌が、それに応じて妖しく、くねりのたうつ。

次郎吉はそれ以上、見るに忍びなかった。操がなんというかはわからない。夫婦仲のことに無用な手出しなどなされるまい、と怒る

かも知れない。だが、次郎吉は行動に出た。

——あなたのお嫁さんになりたい。

といったあのとときの言葉をありありと耳にしながら、鼠の如く寝所に忍びこむと獅子のように操を掠めとり、あとは腰の抜けてしまつた四郎兵衛を尻目に外にとび出すと北へ、

尾張藩邸のよこを戸山に突つ走り、高田の馬場にある隠れ家へと戻つてきたのであつた。

それから三日間、どのように二人が愛し合つたか——。

鈴ヶ森のお仕置場で次郎吉は、いま首の座に坐つていた。

「鼠。覚悟はよいかな」

黒尻善内が憎々しげな声をかけた。これから御定書百ヶ条にもない苛酷な処刑が次郎吉に加えられるというのである。いっききに斬首するでなく磔刑にするでもなく、幾太刀も幾太刀も木っ端役人どもに刃を加えられてその傷口に塩を塗りこめるという前代未聞の「生殺しのうえの死刑」——大名屋敷ばかりを盗み廻つた盗人への幕府の卑劣な復讐がくりひろげられようとしていた。

「地獄へ行くのだぜ、地獄へ。この世の地獄を、たつぷりと味わわせてやるぜ、鼠」

「フッフッフ……地獄などこの目で何遍と

なく見て参りましたわ。また地獄の底におちたことも数度。そのたびに生きもどつてきたこの次郎吉を不浄役人ごときが、どうして殺すことができましようや」

次郎吉の爽やかな声に誘われるように桜の花びらが、はらはらと舞い散っていく。

あの三日間のことを想うと次郎吉の胸が疼く。操は、愛してくれていたのだ。誰よりも誰よりもこの俺を愛してくれていた。あなたとなら地の果てまでも——という操を連れて、西へ、脱け出そうと決意した朝、蛇のように執念深く俺を追つていた黒尻善内が、どこをどう嗅ぎつけたものか百名にあまる捕吏をひきつれて囲みやがつた。

ひとおもいに死にたいという操を制して、とつさの気転で縛りあげて、さも、俺に掠られてきた犠牲者のように見せかけた俺は、隠れ家をとび出すと北に走つた。

操に愛されているという喜びが胸いっぱいひろがり、むらがる捕吏も、ものの数ではなかった。

これで操は、いったん自分の家に戻るだろう。そのあとでまた、機会をつくればよい。そういいきかせながら、雑司ヶ谷の鬼子母神の境内まできたとき、運悪く北町の与力・工

頭監物にバツタリと出くわしてしまった。絶
 対絶命のこの危機を救ってくれたのは、また
 してもあの旦那だった。神出鬼没、まったく
 天狗のようなお方で、何でもお見通しらしく
 「鼠よ。操という女に惚れていらっしゃるが、
 操という字は節操の操だろ。やめろやめろ、
 節操なんてものは、操なんてものは、男が生
 命を賭けるほどのものじゃあない」

と、ひとつの話をしてくださった。

昔――

中国に明という国があった。二代皇帝の恵
 帝は若年であったが宰相の方孝儒がよくこれ
 を輔佐して国民は鼓舞していた。所が、恵帝
 の叔父で北京に封じられていた燕王が謀反を
 起して都のあった南京に迫り遂に恵帝を破っ
 て三代皇帝となり永楽帝と称した。永楽帝は
 捕虜となった方孝儒に次のように尋ねた。

「余の家臣とならば引きつづき宰相たらしめ
 一家眷属望むがままの栄爵を与えん。もし拒
 まば、汝はもちろん一族悉くを火刑に処すべ
 し」と。

「方孝儒の才を惜しみての永楽帝の尋ねであ
 ったが、のう、鼠。そのとき方孝儒は何と答
 えたと思う」

次郎吉は答えることができなかった。

義のために、節操を守って恵帝のあとを追
 い火刑に処せらるべきなのか、それとも三千
 人にあまる一門のものどもの幸福な生活を守
 るために、操を、大義を捨てるのが、まこと
 の人としての生きかたなのかどうか。

呵々、大笑したあの旦那は、

「節操とは、脆いものよ！ 鼠、操殿のこと
 など、あきらめろ。操殿には、女として、ま
 たそれなりの生きかたがあるう。お前は、お
 前のためにだけ生き抜くのじゃわ」

よくはわからなかったが、一人の女を幸せ
 にするよりも、もっと沢山の人の幸福のため
 に生きよと説諭されていることだけは、た
 しかであった。

数日後、無事に操が四郎兵衛のもとに帰っ
 たのを知った俺は、心中は知らず表面はおだ
 やかそうに夫に仕えはじめたのを見て、操殿
 には、また操殿としての生きかたがあるうと
 言ったあの旦那の言葉を想い出し、再びもと
 の仕事にもどった。

そして二年というもの、一心不乱に働きつ
 づけて江戸の貧しい人々から「義賊」として
 喝をあげた。

黒尻善、や工頭監物がいくら切齒扼腕して
 も俺を捕えることはできなかった。

が、その俺にも遂に最後の日が訪れた。

場所は、筆頭老中水野出羽守忠成の上屋敷
 で、季節は、初夏。塩カラトンボが飛び交い
 始めた頃であった。まんまと忍びこんだ邸の
 天井裏から、俺はまたしても見てはならない
 男をみてしまったのだ。

「今度は、寛永寺領五十箇町村の御差配役を
 うけたまわりたいそうじゃの、四郎兵衛」
 「ハッ。御老中さまのお口添えを賜わしまし
 て、ぜひとも」

「フッフッフ、千両箱を二つに、そのうえ
 女房殿まで慰みものとしてさし出すとは殊勝
 な心掛けじゃ。許してとらせるぞ」
 「ハ、ハッ。有難き幸せに存じまする」

亀

すぐ隣の部屋では、すでに素ッ裸に剥きあ
 げられてしまった操が、老中の目を慰めるべ
 く、勘定奉行の肥田と林大学頭の手によって
 「責められ準備」を甘受していた。

「もそつと股を開きなされ。今宵は、ご主人
 の四郎兵衛殿も同席じゃ。なんの遠慮がある
 ものか」

機織り台を低くしたような奇妙な台に坐っ

た操は、両手両足をひろげて縛られていく。

上へあげた両腕のつけねに、こんもりと茂った長い腋毛が悩ましく震えた。

「どうやら観念しきったようじゃな。それとも責められることに愉悦を見出したのか」

林が、ふっくらしたあごに手をかけると鼻さきに唇をあててからかうようにいったが、事実、このように幕府高官に「献上」されるのがこれで七度目になる操の心のそこに、虐待への期待が、まったく無いとはいいきれぬものがあつた。

「女心とはそのようなものよ。憎い憎いと恨んでおつても、肉体がいうことをきかぬ。罵られることが楽しくなつて、ほれ大学頭殿」肥田の目配せをうけて林が操の左の太腿を抱えこんだ。

「ほれ、もそつと、開かせましようぞ」

右の太腿を持つ肥田が、右へ動き、林が左へ移ると、「ア、アッ、アウ……」操の唇から思わず呻きがあがり、両脚が、一直線になるくらいに、ひらかれてしまう。そのまま足首を奇妙な台の右へ左へと厳しく括りつけてしまわれた操は、正面からみると「土」という字に見えたであろうか。

「今夜は格別の趣向じゃ。まずは失心疑いな

かるうのう、林殿」

桜の花びらのように色づいた操の内股を撫でながら肥田が、乳房をしきりに揉んでいる林に呼びかけたとき、

——パシャ！

と、いう音。

部屋の隅の白木の大盥のなかからニョキツと顔を出したのは、なんと亀ではないか。

「カ、カ、カメ……カメ！」

操が、ひきつったように叫ぶ。「さよう。

亀じゃ。いまのは、スッポン、それにアオウミガメにタイマイと、今宵は大中小の三匹がそなたの肉を求めて騒いでおるわ」

チラツと首をのぞかせたタイマイの口が、なにかで括られているのをみた操は、早くも男たちの企みに気がつく、冷水を浴びせられたように歯の根がカチカチと鳴り始めた。

「フッフッ、お氣がつかれたようじゃの。いかにも亀の口は、三味線糸でしっかりと上下を縛ってあるに決して危害は加えぬ。危害を加えぬ代りに、ほれ、あのよう」

つづいて首をもたげたのはアオウミガメであろうか、扁平の足を盥の縁にかけるとギョロリと大目玉を光らせたが、その口もまた閉じられたまま。三味線糸で括ったと肥田は言

ったが確かにそうかも知れない。が、その糸の周囲に、一寸（三厘）ちかくの突起が、いくつもあるのは、なんのためであろうか。

「フッフッフッ、この世の極楽を今宵こそ存分に堪能されるがよからうぞ」

恐怖に口もきけない操の逆三角形の秘苑をまさぐりながら肥田がいったとき、

——パシャ！

というタイマイが水中におちる音とともに襖がひらいて水野が入ってきた。

七度目の悦虐の責場ではあつたが、過去六回は夫がいなかった。今日、始めて、自分の「責められぶり」を夫の四郎兵衛に見られることを余儀なくされた操は、ハツと顔をあげたが、幸いにも視野に入つたのは水野だけ。ホツとしたのも束の間、この世の快楽という快楽をわたり歩いた老中筆頭の行動には、微塵の遠慮もなかった。

「これは佳い肌じゃ。『花の露』の匂いも女の体臭とまじり合うと捨て難いて」

小鼻をうごめかせたかと思うと、やにわに右手を身動きひとつ出来ない操の股間にのばして、

「なかなかの感触じゃ。『みみず千匹』とか『数の子合わせ』とか申すそうじゃが、フム

フム、これならば、絶品」

指先に力を入れて探春し、

操の開かれきった股間の真正面の脇息に倚って盃を手にする水野に、「では」と会釈した肥田は、盃のなかから、まずスッポンを取りあげ、

「それ、それ！ それ！」

と、けしかけるのであった。

スッポン——甲の長さ約一尺、中国では焼肉とし日本では主として水煮きにして食用するが、飢えると共喰いをするところから、忘八（ワンパ）と称されるほど貪欲な亀であり、恰好の強精剤として賞味される。しかしいま、操は、それを恐怖の眼差しで眺めた。暗褐色の斑点を持つ甲が、水かきをもつ前肢の動きとともに迫ってくるのである。

「アッ、アッ！ お、お許しを！」

前肢が、はやくも内股にかかり、操の裸身が悪寒にかかったように震えた。

のそ、のそ……と、長い首をあちこちに突きあてていたスッポンは、すぐに、自分の進むべきところを発見したのであろう、左右の後肢で青畳を支えると、そのまま、首をすすめた。

「ヒ、ヒアアア……」

すさまじい悲鳴が部屋中にひびきわたり、誰かがゴクツと生唾をのみこむ。

乱れかかった黒髪的一端を噛みしめて操はまるで化石になったように身を縮めたが、スッポンは極めて悠々と、その前後への動きをやめようとはしなかった。

「お、お、お許しを！ ア、アレツ……」

悲鳴のあいまに、ほとぼしる、あわれな訴えを、とりあげようとするものもない。

男たちの視線はただ一点に集中している。

天井裏の次郎吉もまた、そのあまりに妖陰な光景に息をのんでいた。

こともあろうに、女をこのように責め苛むとは！

「フッフッフ……」

淫らな沈黙を破ってふくみ笑ったのは水野であった。

「吸うがよい、吸うがよい。そのあとで、お前を喰ってやるわ。ほれ、もっと、もっと、余の代りに精気のすべてを吸いとるのじゃ」

吸いとれといっても口を三味線糸で括られていては、ほんの少しずつ吻（ふん）からしみとおってくるにすぎないであろうに。それでも水野は舌なめずりをしながらスッポンによびかけつづけるのであった。

硬直していた操の裸身にやがて変化がおこって、噛みしめていた黒髪を唇から離し、桜の花びらのような太股にうかべていた二筋の静脈も、いつしか消えていた。

魂切るような絶叫も低くなり、しっかりと閉ざされていた臉からスウーッと涙の一滴が頬を伝わる。

「タイマイにかえるがよからう」

盃を干した水野の声で、肥田がスッポンを操の体からひき離し、林が、タイマイを抱え出す。甲羅の長さ二尺——スッポンよりも一回り大きいその姿をチラッとみとめた操が、ブルッ、ブルッと震えると、瞳を呆けたように見開いて、声にならない呻きをあげる。

「どうじゃな。この亀なら、首廻りといい長さといい、操殿にはぴったりじゃと思うが」

林が、タイマイをドサツと操の前に投げ出す。濡れた扁平の足が、サワ、サワッと青畳を這って一寸、二寸と迫ってくる。

「ヒ、ヒイイイ！」

操の唇からもの狂おしい叫びが再びあがったとき、どこからか、こどもの泣き声が聞えてきた。

責めに熱中している水野たちはその泣き声を無視したが、天井裏の次郎吉は、ハッと胸

をつかれるものがあつた。

いくらあの旦那が冷静になれとおっしゃつても、こればかりはどうにもならない。

二年前のあの夜――

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売!

| | | |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊 | 六〇〇円 (送共) |
| 三月分 | 3冊 | 一八〇〇円 (送共) |
| 半年分 | 6冊 | 三六〇〇円 (送共) |
| 一年分 | 12冊 | 七二〇〇円 (送共) |

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)」のいずれかをご利用

四谷の四郎兵衛の家から操を掠めとって過した高田の馬場での三日間の愛の生活の日々に、操は俺の子をみごもってくれたのだ。

小さな穴から見おろすと娘に抱かれて泣き

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代六〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金切れしましたときは、封筒の上に「本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お申し込み願います。継続のお申し込みでも何月号からと御明記願います。」

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。局での留置期間は十日間です。御受領願います。局での留置期間は十日間です。御受領願います。局での留置期間は十日間です。御受領願います。

じゃくっているこどもの目鼻立ちが、自分自身に、そっくりに思われる。

ひらりと部屋に舞いおりた次郎吉は、女中の手から、こどもを奪いとると脱兎のように廊下に走り出た。

物音にきがついたのか夜詰の侍たちが、おっとりと刀で駆けつけてくるのが目に入ると、雨戸を蹴破って庭へ――塀際にある榎の巨木の下枝にとびつこうと踏躍した。

その刹那――ぐわりと五体が揺れて次郎吉は、こどもを抱いたまま深い穴の底へと沈んでいく自分自身を意識していた。

たちまち頭上から幾つもの籠灯の光がさしこんできて、騒然としたなかにひとときわ高いこの邸の主人・筆頭老中水野出羽守の声がひびいた。

「何か、いわくがありそうじゃの。ハッハッハッハッ、連れて参れ! かまわぬ」

筆頭老中の邸に忍びこむだけでも尋常ではないというのに、金銀財宝でなくこどもを、しかも客人として迎えた二宮四郎兵衛夫婦の子を盗み出そうとするには深い事情がなければならぬ――これは今夜の淫楽の宴に、いよいよ趣向を加えることになるやも知れぬと判断したのであった。

つづく



美女アヌス責めの構想と実験

私は『美女責め』特に『アヌス責め』に興味があり、全裸の美女を、あらゆる姿態にして、徹底的にアヌスを責めております。案外にアヌス責めを喜ぶ女が多いものです。私の経験上からみて、アヌス責めを行なう際の注意点を二、三、述べてみたいと思います。

一、女の選定について

- 1、ヒップの大きなグラマーが適当です。
 - 2、痔疾のない健康なこと。
 - 3、美人にこしたことはありません。
- 二、アヌス責めに至る過程について
- 1、必ず全裸にすること。
 - 2、高圧浣腸は必要です。腸の中に汚物があると責めの最中、排泄する恐れがある。
 - 3、直腸は勿論のこと、大腸、小腸に至るまで完全に排泄物がなくなってから、責めのプレイに移る。

後^{しり}野^の満^{みつる}

三、アヌス責めに使用する器具について
「アヌス責め」の醍醐味は、やはり一番苦痛の伴う八拡張責めVが、よいようです。

指一本すら入らないくらい、よく締まっているアヌスを、驚く程拡げて、直腸の奥の奥まで覗き観賞することは、アヌスマニアとしては、まさに桃源境に遊ぶ思いがします。

器具として、産婦人科医が膣を拡張するときに用いる子宮鏡（一名クスコ）が適當のようです。

四、アヌス拡張責めの過程

1、先ずアヌスに潤滑油（ポマードがよいようです）を、たっぷりと塗り、内部の周囲にも、よく塗ります。器具にも、まんべんなく塗りつけます。

2、器具を閉じたまま、先端をアヌスに当てて押し付けると、案外容易に挿し込むことが出来ますが、女によっては冷たい金属感と

異物感だけで、苦痛を訴えるものがあります。

3、愈々拡張作業ですが、なるべく、ゆっくりとネジを回します。器具が先端の方から徐々に二つに割れて拡がり始めます。

始めての女は、二センチ位になると相当な苦痛を訴えますので、暫く煙草でも吸って休んで下さい。最初から全開まで開くのは無理のようです。器具は全開しますと、先端が10センチ近くまで開きますので、或程度の経験者でないと辛抱できません。

でも、慣れというものは恐ろしいもので、飼育済みの女性になりますと、鍛錬次第では器具を全開しても、まだ余裕があるようになります。全開しますと、腸管がピンと張りきって、奥の方まで、よく見ることが出来ます。

4、私の今、責めているプレイメイトの女は、全開にしても、もっと拡げてくれという程になっています。最初は、「痛い、痛い」の連発で閉口したものでしたが……。

五、アヌス責めの実験

身につけている衣類はすべて脱がせ、うつ伏せに固定します。

白くて豊満なお尻だけが高く上がるようなポーズをとらすのです。私は女の肘と膝とを

縄で拘束しますが、好みによっては、単にそうした尻立てのポーズをとらすだけでもよいでしょう。目の前に高々と突き出た双丘の中心に、可愛いアヌスが責めを待っています。

高圧浣腸器イルリガートルの嘴管が女のアヌスに、三〇〇〇ccもある食塩水を送り込み徹底的に、大腸小腸の中まで洗滌します。

食塩水と石鹼水と交互に、何回も浣腸された上で、次には水道の水まで注がれます。水道の蛇口から連結されたホースの先端に、嘴管がとりつけられるのです。

水道の冷たい水が、シウルシウル、シウルシウルと音を立てて、女の腸内に面白いように流れ込んでゆきます。女の腹が忽ちのうちに、妊婦の腹のように膨らんできます。

貯まった水を全部、排泄させますと、女の腹の中の大腸、小腸まで、徹底的に洗い清められてしまいます。

こうして、汚物を、すっかり洗い流してしまっておいてから、愈々アヌス責めのプレイに移るのです。アヌスの拡張Vという責めは普通だったら、指一本受けつけないアヌスを器具を用いて、極限にまで拡張、直腸の奥までを觀賞し責めるといふプレイです。なるべくアヌスに力が入らないように、口

から呼吸することを強制するため、女の鼻の穴に脱脂綿を固くギュウギュウ詰めます。詰め込んだ綿が外部から見えないように、奥の方へ押し込み、そんな顔の表情が、よくわかるように顔をグイと上にあげると、牛にする鼻環を女の鼻にパチンとはめ、天井か鴨居のくさりにつないで上に引き上げます。

顔を下にさげると鼻が引っぱられて激痛が襲うので、嫌でも顔を上げていなければなりません。鼻に詰物をされているので鼻から呼吸出来ない女は、口を大きくあいて、はあはあ、息をつきながら目を半眼にしています。

私は肛門拡張器を手に入れました。

先ず指で、ポマードを奥の方まで丁寧に塗りつけ、器具にもコッテリと塗ると、いよいよプレイ開始です。

器具の先端に少し抵抗が感じられるだけであとは案外たやすいのですが、たつぷりと塗りつけたポマードが、器具の根元にたまり、冷たい金属の感触が、女の腹の中まで、しみわたるのでしよう。思わず、ブルブルと女の体がふるえます。

私は器具のネジを静かにジリジリ、ジリとネジを回して嘴を開いてゆきます。徐々に器具の先端の方から、上下に二つに割れて、少

し宛、拡がってきました。

女の顔は次第に紅潮し、額に汗を滲ませてウンウンと、うめき始めました。

器具が拡がるにつれて、激痛が襲いかかる筈です。拡がってゆく直腸の内壁に、丹念にポマードを塗って裂傷を防ぎながら、静かにネジを回してゆきます。

それにつれて女の苦痛も、だんだんと激しくなっていくのでしよう。ウン、ウンと、うめき声を洩らしながら、自分のアヌスが大きく大きく拡がってゆくのを、じっと辛抱しています。

見ますと、今の今まで、指一本も受け付けないように、よく締まっていたアヌスが、驚くほど大きく拡げられています。締めようとする肛門括約筋の力も、器具の力には、到底抵抗出来ません。

ジリ、ジリジリ……と、ネジは回わされ、遂に全開までもう少しというところまで拡張されました。直腸の奥まで大きく拡がり、大腸の入口まで、手にとるように、よく見えます。直腸が極度に拡げられているので、物凄い排泄感が襲ってくるのでしよう。女の豊満な真白い臀部から太腿へかけて、ブルブルとふるえ、目には涙さえうかべて、苦しみもが

いています。

うん、うん、と呻き声を洩らす、こんな女の苦しみも意に介せず、私は綿棒を手にする、と、拡げきった直腸の奥まで、のぞき込みながら触って楽しむのです。

更にネジを回します。遂に女のアヌスは全開にまで拡がりきってしまいました。

もう、これ以上は、どうにもならないといった緊張は全く素晴らしいものです。コブシの掌も入るほどに大きく拡がって、大腸の入口がヒクヒクと動いているのがよく見えます。

次には、この拡げられたアヌスに、日本酒を一杯入れ、体温でおカンをした上、この酒をビニールパイプで、女の鼻から飲ませるというプレイをするのです。

そのために、今度は女の鼻の穴を徹底的に掃除することになります。先ず詰めてあった脱脂綿をつまんでポイと捨てます。

女の心持ち高い鼻を、人さし指でグイと上向けにして、先ずコヨリを挿し入れます。

アヌスを器具の全開で、思いきり拡げきった姿のまま、更にその上、鼻責めにあうのですから、女の苦痛は如何ばかりでしょう。

アーンと、口を開けさせると、ノドの奥にまで達したコヨリが白く見えます。そのコヨ

リを、口からピンセットで引き出します。透明な鼻汁がコヨリにまつわりついて、ずるずると、鼻を通して口から出てきます。

上向けにされた女の鼻の孔が細長く伸び、上唇まで吊り上げられて、真白い歯が、ちらちらと覗き、目を半眼にして、クシャミを必死に我慢している女の表情は、またとなく美しいものです。

コヨリ責めの次は綿棒です。これもノドに達するまで、ゴシゴシと左右の鼻の穴に挿し込んで、女の鼻の煙突掃除です。眉を八の字型にして、今にも出そうになるクシャミを我慢し、目に一杯、涙をためている女の表情は私の嗜虐心を快く、くすぐります。

鼻の掃除が終わりますと、二本のビニールパイプが日本酒を一杯、溜めたアヌスの中の池へ漬け込まれます。私はパイプの先端を口で吸ってパイプの中に酒を満たしておいてから、パイプの途中を指で摘んでおいて、その先を鼻の穴へ挿し込みます。

こうしておいて、パイプを摘んでいた指を放しますと、サイフォンによって、アヌスの中の日本酒は体温でおカンされて、女の口の中へ流れ込んでゆきます。

なんと、面白い責めプレイでしょう。

手記

幻の須磨の女ひと——麗子を訪ねて

——本誌4月号の黒崎麗子嬢の△呼びかけ▽

紫 四 季 生

「私とプレイしてみませんか」にに応じて一体何十人の人が須磨を訪れたのであろうか。私には正確に分る由もないが、その中の一人として須磨訪問の記を書いてみようと思う。

日頃、物を書く機会が多いのに本誌に投稿するのは初めてと言ってよい。かつて、読者通信に一度だけハマゾ女性を求める▽便りを出したきりで、あとは専ら皆さんの手記などを時には楽しく、時には、うらやましく読ませていただくだけで「私などとても、とても……」という気持が強かったのに敢えてペンを取る気になったのは、後で詳述するが、須磨へ出かけたための思わざる余得かも知れない。

△須磨へ向う▽

もうすぐ彼岸だというのに冬が逆戻りしてきたように寒い日である。京都の街は朝から曇り空に時折、うす陽がさす程度で比叡下ろしが、やけに冷たい。三月の第三日曜日の十七日である。指折り数えてと言っている程、待っていた日なのに、午後からの、のんびきならぬ所用のため、京都発明石行きの快速に乗って動き出したのは、六時四十六分であった。自分の車で行けばカメラ道具やプレイの品など持って行けるのだがと迷ったものの、日曜のことと



で、もし行楽帰りの車などで高速道路が停滞しているようだと、八時に着くのは覚束ないと思うと車は諦めざるを得ない。麗子嬢の呼びかけに応じて大丸の紙袋だけさげてゆくこ

とにした。生真面目に紙袋など持っているのと駅前にいるマニアの人達には一目瞭然、それと分るだろうと思うと、いささか、躊躇しないでもなかったが、指定は指定だと思いきって、大きな袋をさげてゆくことにした。車内放送で各駅の停車時刻を告げているが、途切れ途切れで、さっぱり聞きとれない。車掌室から出てきた乗務員に尋ねると「八時八分です」。八分、遅刻だ。「ひょっとして、この八分が致命的な遅れになって、出逢えなくなるかもしれない」と思うと、やたら電車が遅く感じられる。目を閉じていると色々な思いが頭に浮かぶ。

……黒崎麗子とはどんな女性なのだろうか。あの呼びかけは本当のことだろうか。あのように誌上一般公開のような形で呼びかけて、沢山の男性が集まるだろうが、自分の服装まで指示していて、出て来た場合、その男性達を、どのように処置するのだろうか。ひょっとすると、あれはイタズラで、集ってきた馬鹿な男たちを自分はそれとなく、どこかで見物して笑っているのかもしれない。それとも暴力団か何か、^{つもとせ}美人局の恐れもある。そうだとすれば真面目なマニアの集りである奇ク

を全く冒瀆しているが……。

まあいいや。たとえ、そんな危険があるとしても、こんな機会があれば何を措いても出かけてゆくのがマニアというものだろう。それに、もしそうだとしても、いきなり刃物でも出さない限り、柔道と空手で鍛えぬいた体二人や三人なら倒せる。今度の第四日曜は出張でどうしても行けないから今日を措いて機会は無い。だが、これが真実であって麗子嬢が出て来たとしても、果して自分に交際しようと言ってくれるかどうか。それにしても八時から十時まで二時間というのは、どういう意味だろう。麗子嬢が品定めをする時間だろうか……

あれこれ思っているうちに、やがて電車は須磨の駅へ、たどりついた。外はもう夜の闇である。

△駅前——そして一人の女性と▽

期待と不安で胸をはずませながら駅の階段を降りた所が、指定場所のタクシー乗り場であった。乗り場の標識の所に立っているとタクシーが寄ってくるので、少し離れた階段の横に立って待つことにした。海が近いせいか風が強く寒い。煙草を一服、吸って落ちつい

たところで、狭い駅前を見まわしてみると、それらしい男性が、いるいる。だが馬鹿正直に大きな紙袋をさげているのは、どうも私だけらしい。白ナンバーの車も道の両側に大分停まっているが、この中にも同じ目的のマニアの人達がいるに違いない。ざっと見ても二十人は下らないようだ。それにしても、赤いミディのコートに黒のパンタロンの女性とは……。見当らないなあ。

あっという間に、二十分が過ぎる。八時半だ。さっき向うの道を誰か人を探している様子で、歩いてきて引き返していった若い女性が、こちらの道へやって来るのに、ふと気づいた。服装は全然、違う。うす暗くて、はつきり分らないがモス・グリーンのような、おとなしいツーピースだ。横を通って階段下の奥の暗がりの方へ行き、五米程先で佇んでいる。どうもおかしい。ひょっとすると、この女性ではないか。思いきって声をかけてみることにした。

「失礼ですが、黒崎麗子さんではありませんか」

「ハア？ いいえ、違います」

同じように感じたらしい男の人がやって来て、声をかけようとした。

「この人は違うよ」

「エッ、そう。あの麗子という人とは……」

「ウン、違ふらしい」

一言、二言、言葉を交わして帰って行った彼が、後で知りあう八名古屋のロマン派生Vであつた。その間に、やや通りに近い方の階段脇に移動していた彼女の所へ、私が来る前から待っていたらしい、中年の紳士（小脇にかかえておられたのは大丸の紙袋であつたろうか）が、やはり「黒崎さんですか」と尋ねた様子。同じ答えだったらしく、すぐ元の所へ帰られる。

寒い。体の芯まで冷えるようだ。よくオーバーを着て来たものと思う。一人でボヤッと立っているよりと、彼女に話しかけてみる。

「さっきから何度か黒崎さんですかって尋ねられたでしょう？」

「エエ、黒崎さんって何ですか」

改めて顔を見る。先程の暗がりでは、はっきり分らなかつたが、色が白くハツとするような美人だ。誰かに似ている。誰だったろう……。そうだ女優の松坂慶子だ。まだ若い。十九か二十才位だろうか。

「もう、五、六回、尋ねられました。黒崎さんって私に似てゐるんですか」

「いや、誰も知らないですよ。ある雑誌で

黒崎さんという方が呼びかけられてネ。それで皆、集まって来たんですよ。世の中には色んな趣味って言ったらいのかな。趣味の人がいてネ。僕もそうだけど」

「趣味って……。変な趣味ですか？」

「変といえば変かな。僕たちにしてみれば真剣なんですネ」

しばらく沈黙が続く。

「ところで貴女、京都にいらしたことがありますか」

「いいえ、まだないんです」

「ふーん、近いのにネ。このあたりの方ですか」

「そうです」

「暖かくなつたらいらっしゃいヨ。きれいですよ、京都は。僕は京都から来たんですが、もっとも春は人間が多いけどね」

ほんのり、ほほえんで、うなずいている。

「先程、貴女が変な趣味って言ったけど、貴女が考えた変な趣味というのは、どんな風に考えたの？」

困つたように首をかしげた。返事はない。当然だろうな。

「私、ちょっと通りの方を見て来ます」

あつさり外された感じだ。

一人でいると風がこたえる。目の前の食堂にでも入ろうかとも考えたが、もしその間に黒崎嬢でも現われると元も子もない。そうこうしているうちに、食堂もシャッターをおろし始めた。じつとしてみると、ますます寒さが身にしみる。通りの方でも見てみるか。十米程、歩いた所で家と家の間の50センチ程のすき間の暗がりには身を寄せている彼女を見出した。

「あれ、まだ、いたの」

時計は九時十五分を指している。

「誰か待ち合わせですか」

「ええ、そうなんですけど……」

「しかし貴女も、ずい分、我慢強いですネ。」

もう一時間以上になるでしょう」

「はい」

「お勤めですか？」

「そうです。明石の方に勤めてます」

「いったい何時の待ち合わせですか？」

「その人、姫路の方の人なんです。車だから正確には分らないから、九時から九時十分の間でという約束なんです……」

「へー。それに八時頃から待ってるの。貴女みたいなきれいな人に、これだけ待っても

「ええ、その男性^{ひと}幸せなひとですねー」
 本当に驚いた。余程、惚れてるんだなと思
 つ。それにしても夜九時の待ち合わせとは遅
 いな。

「寒いなあ。どっかにお茶でも飲みに行こ
 うか」

「ええ、でも、もしその間に来たら……」

しきりに停まっている車の中や、駅に向け
 て走ってくる車を気にしている。

「どんな車で来るの」

「わからないんです。友だちの車、借りて来
 るから」

「しかし貴女が分らなくても、彼の方が見つ
 けてくれるでしょう」

「でも私が他の男の人と話しているから、声
 をかけられないのかしら」

「まさか」

ヤレヤレ他の男の人とは俺のことか。

「それじゃ、停まっている車の中を見て来た
 ら……」

「……ええ、でも私、近視でよく見えないん
 です」

「いや君が見えなくても、彼がいれば彼の方
 が声をかけてくれるよ」

「そうですね……」

「それじゃ僕と一緒に歩いてあげるから、こ
 っちと向うの通りの車の中を、のぞいて行っ
 てごらん」

二人で歩き出す。ずーっと私たちのことを
 見ている人がいたら、いったいどうなったん
 だろうと思うだろうな。残念ながら、私は全
 くのエロの役割でしかない。一通りまわっ
 てみたが、いなかったようだ。

「まだだね」

「……わたし、どうしようかしら」

「電話があれば電話してごらんよ。それでも
 し駄目だったら、僕とお茶でも、飲みに行こ
 う。もう十時前なもの」

「そうですね。電話してみます」

すぐ近くに公衆電話があった。小走りに電
 話機にかけより彼女が十円玉を入れた時、横
 の通りを一台の車が走って来て、駅の階段脇
 にとまった。これではないのかな……。それ
 は私の直感だった。彼女はダイアルをまわし
 ている。車のドアが開いて彼が手を振った。
 目ざとく彼女が、それを見つけた。

「あっ、来たわ！」

くるりと、こちらを向いて頭を下げた。

「良かったね」

もう、走り出している。本当にうれしそう

に。△よかったね▽とは言ったものの、私は
 やはり残念だった。心の底のどこかには、こ
 の子が黒崎麗子嬢ではないのだろうかという
 疑問をすてきれずにいたから。車は走り去っ
 ていった。

△仲間を得る……▽

十時十分前になっていた。一人になると、
 骨の芯まで冷えきっているのが意識された。
 △やっぱり現われないか……▽予め覚悟して
 いたとはいえ、期待が空振りに終わると、寒
 さの中で空虚さが心にしみる。

その時、

「どうです。車に乗りませんか。寒いでしょ
 う」

と一人の男性。

とっさに言葉が出ない。

「いや、私も待ってたんですがね。寒いか
 らどうぞ」

「いや、しかし……」

「いいですよ。車の中にも一人いるんです。
 私は三重から来たんですが、あの人は名古屋
 からなんですよ」

奇巧の愛読者であることに間違いは、なさ
 そうだ。

「では、お願いします」

「どうぞ、どうぞ」

車の中は暖かった。全く救われた思いであつた。好意が身にしみて嬉しかった。

車の中のもう一人の男性は、最初、階段脇で先刻の女性に声をかけようとして私が「この人は違いますよ」と言った人だった。

「いや、この人ともね、ここに來て知りあつたんですよ」

「僕は名古屋からですが、お宅は、どこからです」

「私は京都です」

「ああ、そうですか。近くでいいですね。きれいな標準語だから東京の人かと思った」

「三重は、どちらですか」

「松阪の方です」

「そうですか、お二人とも遠いんですね」

名前は皆それぞれに遠慮して尋ねもせず、尋ねられもせず、明かさずじまいであつた。

「何時頃、来られました」

「八時八分に着きました」

「やー 余裕がありますね。私らは二人とも七時頃から、ここにいるんですよ」

余裕があつた訳ではない。八分の遅れにイライラしていたのだ。

話は当然、黒崎嬢のことになる。名古屋氏が色々分析する。

「考えられるのは、女としてここに来るのが怖くなったのと違いますか。それとも投稿したのが親にばれて、軟禁状態で出られないとか……。とにかく十五分過ぎまで待ってみましょうか」誰も異存はない。あと七八分だ。

「それにしても皆、頑張つて待ってますね」

「本当に。でも、半数は帰つたようですな」

「来週は来られますか」三人とも来週は差しつかえがあるようだ。

「せっかくこうして知りあいになれたんだから、是非又会つてゆっくり話したいですね」

「そうそう。奇クの誌上をお借りして、お互いに呼びかけましょうや。となると、それぞれ、やっぱりペンネームがいりますね。僕は名古屋のロマン派生で時々出してますから。

三重の人は、どうします」

「そうですネ。ウーン、それじゃ本居宣長もとおりの本居にして下さい」

「京都の人は」

「本居宣長ですか。それでは僕は紫にしてください」

「ああ、色の紫ですな」

「ああ、色の紫ですな」ということで三人のペンネーム決定。

「ところで、これからどうします。名古屋さんは姫路の方の友達の所に行かれるそうですね」

「私は京都ですから帰ります。本居さんは」

「そうですね。このあたりの旅館にでも泊るうかと思つてゐるんですが」

「それでは京都まで来られませんか。私の知つている旅館もありますから紹介しますよ」

「ああ、いいですよ。帰り道だから」

「ということで名古屋のロマン派生氏とは、ここで別れることになった。」

「是非、今度いつか、お会いしましょう」

三人は異口同音に言いあう。それはお互い会つたばかりの者同志とは思えない親近感に満ちていた。似たような性癖を持ち、はるばる須磨までやって來たマニア同志の者だけが

持ち得る親近感であつた。

黒崎麗子嬢には逢うことが出来ず幻の女性となつてしまつたが、それを補つて余りある仲間との出会いが私には嬉しかった。須磨へ來たことが、これで無駄にならずにすんだと思つた。

《本居氏と語る》

ロマン派氏と別れ、車は阪神高速・名神高

速を京都へ向かう。本居氏と私の車中での会話の抜粋である。

「今日は残念でしたなあ」

「そうですね。でも私たちは友達が出来て良かったですよ。立ちつくして何もなしに一人で帰るよりは」

「そりゃ、そうですね。紫さんはプレイの経験はありますか」

「いや、プレイと言える程のものはね。まだまだ未熟です。何しろ女房に理解がありませんから、相手がネー」

「そうですね。うちと同じですな。全く理解がないですね。奇クを読むのに苦労します。読んでるだけで角を立てますから。ガール・フレンドが一人いるので、これを飼育しようと思ってるんですがネ。いつかハ刺ってやろうかVって言ったらハいいわよVなんて言うてたから脈はあるんですがね」

「それはいいですね。とことんプレイ出来る女性が欲しいですね」

「塚本先生なんか、本当にうらやましいですね。紫さんはS・M研究会の申し込みされましたか？」

「ええ、手紙出したんですが、まだ返事をいただけてないんです。奇クで拝見すると、ず

い分、申し込みが多いようですから、大変なんでしょうね」

「そうですね。会員になれたらと思うんですが……」

「まあ、ロマン派さんと三人だけでも心ゆくまで語りあいましようよ。そのうち近郊の者が集って会合でも開くようにしたいですね。そうなれば塚本先生にお願いして講師として来ていただければネー」

「楽しいですね。紫さん、趣味は何かありますか。私は無趣味でしてね」

「そうですね。私も特にこれといってないんですが。以前はボーリングに通いましたが。写真は好きですね」

「ほう。自分で現像・焼付されますか」

「ええ、黒白でしたら。カラーは道具をそろえてないので出来ませんが」

「それじゃ、いつかお願いするかもしれません。よろしく」

「どうぞ、どうぞ、いつでもやりますよ」

「鞭打ちなどは、好きですか」

「そうですね。限度がありますけれどね。余り強いのはどうも。やはり羞恥責めが得意です。好きですね。本居さんはどういうタイプの女性が好きですか」

「どっちかと言えばグラマーがいいですね」

「そうですね。僕は細身の女性が好きなんです。前田真知子さんとか鈴木千鶴子さんのような」

「まあ、しかしプレイ出来れば、自分の好みなど、どうでもいいですけどね」

「ほんとに、そうだ」

二人で笑っているうちに京都の灯が見えて来た。駐車場の車を取りに寄ってもらい二台で河原町に出る。時刻は十一時半。三条に近い知りあいの旅館を尋ねると幸い部屋があった。門限十二時半ということなので、時間はあまりないが、近くで乾盃でもしようかということになり、行きつけのスナックに行くが日曜で休業。やむを得ず木屋町の寿司屋で食べながらということになった。二人とも酒が弱くお銚子二本でお互い真っ赤である。

「今度、京都でも会いませんか。名古屋のロマン派氏にも呼びかけて」

「そうですね。それじゃ五月の初旬にでも」

外に出ると、木屋町のネオンが、まぶしかった。必ずの再会を約し、旧友と別れる思いで帰途についた。

車を運転しながら帰る道、今日の半日が走馬灯のように脳裏を、よぎってゆく。

<M女通信>

密室の中での妄想

高村浩子



忘れよう、忘れようと、何度思ったか知れない、この私のマゾの性癖は、そうした私の必死の努力を、あざ笑うかのように、この私の体の中で暴れまわっています。

男の方に、この体を素裸にされて縛られたい、いじめられたい、おもちゃにされたい、なぐさみものにされたい、という気持は、今でも忘れ去ることは出来ないのです。

奇クにさえ遠ざかっていたなら、このいまわしいマゾの性癖が忘れることも出来るのではないかと、一年ばかりは、見たいのを、じっと辛抱していました。おつき合いをしていた方たちとの縁を切るためにも、勤め先やアパートも変りました。

けれども、そうしたことだけでは、私の体の中は巣くっているマゾの性癖が、おさまってくれる筈ありませんでした。

夜、自分の部屋で一人になりますと、男の人たちに、いじめられたいという気持が、ひしひしと体の内から湧き上ってくるのです。

縛られなくても、素裸にされて、自分の体を眺められるだけでもいい。そうされたいと私は、強く望むのでした。

そんなことを、夜、自分の部屋で、ひとり考えておりますと、今までの責められた体験

が目の前に浮んできました、それに妄想がからまって、体がずたずたにされたみたいになってしまいました。

「ああ、いじめてほしい。いじめられたい」そんな気持が、私の体をさいなみはじめるのです。辛抱しよう、じっと、辛抱しようと何度、思ったことでしょうか。

でも一度、あの責められるときの、たまらない気持、あの陶酔を味わってしまった私はどうしても、この思いから、抜けだすことは出来ないのです。

私は、もう完全にマゾの女です。これが最後だと自分に言いかけせていても、それが最後には、どうしてもならないのです。

空白の時間があっただけに、最近のマゾの妄想は一段と激しさを増してきました。

なんとか、こんなマゾの性癖は、忘れよう、忘れよう、何度思ったか知れませんが、でもこの私には、どうしても、忘れることは出来ないのです。

空白の一年間のあの淋しさ。手の中の宝物を失ってしまった空しさ。生きる望みを、すべて失って、「死」をさえ考えた私でした。

思えば、何故、このようにしてまで、マゾの性癖を避けようとしなければならなかった

のでしょうか。

男性の方にいじめられたいという性癖が、それほどまでに、いまわしいものなのでしょうか。ふと、そんなことを考えたりします。

でも、私にとっては、理屈などではありません。文句なしに、男性の方に、全裸にされ縛られ、責められたいのです。それ以上に、私を辱かしめ、弄んで欲しいのです。

一人寝の床の中での私の妄想を告白しますれば、それはもっともっと、おぞましいものなのです。私は暴漢に襲われて犯されている自分を妄想して、限らない愉悦を味わっているのです。私という女は、そんな恥知らずな女なのです。

ですから、たとえ裸にされるにしても、自分で洋服を脱いだり、静かに脱がされるということは好みません。いつの場合でも、暴力的に、荒々しく、無理矢理に脱がされることを好みます。縛られることが好きというわけ



ではありませんが、体の自由を奪われるということを連想して、縄を見ると燃えます。

私の体を辱かしめ、弄ぶために、縄を使って、私の自由を奪ってほしいのです。抵抗する私を、縄によって動けないようにしてほしいのです。心の中で弄んでほしいと願っていても、やはり、私は、そんなとき、拒否



し、抵抗をします。自分から進んで、自由になるということは嫌いなのです。

私が観念して、身も心も擧げて悔いのない気持ちになるために、縄を使って、この私を縛り、責めてほしいのです。そうして、責めていただきました以上は、私は最高に燃え上るのです。私は、普通のことで、余りに燃えない自分を知っています。

やはり、私はマゾ癖の女なのです。

私は、本能的に、相手の男性の心を見抜いてしまいます。それは自分でも恐ろしいくらいなのです。相手の男の方が、私の体を責めることを一瞬でも、ためらわれたりしたら、私のマゾの心も冷えてきます。それは、何故なのか私にもわかりません。

とにかく、私は、男性の方にいじめられたいのです。女

性の方にだったら嫌です。男性の方にだったら、何人の方に、同時に責められても、私は本望です。

私よりは、大分、年上の方と、お見受けしますが、最近、奇ク誌上に、よく顔を出される苗木陽子さんのように私はなりたいと思っています。特に4月号の『淫らな指の秘密』で、塚本さまと坂本さまのお二人に責められている場面は素晴しかったです。私も陽子さんが羨ましくなりました。私も、こんなにして、責められたいと、つくづく思いました。

こんなマゾ癖の強い私を、責めて下さる方って、いらっしゃるのでしょうか。

こんな思いを告白する場なんて、奇ク以外に見当りそうにもありません。

忘れよう、忘れようと、必死になって努力してきました、この私のマゾの性癖も、どうしても、忘れ去ることが出来ないものだと思えば、逆に、この性癖の中に、心も身も、とっぷりと浸って溺れてしまいたい気持ちがします。そうすることによって、忘れ去ることが出来るものなら、そうしたいです。

今、私は、自分の一室で、このペンを走らせています。お友達の少ない私は、心を打ち明けて、お便りを書く相手もございません。

せめて、苗木陽子さんのように、奇ク編集長に当てて、手紙でも書ける気持にでもなれたらいいのですが、今の私は、あの方のように素直な気持にはなれないのです。

じっと、一人で個室にこもっておりますと次から次へと、あらぬ妄想が湧いてまいります。これも、空想癖の強い私だけに限られた幻想なのでしょう。他の若い女性は、そんなことはないのでしょうか。

昼、仕事を忙しくしている時は、そんなことはないのですが、夜、自分の部屋に戻って静かなたたずまいの中で、一人になりますと自分の体が、どうなってしまうのかと思うほど、いらいらしてくるのです。

いじめられたい、いじめて欲しい。私を裸にして縛って、いじめる人はいないのか、という思いが、私を駆りたてます。若いこの私の肉体を、今のうちに、責めてくれる人はいないのか。若い今のうちに、いじめて。

そんな足踏みしたいような気持が、この頃では、毎晩のように私の体を襲ってきます。

奇クを読んで、そんな気持を少しでも、まぎらわそうとしますが、なまじっか、雑誌を見ると、そんなマゾの性癖が一層、激しくなってくるように自分でも思えるのです。



あれほど、忘れよう、忘れようと努力していたのに、今では、そんな努力も水の泡になってしまいました。それと言いますのも、昨年の暮れに、一生の思い出にと、禁断の誓いを破って、SMプレイの甘美な味を味わってしまった、その罰なのでしょう。

もう、これ限りで最後なのだと、そう自分に言い聞かせていた筈なのに、あれから、二度も、あのしびれるような体験をしてしまった私なのです。身も心も、とろけてしま

そうになる、あのいじめられ方は、私の体に熱い烙印を押してしまいました。

私のマゾの性癖は、もう一生、治らないのでしょうか。どうか、こんな私を、お助け下さい。私をお助け下さる方の前に、私は、この身を投げだして捧げて悔いませ

静かで、長くて、暗い夜が来しました。

一糸もまとわぬ素裸にむかれた私は、妄想の中では、荒縄でガングラメに縛られています。私の肌が、縄によって、痛く縛られ

ば縛られるほど、私は嬉しいのです。いささかの手加減もせずに、思いきり凄く、恥かしい格好に縛ってほしいのです。

『山の彼方の空遠く、幸い住むと人の言う』ロマンチックな思慕を抱いていた私の夢は、今では、もっと現実味を帯びてきています。ひしひしと海老貴めに縛り上げられた自分のお尻が、高々と上を向いて、恥かしい部分が男の人達の目に触れて、嘲笑を浴びているといった夢を描いています。

浩子は、そんなことを、夜、ひとりで妄想している恥し恥ずかしい女なのです。

三月号の八告白Vで申し上げましたように私は今、以前のように、お手伝いをしております。四年前に、初めて都会に出てきました頃より比べますと、少しは都会生活の風習にも馴染み、地理も明るくはなりましたが、やはり服装は、その当時と、余り変わっておりません。もし、平常の私を見られたとしたら、こんなマゾの性癖を持っている女だなんて、どうして、気がつくでしょうか。誰も、きつと気がつかないと思います。

私は、生活するとしたら、都会で住むよりも、田舎で住みたいと思います。私の性格からして、田舎暮らしの方が適しています。でも

今は、やはり都会で住むより仕方ありません。田舎には、私のような若い娘を高給で雇ってくれるところがありません。ただ今の勤め先は食住がついていて、勿体ない位のお給料を下さっています。それで、知らず知らずに、貯金も出来てきます。

水商売に入っていると収入も多いでしょうが、住居とか化粧代、衣裳代、それに外食費なんか馬鹿にならないと思います。その点今の私は恵まれています。

桜の花が散り、庭に若葉の緑が日毎にふえてきますと、朝早く起きるのも楽になり、薄着の肌がなんとなく物淋しく感じられてくるようになります。

自分の肌に、縄がまといつかない日が長くなりますと、物足りなさが、ひしひと身にしみて感じられます。

たった一人でいることが、こんなにも淋し



いのに、我儉な私は、やはり一人でいたいのです。そして、一人でいると、きまって襲ってくるマゾの妄想が私を、さいなみます。

それでいて、自分の身をさいなむ筈のマゾの妄想を、むしろ心待ちにしている私なので



す。こんなのを、△自虐△というのでしょうか。なんとも、やるせなくて、そんな気分を味わいたいという気持が強くなります。でも、その後で、いつも空しい気持を味わいます。やはり、実際に、この自分の体が、S傾向の男性の方から、全裸にむかれて責められたら、どんなにいいだろうかと、胸をわくわく

躍らせてしまうのです。

羞恥責めでしたら、どんなことをされるのも好きな浩子です。浣腸も、アヌス責めも大好きです。奇クを読んでいて、いろいろな縛り方や責め方を知りますと、そうされている自分を、必ずといってよい程、頭の中で空想してしまいます。一度、東京の読者の方で、

私に、それはそれは詳しい、長文の「責めのアイデア」を送って下さった方が、ございました。私は、もう、何度も何度も、そのお手紙を読んで、まるで自分が、そんな責め方をされているような気持になって、体中を熱くしてしまいました。

雑誌やお手紙を読んでいるだけで、私のマゾの性癖が満足するのだったら、どんなにいいでしょうか。私は、そうありたいと願っておりますのに、今日のように人恋しさが募ってまいりますのは、どうしたことでしょう。

この体が、くたくたに疲れきってしまうまで、責めて責めて、いじめ抜いてほしいと願う浩子は、欲深い女なのでしょう。

今、戸外では、春雨が、しとしとと降っております。ペンを走らせておりますうち、私の心も、しっとりと落着いてきました。

どうか、この私にお便りを下さい。私は必ず、お返事を書きたいと思えます。そして、私の心と体とを、貴男の手とペンとで、無茶苦茶に責めて下さい。きっと、責め甲斐のある浩子に、なってみせたいと思っています。

貴男のドレイ浩子より

S傾向の貴男様へ

—(おわり)—



カット・岡たかし

床

の

上

の

壺

サスペンス・Mミステリー

浅羽 やすし

そのむかし、唐の国の貴人の妻某女は、側近の侍女の紅唇を開かせて、セキをし、たんを吐き、これを肉吐壺（にくとこと）と、たわむれに呼んだという。

わが国でも、江戸時代のさる貴人の愛妾は病中、かわやへいくのが困難のとき、臥床に待るお小姓に、しばしば代役を命じ、病氣全快後も、それをやめず苦行を強いて、興じたそ
うだ。

洋の東西を問わず、権勢をほしいままにおごった貴人たちは、人間をそのように道具あつかいし、苦しみ、汚れた勤めを強いて、日々の退屈を忘れようとしたのだろうか――。

そして現世の貴婦人たちもまた――

メイドの雪が、イタズラっぽくドアに、うすわらいの顔をのぞかせ、

「お呼びよ。上天気だわ」

片目つぶって、ウィンクした。

寝坊したために、例によって朝食は食べてない。重い腰を、それでも、あげた。

夫人は雪のいうように、上きげんだった。

「信吉、おはよう。学校の時間でしょ。出がけに、木津医院へ寄るのよ。急用だからね」

夫人は、いつも信吉の都合などにおかまいなく、一方的に命令する。氣にくなかった。

でも、反抗することはできない。

こどものころに両親に死なれ、野良イヌ同然に育った信吉を、ひろってくれたのが、夫人であった。生涯の恩人といえるだろう。

いまから十年前。信吉が九才の秋のことである。食べる物がなくフラフラになって、この篠原家の門前に、途方にくれて、たたずんでいた。

そこを夫人にみつけれられ、使用人部屋へあげて冷や飯に味噌汁をかけてだしてくれた。

まるで、イヌのエサみたいだったが、そのときのうまさを一生、忘れることはできないだろう。

それから、ずるずるに雇われた形で、予備校へ通わせてもらっている。

べつに優遇もされなかったけれど、それくらい、こんやの食うめしのことを思案する心配は、いらなくなっている。

夫人は、だから恩人であった。夫人は、ことし四十一才になる。三年前に交通事故で夫を失っている。

夫人のしつけは、きびしいほうだった。

朝飯は六時と、きめられていた。定刻には、かならず食堂へ、い

かなければならない。

つい寝すごして、六時に一分でもおくと、食事はさせてもらえない。だから、朝は大てい、早く目がさめる。

けれども、けさは失敗だった。二十分もおくれたのだから、もう食事は片づけられてしまっていた。

そんな朝は空腹を耐えねばならなかった。

夫人は、信吉を私有物のように思いこんでいるらしく、風呂では平気で、せなかほかもとより、手や足まで信吉に流させる。

下着を洗うのも信吉の役だった。湯上りの裸のまま、足のツメを平然と切らせたり、トイレから大声で信吉を呼び、きらせてしまったトイレットペーパーを、もってこさせる。

「ダメじゃない。ペーパーがなくなったら、スグ新しいの入れなくちゃ」

お叱言は毎度のことだった。

ペーパーをよくもんで、夫人にわたし、そのまま出ていく夫人の代りに、ペダルを押して水を流す。そんな、他人にもみせないことを、信吉にだけは、えんりょなく命じた。

夜のふとんで、マッサージさせたり、肩をもませたりもする。

夫人は、ウイスキーが好物だった。

呑むと人が変わり、とんでもないことを信吉に命令して、ひとり愉快がる。だから、けさも朝から一杯やっってるらしく、卓上には、ジョニーウォーカーの黒ラベルがある。

「これを、本町の木津医院へ届けるのよ。全量でございます、といっね」

うす黄色の液体を八分目ほど入れたビンと、四角な弁当箱くらい

の箱をビニールのふろしきに包んだ品を、だいじそうに出し、「大切なものが入ってるのよ。気をつけてね。なかり見ては、いけませんよ。かならず行き道に届けるのよ」

口早に用件だけをいい、また、グラスを手にとった。

信吉は木津医院への使いが大きらいであった。できれば、かんべんして貰いたかった。

産婦人科の門をくぐるのは、十九才の彼にとって羞恥より苦痛であった。

いついっても、玄関を上がった待合室は、老若の女性で、あふれている。

こぼれそうな、おなかの若い妊婦や、水商売らしい和服の女性、七十才を越した老婆と、さまざまな客が、だらしく坐っている。

男の客は、一人もない。

「当院にご用の男性のかたは、裏へお回りください」

そんな掲示がでていたが、信吉だけは、別あつかいだった。

患者からのお使いだから、受付の窓口を通してください、といわれている。それが却って迷惑なのだった。

○

「ごめんください」

できるだけ小声でいうのだが、みんなの視線が信吉一人に、そそがれる。

男子禁制のふんいきが、そうさせた。

中には、けわしい目で、この不心得な闖入者を、にらむ女性もあった。

届け物というのが、病身の一人娘、キヨ子に関係ある品というこ

とは、わかっていた。

夫人とメイドのお雪さん、下ばたらきの中井という六十才ちかい住込みのおばさんと、おんなだけの世帯に、よりによってこんな使いを、信吉にさせなくてもよさそうなものだが、若いお雪さんとはちかく、中井のおばさんまでが、産婦人科への使いという尻ごみした。おんなでも、なんだか恥ずかしいのであろう。

けっきょく、学校へいくとき、前を通るからという理由で、この役は、信吉におしつけられた、かたちだった。

まったく産婦人科医院というのは、若い男のいくべきところではなさそうだ。信吉は、

「この用だけは、かんべんして」

と、哀願するが、なぜか志津夫人は、ゆるしてくれなかった。

夫人は気前よく謝礼をはずむので、上客であり、医院では信吉を優遇する。

「あがって、ゆっくりしてらっしゃいな」

院長の女医、木津妙子は、わざわざ玄関へ出てきて、あがれあがれという。

院長は、スラリとした美人であった。

研究生活に打込んで、青春をすごしたという独りぐらしに、信吉は格好のオモチャだったのかもしれない。

患者の思惑など、気にするふうもなく、手をとらんばかりに、引っぱりあげられる。

上れば雑務に半日を、つぶされた。ちっとも楽しくない。ただ、美ぼうの院長に用事をたのまれるのは、わるくなかったけれど。

三度に一度は断りきれず、恐る恐るあがるが、その日は、いきな

り白衣をきせられ、

「あなたはインターン。診察を見学してらっしゃい」

院長はニヤニヤしながら、そうすすめるのを最上のもてなしと思ってるらしい。

むりやり診察室に引きずりこまれた信吉の目の前に、若い女性患者が待っていた。

院長は患者に、さりげなく、

「ウチのインターンの先生。未来の医学博士サマだわ」

と紹介した。

信吉は、アルバイトしながら医学校へ通っていることにされた。

白衣をつけると、それでも、医学生らしくみえるのだろう。患者は頭を下げた。

「そうね、中林さん。お小水、調べましょ」

院長は、わざと必要もなさそうなのに、信吉の目の前で、その患者にコップを渡す。

カーテンのかけで、女性は、恥ずかしそうに、コップにむけて、さわやかな音をたてた。

カーテンはレースなので、内部のようすが手にとるようだ。物音にまざって特有のアンモニア臭が、ただよう。信吉は目のやり場に困るのだった。

医院の内部には独特の臭いがある。

クレゾールや、アンモニアや、薬剤のさまざまな臭いが、たちこめている。

採尿を命ぜられた女性は、そんなふんいきに酔うのか、そしてまた、医師の命には反抗してはならないと思ってるのか。信吉の存在

は無視されている。

○

この医院には、奥のほうにトイレはあるが、待合室にも診察室にも、なぜかその設備はない。いきおい、院長の指図にしたがって誰でもレースのカーテンのかけで、採尿するしかないのだ。

カーテンのかけには、ちょうどよい高さに三〇センチ平方くらいの、小型のティテーブルが、おかれてある。

表面には、

「コップは台上におき、そこへ向けてください。こぼさないように注意して」

マジックの文字が、そう読める。

院長に言わせると、採尿にはこのポーズが、いちばん自然で楽にできる。ことに妊婦のときは、これに勝る方法はないとのことだった。

いちいちコップを手で保持する必要がなく、この方法は、わり的好评だという。

中では用が終ったらしい。

「先生、コップの処理をおねがいね」

院長は、患者にきかせるようにいう。

患者は、台の上からおり、みだれたすそを直している。コップはそのままだった。

信吉は、ドギマギと立ち上がり、まだ泡が消えず、手のひらに、ぬくもりの感ぜられるコップを、そっと、とりあげる。

ベタつくのは、あまり気もちがよくなかったけど、それが、若い美しい女性のものだど、不快な感じはしない。

とりあげたコップは、院長のデスクへ運ぶように耳打ちされている。中林という若い女性のそれは、まるでウイスキーそっくりで、美しい感じがした。

信吉は、なごりおしそうに、そのコップを、デスクへおくのっただ。

かすかな香気があった。

信吉は、ゴクリとツバを、のみこんだ。

○

信吉は、むりやり、ひっぱり上げられる事が多くなった。これは院長の誰にも、あかしたことのないイタズラだった。

思いがけないものを手にさせられたときの、信吉のとまどった表情が、たまらなく愉快で、だから、強制しなくなってしまう。

若い妊婦の、ふくれ放題にふくれた腹部をみせつけたり、台上に横たわらせ、診察中に

「先生、そのメスをおねがい」

わざと用事をつくって、患者の足もとのほうへ、いかせ、困った顔をのぞいて満足する。

患者が、若く美しいと、必要もないのに検便しようといひ出す。いやといわさない口調に、患者は、催眠術かけられたみたいに、

院長のいいなりになってしまうのだった。換気扇を回しているとはいうものの、やはり特有の香りが、脳のなかいっばいになり、はげしいときには、吐き気すら、おぼえたことがある。

どうも、院長には、そんなことを強制して患者をくるしめたり、うぶな信吉に、生々しいそんな悪臭を存分に嗅がせて、楽しむふうがあった。

今も女学生みたいな患者が出ていくと、代って入ってきたのは二十四、五才のおくさまふうの妊娠女性だった。

彼女は信吉を、ほんとうのインタンと思ひ込んでいたので、平然と台にのぼる。

「お通じは？」

院長の問いは事務的だった。

「はあ、三日ほどないのですが……」

「そうだろうね。この張りようじゃ」

「もう苦しくて」

「浣腸しよう」

「えっ、恥ずかしいわ」

「なにが恥ずかしいの。ここは診察室よ」

「どうしても、しなければなりませんの」

「そうよ。このおなか、さわってごらん。こんなに張って。これで

は、胎児がチッ息するよ。ねえ、先生」

先生といわれて、少しは慣れた信吉は、やはりドギマギした。

院長は、患者の羞恥などおかまいなしに、サッサと事を運んだ。

信吉は、採尿は何回も見せられたが、まさか、そこまでやるとは思ってなかった。

患者は拒んだが、ききいれられなかった。

いま、おなかをカラにしなかったら、流産の心配がある。とおどされ、若い妊婦は観念したようだった。

町にたった一軒の産婦人科なのと、院長のうでがたしかなのと、万事宜いとあって、少しぐらい乱暴でも、患者は押すな押すなであった。



イメージギャラリー

『浴後の奉仕』

岡 たかし

「まあまあ、こんなにためといちゃダメじゃない」
院長は、わざとイタズラっぽく大声あげながら、さも愉快そうに手ばやく用意を進めた。
「トイレは奥だけど、いま修理中なの。いちいち立つのも、めんどうだから、ここですませましょう」

ベッドの下から便器を、とりだした。
それを床におき、サツとカーテンをめぐらせ、
「先生、用意してあげて」
と信吉を、うながした。机の下に安楽便座がある。
安楽便座の使い方なら、信吉も知っている。たまに、掃除に入る

キヨ子の室にも、これが置かれてあるからだ。
馬蹄型の木台に、四本の足がつけられ、これを
便器の上に据えると、ちょうど洋式便器と同じ
ように使える。姿勢が楽で病人むきだった。

信吉は、とにかく言われるままに、その用意
をした。患者は、待ちかねたように診察台から
おり、そこへ腰をおろした。

信吉は、視線のやりばに困ってしまった。

患者は、信吉など眼中にないらしい。上体を
折り曲げ、何回もあえいだ。

「おもしろい出しちゃいなさいよ」

院長が、いった。

患者のひたいに、玉のようなアセがたまり、
やっとわれに返ったらしく、

「恥ずかしいわ」

両手で目を、おおった。

院長は、平然と相手にならず、患者を横眼に
ながめながら、便器を信吉にみせた。

なかのものをたしかめる勇氣はなかった。
でも、それを処理する手伝いをしてもいいと

いう気持ちではない。

「ついでに検便もしましょうね。先生、よぶんは、すててくださいな」

なれた手つきで、ちよっぴりを、ガラス棒の先端にとり、残余の処理を信吉に命ずる。

かりにも白衣をつけ、院長の助手ぜんと行動させられる、いまの信吉には、それをいやがる口実は、なさそうであった。

診察室のとなり、モップを洗うための洗い場がある。患者の尿や、その他の分泌物は、ここで水に洗いながすことになっていた。

そのものの主は、わりに平然として、診察台にふたたび横になった。院長は、さりげなく

「先生、こんなことが将来、役に立つのよ。これも実習のうちよ」

患者にきこえよがしに言うのだった。インターンと信じられるいじょう、いやともいえず、なれない手つきで便器を手にして洗い場へ運んだ。

なんともいえない臭気が、たちこめたが、でも、そのぬしが美ぼうの若妻と、はっきりわかつているだけ、せめての救いであった。

でも、醜悪な印象は信吉の脳のおくまで、しみこむのであった。

水道のコックを全開して、水をいきおいよくだし、なるべくなみをみないように気をつけながら、それへ水をあてた。

ちよっと油断したすきに、いきおいよく、しぶきが飛び、顔や手に、はねた。

なんだろう。

それは、なかみの、おぞましい破片だった。顔に、ねばりついたそれを手のひらに、こすりつけた。ハナに近づけると、れいの悪臭

がツーンと目にしみた。

これが、あの美しい人妻のものか。だが、あまり不潔な感じがしないのは、なぜだろうか。

産婦人科の病室という、ふんいきが信吉を酔わせたのかもしれない。

ふと信吉は、すっかりきれいになった便器の底のほうへ深々と顔を寄せた。べつに臭いはなかったが、でも、なんかひそやかなことが、信吉の胸のなかにアラシをもたらしたのは、たしかなことだった。

○

さて、信吉は夫人に命ぜられて、なにを木津医院まで届けにきたのだろうか。

篠原家の一人むすめキヨ子は、もう三年ごし奇病に、なやまされている。

ふだんは健康な、元気なからだなのに、月に一回か二回、発作におそわれる。

とつぜん失神し、やがて起きあがると、人間が変わったように凶暴になる。

奇声をあげながら、室いっぱい、ころげ回り、手あたりしだいに道具をこわす。

もう、ポータブルテレビだけでも、床にたたきつけられメチャメチャになったことは、五回では、きかないだろう。

凶暴のあとには、静寂がくる。悶々と狂い、ベッドに倒れて失神する。

二日ほど安静にしておけば、もとの、おとなしい女性に戻るの

心配はなかった。

医師を何人も変えたが、病状が、さっぱりつかめてない。

男でも手におえない、あばれた。そんなとき、間違いをしでかさないうちに看視するのは、信吉の責任であった。

発作には、前駆症状は、いっさいない。

四六時中、家人の誰かが見張っていなければならなかった。

発作を予知するのに、彼女の分泌するものを調べるとよいことがわかったのは、二年前のことである。

彼女が、トイレで排したものは、すべて医師の検査を受けることになった。

発作の前ぶれは、それらの中に、ビールス様の形で発見される。異状が認められれば、事前に安静剤の投与などで軽減できるわけである。

しかし、ふだんでも食が細く、おまけに水分すら、ほとんどとらないキヨ子が、トイレの必要を感じるのは、週に三回が関の山なのだ。

こどものところからの主治医で、キヨ子のからだのすみからすみまで知りつくしている木津院長が、その検査を引受けている。

だから、めずらしくキヨ子がトイレを必要とした日は、それを届けるために、信吉が木津医院を訪ねなければならぬ。

でも、なかみがなんであるかは、信吉には知らされていない。

ママの志津夫人の心づかいである。

発作とはいえ、そんな恥ずかしいものを、信吉に持たせたと知ったら、キヨ子は、どんなに、いやがるだろう。

「信吉くん。いまから学校へいっても、遅刻でしょ。いっそ、お休

みして、きょうは一日助手を、つとめてよ」

院長はいった。

長期休暇で、看護婦は帰省中という。

ズブのしろうとはいえ、いないよりは、いたほうがよい。

木津院長は、そう考え、

「おくさまには電話で許可をもらったから」

勝手にきめているのだった。

でも、正午には、外来の受付は終了することになっている。

入院患者も三人いたが、みんな産婦で、そのなかの二人は、きょう午後には退院。

さきほどもで、あれほど混雑した待合室も、うそのようにシーンとして、時計をみたら、外来の終る十二時に、八分前だった。

「食事の前に、検査だけは、やっておこう。おくさまは、セツカチだから」

どうせ、異状ナシにきまつてから、と、ひとりごといいながら信吉の持参した夫人からの預り物のふろしきの結び目をほいだ。

「あなた、このなかみ、なんだか知ってて？　ねえ、食べ物だったら食べてみる？」

冗談のつもりで、院長はいった。

ほんの軽い笑いばなしのつもりだった。

さきほどもから、採尿や検便の用事に、この青年を使うと、びっくりしたように目を見張る。そのハナ先につきつけたときの、とまどいようが、おもしろくてたまらない。

四十才の現在まで、おんな一人ぐらしをつづけてきた院長にとって、信吉という存在はオモチャであった。

信吉も、度々届けさせるその品物が、いったい何なのか、知りた
いと思っている。

「さあね、ジュースかな。それから、このタッパウェアの箱に入っ
てるのは、クリームかな」

院長は、勿体ぶって仲々ふろしきを、とこうとしない。

「あたしが、これお食べといったら、あんた食べてみる？」

なにか思いつめたような、そのひとみが、ぞっとするほど、美し
い。

母親ほどの年上の院長を、このときほど美しいな、と感じたこと
はなかった。

「ハハ、冗談よ、冗談。こんなもの、食べられるわけ、ないじゃな
い。こんなジュース呑んだら、ヘンな病気が、うつるわ」

セロテープで、きつく目貼りされたフタを、そっと開く。

特有の香気が、もういちど、あたりに、たちこめた。

とつぜん、木津院長の全身をアラシが吹きぬけたのは、そのとき
であった。

こどものころ、イモムシをクツのつま先で、ギョッと踏みつぶし
たことがある。青い汁を流して、イモムシは平らになった。

飼いイヌを、むやみに虐めた記憶もある。

太い鎖で、杉の木にしばり、逃げる自由をうばっておいて、父親
のステッキで、思いきり、なぐってやった。

イヌは、すごいいきおいで暴れたが、五回六回と、力まかせにな
ぐりつけたら、ぐったりと地上にのびた。

アリの巣に、おしっこをひっかけた思いもある。思いがけない
洪水に、アリはおぼれ、逃げまどった。かわいそうというより痛快

だった。

父親にせがんで買ってもらったカメの子を二カ月飼ったら、あき
てしまい、エサをやるのも、めんどうになって、二階のベランダに
放置しておいた。

何日かたって、ふと思いだし、カメの箱をのぞいたら、カメは息
絶えていた。コーラが、カサカサになっており、指先に力をいれた
ら、ポロポロと、もろく欠けおちた。

おんなの子のくせに、どうして生き物をいじめるのが好きなんだ
ろう。

そして、いま、神妙に白衣を着けてすわっている信吉を見ると、
むかし、イヌにやったみたいに、思いきりなぐってやったり、アリ
にしたみたいに、あたまから、ぐっしり濡らしたら、さぞスカッ
とするだろう、なんて思ってしまう。さきほど、

「お宅の信吉さんを、看護婦の代りに一日、借りますよ」

志津夫人に、そう電話したら、

「どうぞ、ごえんりょなく。殺しさえしなけりゃ、何をさせても結
構ですわ」

夫人は、電話口で、若々しいわらい声をたてた。むすめが、世話
になる先生だし、おたがいに、おんなのひとりぐらしという似たよ
うな生活に、親近感を抱きあっていたので交渉は、かんたんだった
のだろう。

そんな返事をもらうと、いま目の前にいる信吉を、じぶんは完全
に支配しているのだ、という、きもちになった。

「食べて！ お食べ！ 呑むのよ。一滴のこさず、呑んでおしまい」
そういいながら、信吉の届けてきた包みを、つきつけた。

じぶんでも、なぜ、そんなことを口ばしたのか、わからなかった。

でもまさか、と思った信吉が、従順に命令に従ったのは、ふしぎだった。

検査するのに必要なぶんだけは、あわてて取りあげた。そうしなかったら、検査がダメになって責任問題をおこすところだろう。

検査の結果は、異状がなかった。

「おくさまに、異状ありませんでした、と申し上げてちょうだい」と小声でいった。

さっき、なぜ、あんなことを信吉に、強いたのか、じぶんながらふしぎだった。

女性の生理が、そういわせたのかもしれない。毎月、その期間にはいると、きもちが妙に高ぶることに院長は、まだ気づいてないのだった。

○

篠原家での信吉の立場は、まったく動物以下といえそうだった。

ことに、夫人の、信吉にたいする態度は、主権者のそれだった。

相手が犬以下なら、なにをしても反抗しないし、かりに、赤裸々なトイレや浴室で、他人にはみせられない、あからさまな姿体を、

夫人もキヨ子も、信吉の目にさらけだして平気だった。

信吉の手は、トイレの用事のと始末をさせるための調法な道具であり、たんなる容器にすぎない。

反抗は絶対、ゆるされなかった。

口をおあけ、といわれれば、大きく開く。

中へどんなものを落とされても吐きだすことはゆるされない。の

どを通しかねるような、不潔なものすら、信吉にとっては、エサの一種だった。

夫人は、いつのまにか、かならずトイレのお供を信吉に命ずるようになった。

道具をつれて、用をたすことは、なにかとべんりで、すくなくとも、自身の手を汚さずにすむ。物ぐさな夫人にとって、いま信吉は身近になくてならない清掃係であった。

食事のかわりに、そんなものを口いっぱいいつめこまれたことも、一回や二回ではない。

だが信吉は、よく耐えた。

耐えられたのは、お雪さんのおかげであった。お雪さんも、小さいころに、この家へもらわれてきた。

人のうわさでは、死んだ主人が、よそで生ませた子だというが、いずれにせよ、夫人にとっては、赤の他人。

メイドというと、きこえはよいが、女中だから、やはり夫人の命令は、よく守る。

こんな、くらい家から出ていこうとしないのは、ふしぎだったが並外れて高い給料とトイレつきの住みよい快適な室を与えられ、ここを離れたら、やはり、これほど好条件のよい就職口は、学歴もなく技術ももたない、お雪さんには、他にありそうもない。

だから二十四才になった今日まで、このやしきで働いているわけだ。

お雪さんは、かげになり日なたになりして信吉を、いたわってくれた。夫人の目をぬすんで、食事をこしらえてくれたことは、かぞえきれないくらいだった。

イメージギャラリー 『白豚の悦鳴』 岡 たかし



やきもちやきの夫人は、二人の仲が、必要以上によいことは知っている。
だから、ときたま、お雪さんに命じて、わざと信吉に意地わるをさせる。
「イヌのエサのつくりかたを教える」

お雪さんは、信吉に好意以上のものを感じてゐるらしい。
そして、その感情は、カレーにまみれた素足を、信吉に清めさせたところから、いつそう固まったようだ。
それだけでない。夫人から強要されたとはいえ、信吉のせなかに手に、足に、力いっぱいムチを這わせた頃から、お雪さんは信吉

と夫人はいい、カレーライスのサラを床におき、お雪さんの素足で、こねくりまわさせたことがある。そして、サラに足を入れさせたまま、信吉に食べろと命令した。
サラの中央の、形のよい足をみながら、そこに、くちをつけるのは、しかし、そうつらいことではなかったが、ふつうの神経の持主のお雪さんには、つらいことらしかった。
カレーにまみれた足を、口で清めろ、と夫人は信吉に強要し、信吉は、むしろ喜々としてお雪さんの足に、かぶりついた。
自分は疲れたからと、イスにかけ、床にうずくまらせた信吉を、ムチで叩けと強要する夫人に、お雪さんは、うらめしそうに見たが、そんなことで、ひるむ夫人ではなく、お雪さんが、しぶしぶムチを振りあげるまで、許そうとしない。
しかし信吉は、肌に激しく当たったムチの痛みも、お雪さんのためとあれば、痛くは感じないのだった。

を、いとしい、おとうのように思えてならないのだ。

夫人から、信吉をいじめるように、強要されればされるほど、彼女の心は信吉にかたむき、その表情は、恋するおんなの、美しさにさえるかのようなだった。

○

たかぶる心をおさえかねて信吉は、あてどなく町をさまよった。きょうの一日に出くわした、さまざまの患者の、さまざまの姿体と、美しい院長の面影が、交互に眼前に、ちらつく。

いままで、届けさせられてきた包みのなかみを、目のまえにつきつけられたのは、ショックだった。

信吉にとって、キヨ子は高嶺の花だった。

ひとつ屋根の下に住みながら、ろくにくちをきいたことがなかった。

それが、人目にさらすのさえ、はばかれるものを、はつきりと、眼前にさらされただけでなく、それを味わうことまで強制されてしまった。

「ほんとうの検査というのは、薬品なんか、つかわない、人間の目と、ハナと、くちのほうか、もっと正確なのよ」

いわれれば、そうかと思う。

信吉が、あふれる感情を胸にこめて、篠原邸へもどったのは、夕方のことだった。

「どこへいったの？ おくさま、これよ」

お雪さんは、情報通だった。

ひたいに、両の人さしゆびを立てて、ツノのまねをしたのは、信吉の帰りがおそいと、夫人がおこつてるといふサインだった。

だが、

「ただいま、帰りました。異状はないという、ご返事です」

夫人の居間へ、おそろおそろいき、平伏して報告すると、

「そうだってね、ごくろうさま」

夫人は、ツノを出してなんか、いない。

意外だった。

じつは二時間前に、医院長から、電話で一と足さきに返事がきている。

「おたくの信吉さんに手つだつてもらつて大助かりだったわ」

院長が礼をいった。むすめのからだに、異状なしという診断も、うれしいことだった。

だが夫人が上きげんなのは、それだけの理由によるのではない。

「おくさま、ねえ、信吉くんて、仲々よ」

ふと思いついて、検査のときに、暗示を与えたら、わけなく引つかかった。そのときの様子を、くわしく話し、

「いちいち、ウチまで届けさせなくても、これからは信吉くんを使つたら、もっと精密な診断ができると思うのよ」

現在の木津医院は、繁盛しており、面倒な検査くらいは、返上したいのだった。

毎日、身近にいる信吉に、きょう自分がおもしろ半分やらせたのと同じ方法で、検査させる。異状なしなら、それでよく、万一おかしいと、信吉の口が反応を示したら往診しても、ことは足りるだろう。

この提案は、夫人を満足させた。

トイレへ立つ、むすめのそれを、洩れなく収集し、容器におさめ

るのは、いくらむすめの生命に関することとはいえ、しんきくさいことであった。

でも、いくら使用人とはいえ、メイドの雪や、まして中井のおばさんに、こんなことをさせるのは、はばかられた。

ところが、偶然のことに、信吉を使えばよいと、院長にすすめられたのは、思ってもみないことだった。

「あたしの見るところでは、信吉くんには、そんな才能があるように思うな」

「才能ですって？」

「そう。いちいちウチまで届けるの、めんどろでしょ。おたくでやるのよ」

「私には、そんなこと、できないわ」

「信吉が、いるでしょ。いい検査機だわ」

二人は、そこで声をひそめた。

となりの室で、ぬすみぎきしていたお雪には、あとの会話は、ききとれない。

でも、それまでの二人のやりとりで、大体のことは見当がつく。

なぜ夫人は、そんなことを信吉にやらせるのだろうか。

かわいそうに、放つといったら、信吉は、いまよりさらに、みじめなところに追いこまれるように思えた。

なんとかして、そんな、ひどいことをさせないようにしなくてはと、お雪は、あかりもつけない室の、イスに腰を沈めた。

このとき、お雪の心の中にハッキリ、夫人への殺意が湧いた。

○

両手を、せなかに回し、ロープでしばられた異様なすがたで、信

吉は床に伸びていた。

目はタオルでおおわれ、完全に見えなくされている。

顔の上に、安楽便座が据えられ、その木製の足の間に、信吉の首がみえる。

その口には、化学工場で使われる白色の大型の、ハイゼックスでつくられたジョーゴの細いパイプが、くわえられている。

その信吉を見おろす位置に、夫人と木津女医の形のよい足があった。

「だいぶ、なれたようね」

「そう。あれから毎日、学校も休ませて訓練したのよ」

二人は、おもしろそうに、信吉の伸びた、からだを見おろしている。

「おもしろいわ。このジョーゴに、ウイスキーを、たらしてやったの」

夫人は、浮々といった。

なにしろ、ジョーゴの出口は、口中ふかく押しこまれており、そのまま食道につながっている。

酒は一滴ものめない信吉が、これも訓練と称して、ウイスキーをそのままコップに一杯もあけられたのだから、さぞ苦しかったことであろう。

「流しこまれたものは、たとえ毒が入っていても、呑まなけりやならないのよ」

夫人は、そう続けた。

「そうね、初歩の訓練は、それでいいでしょう」

「ごはんは、いっさい食べさせないことにしたの。おながが空いて

るほうが、どんなものでも、素直に、のどを通せるでしょ」

でも、一日じゅう、なにも食べさせなかったら、信吉の生命は、もたないだろう。

夫人は、ごはんを、みずからの口で、よく噛み、ドロドロにしたカユミたいなごはんや、これもクチャクチャ噛んで、よく唾液とまぜあわせたおかずの、流動食を気がむくと、おなじくジョーゴに流しこんだという。

「けっこうだわ、いい栄養食じゃない」

「このあいだは、ケツサクやっちゃった」

夫人は、さもおかしそうに笑った。

ある夜のことだった。

れいによって訓練のため、今夜のようにしてジョーゴを、くわえさせ、酒をのみだした。つい深酒をしてしまい、吐きけを催した。

「そのとき、信吉は、まだ夜食の前だったの」

手近に、手頃の洗面器もなかったので、ジョーゴへ、もどしたという。

「胃液にアルコールが残っていたのね。おかげで、信吉まで、いいかげん酔っちゃって」

胃のなかには、まだ吸収されないアルコールが、のこっていた。それをとらされ、信吉まで酔いしれたという。

「これがホントの、ふつか酔いね」

夫人のとばす冗談に、木津院長は吹きだした。

しかし苦しい姿勢をそのまま長時間、続けさせられた信吉は、それどころでなかった。

せなかの下の手が、キリキリ痛み、しびれはじめ、あぶら汗が出

はじめた。

今宵、木津院長は夫人に招かれて、篠原邸を訪れたのである。

ひとつには、キヨ子の定期診断。そして、ふたつには、その後、信吉がどうしているかを見るためだった。

夫人は先夜、院長に教えられたとおり、信吉の訓練に熱中した。そのようすを、院長にみてもらいたい。

こうした二人のきもちから、めずらしく木津院長の篠原邸訪問ということになったのだった。

院長は、想像以上に訓練が徹底し、信吉がまるで生まれかわったように、無表情で、ただ懸命に、夫人の足もとにひれ伏し、デク人形のように、言うがままになっているところを真近にみて、びっくりした。

びっくりすると同時に、自分もこんな、信吉みたいな青年を、アゴで使えたら、さぞ楽しいだろうと、うらやましくなった。

○

信吉は耐えがたいことに、ひたすら耐え、あれいらい、いっそう残酷になった夫人の命令に、従っていた。

学校なんか行く必要はないわ、といわれて、それきり、無断欠席をつづけている。

ごはんらしい、ごはんを与えられないのも、苦痛だった。

三度三度、ジョーゴを通して流しこまれるカユともいえないエサは、ただ生命を保つのに精一杯だった。

ときどき夫人が、のみものをくれた。

得体のしれない、刺激臭のある水だった。

うまくも、まずくもない。しかし、のどをしめすことだけは、ど

うやら、できた。

一日に六時間は、両手をくぐられ、床に寝かされる。

そして、きまったように夫人は、その前でウイスキーを楽しむのである。

気がむくと、夫人は便座を使う。

うすものをまとった形のよい夫人のからだを下から仰ぐのは、せめてもの楽しみといえるだろう。

「よく拝んどくのよ。この経験が、もうじきモノをいうのだわ」

夫人は楽しそうに見下ろしていた。なんともいえない高貴な香りが、顔いちめんに、たわたい、気が遠くなりそうだった。

これから、いったい自分は、どうなるのだろうと、ふと思った。

あれいらい、木津医院への使いのご用は、いっさい、なくなっている。

院長が、なにかと口実をこしらえて、夜になると、篠原邸へやってくる。そのとき、かならず、キヨ子のからだを診察していくので

もはや検査の必要はなくなっていた。

そうなればなったで、あれほど行くのが苦痛だった木津医院へ、いきたくなるのが、ふしぎだった。

○

キヨ子の健康状態が、篠原家の空気を支配する、といっても言いすぎではないだろう。

彼女が平静に、きげんがよい日は、家中ぜんたいが伸び伸びとしたし、万が一、発作がおこって、あたりかまわず荒れまわる日は、家中全体が暗雲にとざされた。

キヨ子の健康状態を占う、たった一つの方法は、四六時中、彼女

の体調を観察することにつきた。

ことは、きわめて単純だった。

キヨ子のからだから排される種々の分泌物を、よくしらべ、異状の認められる日をマークすればよいのである。

その検査機として、院長に教えられた、信吉を使用するというアイデアは、成功のようであった。

要するに、日々のコンディションを知るためには、生理的に排される分泌物を素材とし、生体実験しながらに、信吉の、ときすまされた味覚神経を利用すればよいわけだ。

電子計算機（コンピュータ）の原理で、まず、平常のときのキヨ子の、そのものの味と香りを、信吉によく記憶させておく。あとは忘れずに日々何回か排されるものを、その口中に投入してやる。万が一、その香味に異状があれば、信吉という検査機は、時を移さず、注意信号を、のどのおくから発するだろう。

体調もしらべるとはいえ、そうした、みにくいものを、人目にさらすことには、若干の抵抗はなくてもない。しかし、信吉の口中に投ずることによって、すべては解決し、グロテスクな形骸を人目にさらさずにすむのは、何よりのことといえた。

だが、信吉を完全に家畜視し、動物以下の存在としか思っていない夫人は、キヨ子の体調の異状の有無を、信吉の口から直接、聞くことに抵抗を感じていた。

イヌが、人間のことばを使うのは、おかしいことだった。イヌの分際で、飼い主と対等に会話を交わすのは、けしからぬ、と主人である夫人は思い込んでいた。

だから夫人は、用件のいっさいを、お雪さんを通じて交わすこと

にきめたのも無理からぬことだった。

どんな命令でも、まずお雪さんにくだされる。そして、その命令は、こんどはお雪さんのくちから信吉に伝えられるのである。

こんな、まわりくどい方法が、ついに悲劇を、もたらすことになるのだが、夫人は頑として、この方法を二人に守らせた。

○
お雪は、どうにも夫人をゆるせない心境に迫りこまれていた。

キヨ子の体調しるべに信吉を使い、毎日不潔な行為を強いたことは、相手が病人だけに、まだ許せた。

しかし、夫人が五体まんぞくのくせに、キヨ子と同様に、トイレへ立つのが、めんどろという理由だけで、信吉を使いだしたのを知ったとき、もう絶対に、ゆるせないと思った。

キヨ子の体調を検査するために、日ごと夜ごと信吉に与える屈辱を目のあたりにすることは、お雪にとって苦痛を伴う侮辱を意味した。

○
夫人にたいするお雪の殺意は、日ごとに高まる一方だった。

そんなある日、ついに信吉は、キヨ子の排泄物から異変を発見した。

前回、キヨ子が発作をおこしてから一カ月半ほど、経っている。そろそろ発作がおこる時期だった。

「キヨ子さまが異状のようだけど」

命ぜられたとおりに信吉はお雪に、そう報告した。もうキヨ子が発作をおこし、凶暴になるのは目前に迫っている。

もしも、信吉が、おかしいと報告したら、即刻、夫人に報告する

ように、くどく命ぜられたのを、お雪は完全に無視した。

○
キヨ子のベッドの下に、のどぶえを、かみくだかれた夫人の、無惨な死体が、ころがってるのが発見されたのは、それから間もないある晴れた朝のことだった。

やしき中あげて大さわぎになったことは言うまでもなかった。

おそらく、様子をみに入った夫人の眼前で、とっぜん発作がはじまり、ついに母である夫人を、かみ殺したのだろう、との推理は、キヨ子の歯型と夫人の受けた、のどの咬傷がピッタリ一致したことから完全に立証され、夫人殺しの犯人はキヨ子と断定された。精神鑑定の結果、キヨ子の錯乱が立証され法の処分を免れた。

○
さわぎが一段落して篠原家に、やっと平和が、訪れようとした。

お雪は、死んだ夫人の夫が、よそのおんなに生ませたとはいえ、血のつながりがあることが、はっきりしたため、この家の莫大な財産を相続することになった。

○
この家の当主になったお雪は、メード時代の優しさは、すっかり影をひそめ、その後も信吉を検査機として使っている。しかし、お雪は、信吉の重大な変化に気づいていない。信吉にも、おそるべき奇病が伝染し、いよいよ発火点に近づきつつあったのだ。

○
信吉は血走しった狂気の目を光らせながらお雪のあとを追った。

血を噴き上げるような、ものすごい絶叫とともに倒れたお雪の全身に歯をたてる信吉を押しとどめる者は、もちろん、だれもいなかった。

(おわり)

8 m/m ムービー紹介

ポルノ・SM「鞭の陶酔」

(無声)

— シナリオ風採録 —

中 宮 栄

クレジットタイトル
○ C・T

「COLOR CLIMAX PRESENTS」

トップタイトル
○ T・T

「SECRET SPANKING CULT. Film

1282」⑦

○公園

男性裸像の立つ一隅。

ブロンズ像を足許からP・U②。

男性の象徴をズームして……C・U。

○公園 (L・S)

池に懸かる鉄橋の彼方から二人連れ的女性が来る。カメラ、ズームしながら近づき③池の水面を眺める女性を印象づける。

○湖面

一羽の白鳥が泳ぐ。

○橋の上

眺める二人④。

○池からの眺め (L・S)

橋の下に近づく白鳥。

橋の上で二人の女性は談笑

している。それをZOOM

・UP⑤。

○橋から湖面

白鳥をズームリングで離し、欄間から垣間見させて覗き込む女性へとパンする。



○橋の上

立ち去る二人連れ

○公園の遊歩道

出口へ向う二人を見つけ、近づく男⑥

女に立ちはだかるように話しかける⑦

熱心に勧誘し、女性の好奇心をあおり⑧

丸顔のブロンズ娘が口説き落される⑨

連れの娘もそれにひかれたように同意して

男は二人を連れて出口へ向う

○公園の出口

鉄柵・鉄扉の門。

散策者や通り抜けの人々が行き交う中を親

しげな三人の男女が外へ出る。

○公園の外

路上に駐車する自家用車の群れ。

三人、立ち去って行く⑩。

○車

男の車へ近づき、なんの疑

いも持たず嬉々として乗り

込む二人の娘⑪。

男はドアを閉め、バックを

回って運転席へ滑り込む。

ドアを閉めハンドルを握る

○車輪

動き出す (UP)。

○車

バックして方向を変えると道路へ走り出す

⑫。

○道

カメラ（後方車から）追う。

○郊外への道

三人の男女の車が、前方を行く。

○広場（L・S）

建物の角から車が現われ、倉庫等の点在する広場へ向う。遠方で停車⑬

○車（L・S）

カメラ接近すると⑭車から降り立った女性が、いぶかしがり、「話が違う」と尻込み

するのを⑮男が、なだめす

かして連れて来る。カメラ

前を横切り、建物へ向う三

人。

○倉庫

広場の端に建つ、人気のな

い倉庫の入口へ案内し、男

がドアを叩く。叩き方に合

図の特徴があつて、ドアは

内側へ開き、娘は中へ押し

込められる。

固く閉ざされる倉庫の扉



（C・O）。

○内部（C・I）

地下への階段を、女性を先に立たせており

て行く男⑯。

○地下室の扉

娘たちを連れて来た男がノックする。

青年が出迎えて娘たちを一瞥し⑰中へ引き

入れる。一旦、外へ出て三人を送り込むと

青年が最後にドアを閉める。

外部と隔絶するように、地下室の白いドア

が閉じられる。

○地下室内部

撮影現場——⑱。

ライトが皓々と輝き、直ぐ

にも撮影開始が出来るよう

に準備が整っている地下室

には、首枷拷問台、梯子伸

長台が置かれスタッフ、演

技者が控えている。

○地下室の出入口

一箱所しかない出入口際で

室内の光景を目撃し、居竦

む娘たちの顔⑲。

○地下室光景

栗色髪の娘が目敏く見た目

で——⑳。

僧服をまとい、梯子型伸長拷問台を挟んで

立つ二人の男。

○出入口際

逃げ戻ろうとする娘たちは男に阻止される

カメラ引くと、首枷の穴から覗いたシーン

となり㉑強引に奥へ二人がかりで娘たちは

押し込まれて行く。

不気味な拷問台のそばで、もみ合う男女を

別のスチールカメラが狙い㉒つぎつぎにシ

ャッターが切られて行く。

○地下室の奥

T字形架柱台、平均台風の固定拷問台の置

かれた地下室の隅で、男たちの視線にさら

されて娘たちは脱衣する㉓。

記録するスチールカメラ（UP）。

ブロードの娘が無遠慮な男の手で身体検査

され、乳房は驚攪みされて形状、張り具合

を試められる㉔。

背後に廻り込んだ男は腕を捕え㉕ブロード

娘の方を僧服の男たちへ引き渡す。

僧服の男たちは荒々しく娘を引きたて、一

気に梯子型拷問台に括りつける㉖㉗。

○地下室光景

ムービーカメラが別角度から一部始終を記

録している②⑧。

カメラ、パンすると反抗的な栗色髪の娘が青年に柄付平鞭で腹部を打たれ、壁際に引き戻されている。

ブロンド娘の方へカメラ、パンする。

彼女は腹面を梯子に、背面を衆目にさらして四肢が固定されている②⑨。

再度、鞭で腹部を強打されて、のめる娘③⑩。

○地下室光景

間断なく完全収録しているムービーカメラとサブのハンドカメラ。

○ブロンド娘

固定された娘が髪を振り乱して絶叫を繰り返す③⑪⑫。僧服の男が鞭打つ。

カメラは娘の顔から同位置で連れの娘の方へ急速に移動。

○栗色髪の娘

他方の僧服の男が娘に挑みかかり、尻込みして逃げようとする娘を青年と共に木馬に仰向けに固定する③⑬。

○ブロンド娘



鞭打たれて狂ったように暴れる。

青年に手を貸していた僧服の一人が戻り、打ち手となり、交替した男は梯子の間から娘の下腹部を玩弄する③⑭。

強烈なペッティングと痛烈な鞭を背面に浴びて娘は苦悶する③⑮。

その後方で、長尺の台に足を左右に割って鉄環に通され③⑯仰臥固定された娘が勦

誘者の男に鞭打たれはじめる③⑰。

○その娘

青年は衣服を脱ぎ捨て、のけ反る娘の肩を押しつけ、強引にフェラチオを敢行しようとする。と猛り、鞭を浴びせる男の片手は娘の……深く……③⑱。

荒波の如く波打つ白い裸身。

のど元を押えつけた青年が娘の顔面を捉え目的を達する③⑲。

口を塞がれ、乳房を荒々しく、もまれる娘は、寸刻も休まず続けられる鞭打ちと指戯の加虐で、弱々しくなる。

○狙うカメラ

ムービーカメラとスチールカメラが依然として撮影を続けている。

○地下室の別位置

腹部を連続して鞭打たれていた娘はブロンド娘に代って梯子台の方へ移され、引き続き背面を打ち据えられて行く④⑰。

友人の娘の方は、首枷台の方に連れて来られ、顔面側に立った僧服の男に強要されながら、臀部に九尾猫鞭を全裸の青年によって、あたがわれる。彼の片手もまた腹部を回って攻略する④⑱。

○栗色髪の娘

梯子は支柱によってシーソーのように可動し、立形から水平位置と繰り返し揺さぶられる④⑲。

その傾斜上下動の間、僧服の男が離れた位置から大腕に牛鞭で打ち続ける④⑳。

娘の絶叫呻吟に堪能し、発奮した全裸の男が梯子を下げ、娘の顔をのけ反らせて、雄壮に目的を達しようとする④㉑。

○そのUPシーン

男の手加減一つで微妙な上下動をする梯子と、連続する背面鞭打ちで娘の苦吟は絶妙な道具化を実現し、娘も鞭を許されたい一

心で懸命に奉仕をする④⑤⑥⑦⑧⑨。

○狙うカメラ(C・U)

スチールカメラの大口徑レンズが迫る⑩。

○再び梯子台の娘

僧服の男がベンチを取りに行き、男が程良い高さで寝られるようにする間だけ、背面を鞭打たれずに済んだ娘は、再び前より首筋が楽になった腹這いの位置で奉仕を強制され、鞭が背から腿にかけて振りおろされて行く。

○そのUPシーン

台下から口許を仰角で――。

涙と苦悶の汗に濡れ、疲労度が高まって、顔の上下動が続く。

○ブロード娘

上体を低く、両手首と咽喉部に枷穴がはまる三点首枷の前屈曲の体勢にされた娘は、男の指先でアヌスをリードされるのから逃れられない⑪。

首枷状態でのアナル・インターコースが娘に動かれて失敗すると、男たちは娘を、さいぜんの木馬台の方へ移し、台を抱くように固定する。

一人の男はドッグ・スタイルの娘に餌皿を舐めるような恰好をとらせて、目を細める

⑫。

その反対位置では、処女地を狙った男が自分も台を跨いで接近し、僧服の男の手を借りながら強引に襲いかかる⑬⑭⑮。

僧服の男の手が、左右へ強い力で押しつけながら引き離している乾き上った溪流に、露呈した湧泉の跡も底知れぬ空洞となって残る。

収縮を忘れたような攻め跡へ、空井戸への迎え水が放

漫に注ぎ込まれる⑯UPして、更に流下を防ぐかに悪童の鼻が滑り込んで行く。

カメラ、男の脇から背に隠されてC・O。

○栗色髪の娘

C・Iして、

ブロード娘に代って梯子台から降された娘が首枷台に囚われている。

そこでも娘は二人がかりの攻撃を受けて汚辱されている⑰。

カメラは台を中央にして左右の描写を納め枷穴から引き出された掌の動きで娘の呻吟



苦悶の屈辱感を示す。

カメラ離れ、後方から前屈した体を激しく攻めたてられる強要されたアナルインターコースの光景を狙い、一転して頭部のUP。

突き上げられる娘の枷から出た頭部は、そのまま前後往復の動きとなる――カメラ別角度から、男女の腰部を撮る⑱。

絶頂感を味わえずアナルに飽きた男は娘から離れてしまふ。

○頭部のUP

奉仕を続けさせられる娘と、自ら動く男。

C・O。

○娘の下半身(C・I)

首枷台の娘は突然、細竹一本の笞を臀部に打ち据えられて、激しく驚愕反応する――腰を引き、よじり、笞を避けようとしても男の振りおろす目標は冷酷・適確に定まり白い肌に赤条の痕跡は数をます⑲。

○娘の顔

首枷から逃れようもない娘は、男が髪をつ

かんで継続を強いる奉仕を中止し、絶叫慟哭する⑥。

○地下室の光景

スチールカメラマンが慌しく娘の狂乱を撮りまくる。

答は容赦なく打ち込まれ、加虐者を足蹴して遠ざけようとする足が空をきる。

しかし、却って男を刺激するだけで、答打ちは鋭さを、ます。

○狙うカメラ

又とない機会とばかり、一眼レフ高級カメラが娘を撮り続ける⑦。

○ブロード娘

木馬台の上では体の向きを変えられた娘が友人の苦悶絶叫に一段と興奮させられた男たちによって弄ばれ、氣息奄奄である。

台の端から頭を落し、頬を突き抜けるように杭を打ち込まれていても、含与されたものを拒む気力も失せて、他方からの揺動のままに泣きはらした目を閉じている⑧。

○栗色髪の娘

無数回の答打ちから解放されたが、依然、首枷からは解かれない。

元通り指揮剣をつきつけられ、赤くはれあがった腰部も引き寄せられ、三者合体が再

開される⑨。

しかし男の目的は、答の痕跡を治癒する塗布薬のように赤条一面に撒きちらすところにあるようである⑩。

○ブロード娘

濃厚な臭いが、顔面、咽喉部に振りまかれる。

別の男の攻撃に、娘は恍惚無心のまま、揺す振られている⑪。

○栗色髪の娘

枷穴から突き出された顔に反身のサーベルがつきつけられているが、娘は頑強に口唇を閉ざしている。

男は鼻腔へ捻じ込むように先端をこづきつける……娘はやむなく唇だけをすばめて突端を迎えても、それから先は歯を噛み締めてうけ入れない⑫。

赤い唇と白いもの……やけになる男⑬C・O。

○狙うカメラ(C・I)

……それらを至近距離から大口径レンズが間断なく撮影している。C・O

○鞭打赤条(C・I)

その娘の背後。白いコントラ・パス・スタ



イルの背面全体。その内、特に臀部の双丘は、細竹答の先端が当たった部分が赤斑に、牛鞭の跡は赤条に皮下出血を見せ、無数の痕跡となつて残っている⑭。

○エンド・タイトル

F・Iして

「1971 COLOR CIMAX CORPORATION
COPENHAGEN, DENMARK」

△編集部註▽

「このポルノ映画は、小生自身、参考に使されたもので、時間をかけて8耗映画コピー・チューブで転写出来ず、スクリーンに投写、駒写しでスチールカメラに収めたものであり原版がカラーのためモノクロでの収録に際立ちなくオール・ピンボケの相を呈しております。これが精一杯という所です」と、中宮栄氏からの添記を頂いています。写真は⑭シーン全部に亘って提供下されましたが、その内容の性質上、誌上掲載を憚られましたので、悪しからず、御諒承願います。

手記

まり子の為のイメージ画

須坂 旭

☆M女・まりこ・に対しての挿画投稿家よりの心の籠ったプレゼント☆

5月号でのお呼びかけ、嬉しく思います。
北川まりこ——。

この名前は、旭にも忘れることの出来ない
なつかしい名前です。

それは七二年五月号の「思い出のメモ」ま
りこの結婚式「V」の一文を読んでから、まり
こは、旭のイメージの中で、いつも雪の夜の
素っ裸の結婚式が思い浮んでくるのです。

旭の里も雪が多く、凍りつくような夜道を
帰る時など、いつも、まりこのメモから色々
の場面を思い出して、身も凍る寒さなのに、
身体中が熱くなるような感情の高まりを覚え
るのです。

雪責め——

これは旭の最も好きな「責め」の一つなの
です。十余年も前、旭はいつも読みふけた
SM誌の昂奮で夜、家をぬけ出し近所の川原
へ出て、切りさいたような月と、どこまでも

澄んだ真っ暗な星空の下で、旭は裸になって
雪の中を歩いて行くのです。

体中が熱く燃えて足が千切れる程、痛いの
に、どうしても昂奮がおさえ切れず、冷たい
川の流れの中に座り込んで、じっと、その尽
にして居たものです。

そんなきびしい結婚式を、女のまりこが、
しかも素っ裸の尽で荒縄で緊縛されて、縄尻
をつかまれて行ったのです。山道を三十分も
曳かれて辿りつき、そこで主人から凍りつい
た御手洗いの水を掛けられた時のまりこの気
持を、旭は、その時、本当に、まりこは幸せ
な女だと思ったのです。

礼拝、宣誓、三三九度、そして記念品の貞
操帯、手枷、足枷、鎖を、もう麻痺し切って
いる、まりこの裸に着せられて、マゾ女とし
て最も嬉しい盛装にされたばかりか、まりこ
に贈った記念品の革鞭（これは充分、まりこ

の肌の匂いを吸った、ずっしりとした重みの
ある奴）で容赦なく打ちつけられたのです。

手枷足枷で、もう絶対に逃げられない不自
由なまりこを、雪の上に突き飛ばして、手当
り次第に、背中にも、乳房にも、大きな尻
にも、もっと奥深い肌の上にも加えました。

それを百回まで数えさせられた、まりこの
声も段々と弱くなってきました。

「九十九、百……」

パシッという鞭音と共に、のけぞって、そ
り反った、まりこの最も敏感な太股に革鞭が
喰い込んで、まりこは、しばらく体を大きく
波打たせた後、起き上げませんでした。

頬に往復ビンタを喰って、ハッと気付き、
手枷を引きつけられて立たされた、まりこは
ガラガラ、鎖を引きずった足枷の尽で、よろ
めきながら、今度は手枷に付けられた鎖を主
人に強引に引っ張られて、山道を車の所まで

帰ってきたのです。

車が見えたとき、まりこは、もう自分が全裸の尽、この厳寒の中での責めによる手枷、足枷の痛さ、体中にミミズばれの残る鞭の痛さも、凡てが幻の様に霞んでしまいました。

「まりこは、やっと一人前に、人間のする結婚式を挙げて奴隷妻になれたのだ」

そう考えると、雪と泥に塗れ、鞭アトのついたボロ切れのような体を、ふっと力の抜けた人形のようにくずして、まりこは、深い失神に陥っていったのです。

奴隷妻まりこ——いや、誰とでも寝る、最底の女ドレイになれた、まりこの、それから『被虐の新婚旅行』から以後、何も書かないというのは、許せない事です。

主人の為だけでなく、誰に縛られ、鞭打たれても、嬉々と悦ぶドレイ妾になり下っている、まりこなのです。強制されて、主人の取引先の男達にメカケとして仕えているなどと言いながら、まりこは体中を性感帯にして、男の数が多ければ多い程、責めの縄がきつければきつい程、燃え上

ってしまうのです。

旭も若いとは言っても、まりこよりは、確か、二つ三つ上だと思えます。丁度、まりこの年頃の気持は一番よくわかります。

一度、ドレイ妾の生活に陥ち込んだ女は、もっと深く深く沈んで、人間の意志も捨て、人間の生活も捨て、動物や家畜並みになって一生懸命、男の為に尽すことが、まりこの本当の喜びにつながるものと思えます。



さて、そんなまりこの願望だった、まりこの教え子の同級会に招かれた時、主人の計画でまりこの「奴隷部屋」が会場に当てられて、若い教え子たちが、ざわざわと雑談を交わしながら先生の出席するのを待っています。

「皆さん、どうぞ」

主人の声で「奴隷部屋」が開かれました。板で区切られた部屋の壁や床に、数え切れない道具をちらかした真ん中に、白い布をかぶせた彫刻のようなものが置いてあります。

「皆さん。今日は、君達の先生に、最高のプレゼントをしてもらいたい。先生は、今、私の妻として幸せに暮している。まりこは、今、君達の若い目で、手で、体で、今迄の感謝の気持ちを表わして欲しいと待っている」

主人は、そう言って、さっと布を払いのけました。異口同音に、みんなは驚きの声を挙げました。

「あっ、先生っ」

そこには、素っ裸のまりこがあぐら縛りで後手にしばられていたからです。

「やめて！ 見ないで！」

思わず人間に返った、まりこ

が、悲痛な叫び声を挙げていました。

途端に激しい鞭の音が、まりこの口を封じていました。

「君達、このまりこはドレイなんだ。さあ、よく見てやってくれ。これも、これも……」

主人は、いきなり、まりこのあぐら縛りの縄尻を、ぐいす上に持ち上げて、皆の視線の中に、まりこの恥ずべき所の凡てを、さらけ出して、呼びかけました。

すると、今迄黙って見ていた一人が、「先生、僕達も楽しませてもらうよ」と言う、手を伸ばして、まりこの乳房を驚つかみにしました。

それをきっかけに、四、五人が、わっと取り囲んだかと思うと、まりこを持ち上げて中央の柱の所へ連れてゆきました。

「君達、その柱の前へ立たせてくれ」

「よし、早く縛れよ」

まりこは、急に数人の男の手で縄をとかれたかと思うと、柱の前で両手を上げた格好に縛りつけられ、羞恥を表わす言葉もないまま晒し者になってしまいました。

「まりこがドレイなら、それらしく、やってやろうじゃないか」

一人が言いますと、他の一人が、「先生がああ奇クに載っていた北川まりこののかい」と言っています。

何と奇クの読者が、この中にいたとは、全

く驚きです。

「A君、そうなの。まりこはドレイなのよ」

も早、ここまで来てしまっただけは、まりこも、心を決めて、どんな責めでも、いさぎよく受ける心算になりました。

「おい、カミソリはないかな」

「よし、探してくる」

話は決まって、早速、剃毛式の段取りが出来ました。

「俺達の記念に、きれいになってもらって、あとのものは、記念品の代りに、みんなで持って帰るとするか」

すっかり言葉づかいも変って、奇ク読者のA君が、どっかと、まりこの前に坐り込むと浮き浮きした声で呼びかけました。

「おい、誰か、片方の足を上げてくれ。そう、うんと高くな。それから他の者は、動いてここに傷をつけちゃいけないから、どこでもいい、おさえつけててくれよ」

「ふふふ、まりこよ。お前は、大分可愛がってもらってるな。それを、もっと、よく見せてもらうぜ」

主人が顔を近づけます。Aは馴れた手つきで、ゾリゾリと刺ってゆきます。まりこは、心の中で、「素敵！」と叫びたいのをこらえて、「あああ」と動かすことの出来る頭だけを振って身もたえしています。

一人はマジックインキを持ってくると、乳

房から腹へかけて、「ドレイ妾まりこ」と、大きく書き込みました。いつ終るともわからない若い教え子達の手による責め、鞭打ち、特に乳房、それから、開かされた股の下からすくい上げるような鞭の一つ一つが、まりこにとって、この世の中の最高の喜びを味わせてくれるのでした。

最後には床の上に大の字にされて、声を出す力もなく、まりこは、伸ばしきった手足が冷たくなっているのに気付きましたが、午後一時に始まった同級会が、すでに午後五時すぎになっていたのでした。

主人が与えてくれた、まりこへの最高のプレゼントに、綿のように、くたくたに疲れて長々と伸びているまりこの胸には、体中にあふれてくる幸福感でいっぱいでした。ドレイ妾で良かったという気持ちが強くなりました。だって、こんな喜びが感じられるんですもの。

旭が、ふっと、まりこの為のイメージ画を描いて見て、右のような空想を發展させ一つの話を作ってみました。

「まりこよ。もっともっと手記を書くこと。」

そして、顔は無理だとしても、そのドレイ妾の素っ裸の尽で、奇クの我々の前に姿を現わすように、主人の許しを得ておくこと」

旭は、これからも、ずっと、まりこのような者の為に、又、全国の奇クファンの笑止を受けて、描き続ける心算であります。



<告白>

「恵子の近況お知らせと思い出」

夕暮れに泣けてくる私

中河恵子

奇ク愛読者の皆さま、今日は。

思わず、御無沙してしまいました。

奇クは電車に乗って、二つ目の駅の街まで行って毎月、欠かさず手に入れております。

バックナンバーを探し求めて買い漁っていましたが、あの頃が一入なつかしく思いだされてなりません。奇譚クラブという文字が、今でも、私の体から、どうしても離れないのです。私が初めて、こうしたことに強い関心を持ちはじめた高校生の頃から数えて、もう、何年もたちました。

私が誌上に何回も、告白の文章を書き、そして、一週間毎ぐらいに、縛られたり、責められたりした頃の思い出は、なんだが、甘酸っぱいような感じで、私の心の奥底に、今でも残っております。

今から思いますと、その頃の私は、我まま
いっぱいに育っていました。午後になって、
急に電話を掛けて、「今すぐ迎えに来て」と
言ったりして、彼を呼びだしたりしたもので
した。二十三才の私を、好き放題に甘えさせ
てくれるムードが彼にはありました。

ひとたび、密室でのSMプレイに入ったな
らば、彼は私の体の上に、あくなき暴虐の手
をほしいまするのに、それまでの過程で
は、私の我ままを最大限に許してくれるので
した。私は、もう、彼の前でだったら、どん
な恥態でも演じるようになっていました。

そして、彼に縛られ、責められることが、
楽しくて楽しくて、たまらないように、私の
体は変化していました。

初めて、彼に逢って縛られたときは、縛り
方もゆるく、パンティも最後まで取られませ
んでした。それなのに、三日ほどして、次に
お逢いしたときは、私は早くも、この世の極
楽の境地を味わっていました。

「貴方って、お上手なのね」

私は、終ってから、つい、そんな恥かしい
言葉を口にするほどになっていました。

縛り方、責め方が、私のしてほしいと考
えている一歩先を進んで、私の体を、びしょび

しょにしていきました。

なんととっても、私が一番に燃えあがって
しまいましたのは、椅子に座らせられて、両
足を左右の肘掛けに縛られ、正面からカメラ
を向けられたときでした。ライトがパツとつ
けられて、私の一点に狙いをつけられたとき
は、写真にうつされるのかわ……という気持
が、その部分を、火のように熱くさせてしま
いました。

生まれて此の方、こんな素晴らしい気持ちで
味わったことはありませんでした。今思い出
しても身ぶるいする程なのです。もう、自分
で止めようとしても、どうしても止めること
が出来ないのです。知らず知らずに、その部
分が、ひとりでに開閉し、動いてしまうので
自分では、どうすることも出来ません。

あんな気持ちになるなんて、そうザラには起
らないのです。私は、両手をうしろ手に縛ら
れるだけで、その後のことを考えて、自然に
体が濡れてきます。縛られることが、好きだ
というのも、その後にかかることを、自分で想
像して、心の中で燃えてしまうのです。

両足を左右に大きく開かせられて、縛られ
ることは、心の底では、それを強く望んでい
ながらも、やはり、少しは抵抗します。もう



そうすることが当然のように、彼は私の足を開いて縛ってしまいます。いやいやと抵抗すると、足の裏をくすぐって、私の注意を、そちらの方へ向けておいてから、虚をついたように、さっと膝や太股を椅子の肘に縛ってしまいました。

若い女にとって、両方の太股を左右に無理矢理、開かせられて、その足を縛られてしまうということは、どんなに恥かしいことでしょうか。もう、それだけでたまらない屈辱ですのに、更にその上、三脚にすえられたカメラが、正面から迫ってくるのです。

ライトが左右から二つ、真昼のような明るさに照らし出されたとき、私は、まぶしくて思わず目をつぶってしまいました。足の裏がこそばゆくなり、私は顎を上にして、のけぞってしまいました。

その次に、私がとっても恥かしい目をしま



したのは、私の泣き声をテープレコーダーに採られたときのことです。

私は、自分の声が、そんなテープに採られていたなんて、それを再生して聞かされるまでは、ちっとも知らなかったのです。

責められた挙句、私が、「ごめんなさい、ごめんなさい」と哀願している声が、はっき

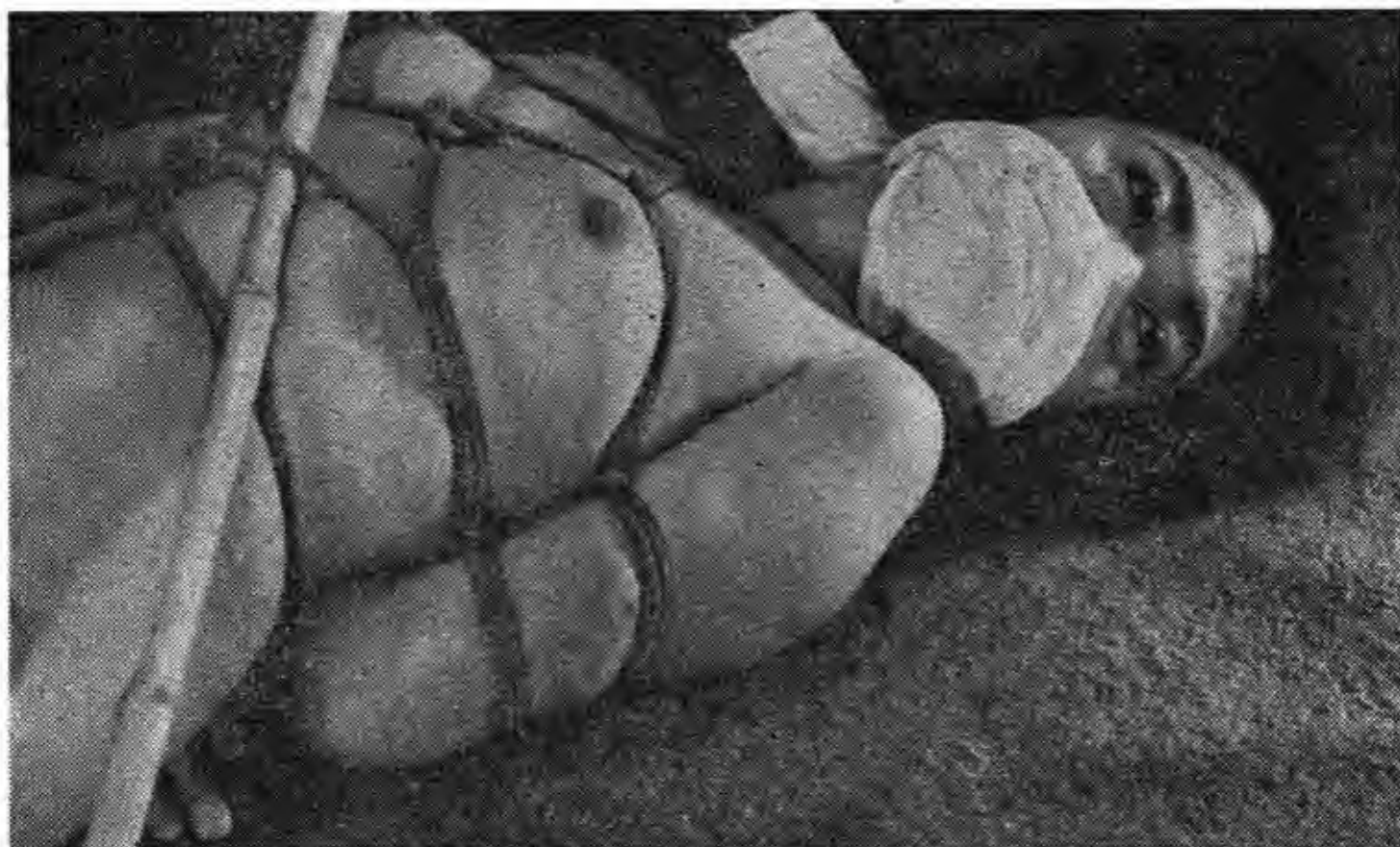
りと入っているのです。いいえ、ポリウムを上げていたので、実際の自分の、そのときの声よりも、一段と大きな声で再現されているのです。私は本当に、びっくりしました。

責められている最中には、自分でも夢中になっているものですから、そんなに声を出しているなどとは、ちよっとも思っていなかったのですが、テープを再生されてみると、いろんなことを発声しているのです。

そして、もっとももっと恥かしい吐息や泣き声、言葉が、そのあとに録音されているのですもの、私は顔が真っ赤になって、思わず、耳を掩って叫んでいました。

「やめて、やめて——」

顔から火が出るような恥かしさは、こんなことを言うのでしょうか。そのときに、自



分が、あんな声を出していたのかと思うと、穴の中へ入りたい位でした。それで、布団の中へもぐり込みますと、彼は私の両手を後手に縛って耳を掩えないようにしておいて、更にポリウレムを上げて、私に聞かすのです。

恥かしくて、聞くのは嫌と雖も、無理に聞かせられると、私も妙に興奮してきて、身のおきどころもなくなってしまうのです。普通だったら、とても、自分から聞くことなど出来ない、そのときの泣き声が、両手を縛られているので、無理に聞かせられてしまうのです。その縛られたままで、嫌だ嫌だと思いつつ、無理に聞かせられたのが、とてもいいのです。

そのときに、自分が、こんなにも、いろんな声を出したものだ、聞かせられて、初めてわかりました。布団の上に縛られてころがされ、そのときの自分のテープを聞かされていますと、私の体は、自然とほてってきて、むずむずとしてきます。そんな私を、彼は決して、ほっておきません。布団の中へもぐり込んできて、私の体に、いろ

んな悪戯をするのです。

縛られて両手の自由がきかない私の体に、彼の執拗な手が伸びてきます。そして、耳には、聞くまいとしても、いやでも、自分の泣き声が入ってきます。私は、なんとも云えない楽しい気持になってしまいます。

彼に責められているのに、私は本当に楽しい気持になってしまいました。もっと、もっと責めてほしいという気持が、彼によってかなえられると、私は楽しくなりました。

耐えられないほど恥かしい気持が、強ければ強い程、私は楽しかったのです。

そのあと、彼を迎え入れてからも、また再び、テープに採られるのだわ……と考えますと、そんなことを知らなかったとき以上に、燃え上ってしまいました。

この声も録音されているのだわ……。とても恥かしく、その恥かしさが、また、私を異常なまでに燃え上がらせてしまうのです。

自分の恥かしい姿を、あからさまに、さらけだされることに、たとえようもない楽しさを感じる私は、多分に露出癖を持っているのだと思いますが、自分の声を、自分で聞くことに、こんな気持を抱くなんて、考えても見ないことでした。



私は、他の女性の裸で縛られている写真を
見るのが好きです。何故、好きなのかと、問
われても困りますが、とにかく、男性のそん
な写真は少しも見たくないのに、同性の写真
には、大変関心があるのです。

そんなことを、彼に話しますと、「それで
は、次に持ってきて、見せてあげよう」と言

ってくれたのです。

「私のは嫌よ、恥かしいから。他の方を出
来るだけ沢山、見せてね。きつとよ」

そう念を押しておきましたのに、彼ったら
三十枚ほど、ハトロン紙の封筒に入れて持っ
てきてくれた写真を見ますと、半分以上は、
私の裸で縛られたフォトではありませんか。

私は、「あっ」と息を飲んで、その写真を
封筒の中へ、しまい込んでしまいました。

「嫌よ。私の写真じゃないの。あれだけ、他
の方のをつて、頼んでおいたのに——」

私が鼻を鳴らしますと、彼は平気な顔をし
て答えるのです。

「自分のを見たかったのじゃないのかい」

自分の裸で縛られた責められている写真を
見るなんて、本当に恥かしいのですが、恥か
しいのに、一面、また見たくもあるのです。

結局、そのハトロン封筒に入れた写真を、
私が頂くことになって、家へ帰ってから、ゆ
っくり見せて頂こうと思っていましたのに、
どうしたことでしょうか。私は、それをマン
トルピースの上に置いたまま、忘れてきてし
まったのです。忘れたのに気がついたのは、
駅へ来てからでしたので、そこからホテルへ
電話して、次に行くときまで預ってもらふこ
とにしたのです。

封筒には封はしてありませんが、今更どう
することも出来ません。

次に、そのホテルを訪ねましたとき、案内
の中年の婦人に、封筒のことを申しますと、
ニヤニヤと私の顔を意味あり気に眺めながら
丁寧な言葉遣いで、手渡してくれました。

「封は開いていましたけれど、私たちは、少しも中は見ていませんから……」

そう言われたとき、私は自分が素っ裸にされて見られているように、顔が真っ赤になってしまいました。私が何も、そのことについて言っていないのに、彼女から先に「見ていません」と言ってくるのは、見ましたという何よりの証拠です。

お茶とお菓子をテーブルの上に置いてからも、その案内の婦人は、私の顔をジロジロと不思議そうに眺めながら、何か、更に物言いたげに、中々立ち去ろうとはしません。彼はニヤニヤと笑っているばかりです。

私は次から、そのホテルへ行くのを断りました。プレイをしているのではないので、恥かしさだけで、楽しさがありませんでした。

彼が助手の男性一人を連れてきたことがありました。私は自分の責められているところを、第三者に見られているということで、凄く興奮しました。その助手の人は、直接、私を縛ったりすることは一度もなく、ライトを持ったり、三脚の上のカメラを彼の言いつけ通り移動させたりしていました。

そんな仕事^{うわ}が上の空になるくらい、私の体の方ばかり、穴のあくほど見つめているので

す。ジッと目をこらして見られているのだと思うと、私の体は、いつもより早く激しく燃えさかりましたが彼は意地悪く、そんなになつてしまった私の体を醜弄して、殊更、あからさまになるように、縛ってしまいカメラを向けるのです。

私は、もう足の爪先から頭の先まで、しびれてしまい、次に自分の体の上に、何が起ったのか、わからない位でした。彼って、最初から、そんな計画だったのです。助手の男の方が見ている前で、私を弄んでしまったのです。彼もまた、見せびらかすことが、大好きだということが、そのとき初めて私にもよくわかりました。

見られている———という意識がありませんと私は、もう恐ろしいほどの狂乱状態になってしまいました。でも、彼は、簡単には、私を



許しては呉れませんでした。

それは長時間、続きました。幾度となく訪れる激情に、私の体がのびてしまいますと、

彼は何度となく、いろんな責めを、私の体に加えてきました。

ふと、目を開けますと、助手の方の血走った眼が、私の方へ喰い入るように注いでいます。その凄い目つきに、私はぞっとして、そのあとで、体中がぞくぞくしました。

「見られているのだわ。自分のすべてが、女の性のありとあらゆるところが、すっかり、見られているのだわ。ああ、どうしよう」

そう考えますと、私は前後のみさかにもなく、体毎、彼の胸に埋めていました。

好奇心に満ちた、見たくて見たくて、たまらない羨望の目が

私の体中、至るところに突きささってくるのです。そのときの気持ち、なんとも云えないものでした。

もう、これ以上、どんなに責められても、自分の意志では、体は動かないというところまで、私は責められ続け、その結果、床の上に、ボロ屑のように捨てられたのです。



部屋の後片づけを助手の人がしている間、私は夢心地のまま、のびていました。彼は、そんな私を放ったまま、お風呂へ入りに行っていました。

私は、こんな気持ちになったのは、そのときが最初でした。彼もまた、助手の人に見せびらかしているということからか、いつもより

は、ずっと執拗に私を責め、そして、私が完全にのびてしまうまで許してくれませんでした。何度も息が詰まりそうになりながらも、私は、よくそれに耐えて、助手の人に、出来るだけ、長く見せてあげようと、頑張りました。声も、思いつきり派手に出しました。

それがまた、自分の気持ちをたかぶらせることに私は気づきました。床の上に、いぎたなく、全裸のまま、バスタオル一つ掛けてもらえなくて、汗まみれの体を横たえている私を、じっと見つめている助手の人の視線を肌に感じながら、私はいつまでも寝ていました。

そんなことがあってから、すぐ、私は、迎えに来た父親に連れられて故郷へ帰るようになりました。アパートの一人暮らしといっても三年もすれば、筆筒やミシン、毛糸編機に、ベッド、冷蔵庫、テレビ、三面鏡と、引っ越しの荷物もトラック一台分はありました。

一緒に帰ろうと言う父親一人に、トラック



に乗ってもらって、私は、すぐ後から乗用車を自分で運転して帰ると答えました。

その日、最後の思い出に、彼とのSMプレイをしたかったのです。私は、はやる心を押えながら、彼に電話をしたのです。今日こそ最後のチャンスなのです。きっと、彼も、こんな私の心を汲んで快くプレイを承知してくれると思ったのです。

それなのに、彼は仕事が忙しくて今は駄目だと、冷たい返事でした。「だって、私にとっては、これが最後のプレイに、なるのか知れないのよ」

私は涙声になって、かき口説きました。

電話口で泣いたのだって、私にも初めての経験でした。涙があとからあとから頬を伝って、声も自然と泣き声になっていました。

そんな泣きながらの私の頼みを、彼は聞くだけ聞くと、彼は冷たく、「今日は駄目です」と言って電話を切ってしまいました。私は泣く泣く

故郷へ帰りました。何故、最後になって、彼が、こんなに私に冷たくされたのか、私にはわかりませんでした。

そんな冷たい仕打ちを受けても、私の彼に対する思慕は変わりませんでした。それよりも遠く離れていればいるほど、あの全身がしびれるようなプレイの甘美な思い出が、忘れられないのです。体の底にしみついた快さの味は、忘れようとしても、とても、忘れることは出来ませんでした。

それから三回、私は神戸の地を訪れて、彼とのプレイをやりたいと思いました。初夏の夕暮れ、神戸駅の前で彼と待合わせて黄昏の山手の街をドライブしたときのロマンチックな気持は、一生、忘れることは出来ません。

最近の奇クを拝見していますと、私と同じようなM女の方が沢山、顔を出しておられますので、その頃を思い出して、ついペンを走らせてしまいました。原稿用紙が手元にありませんものだから、便箋での走り書き、それに細い字で、さぞ読みづらいこととは思いますが、よろしく、御判読下さいませ。

私が写して頂いた責めの写真、まだまだ沢山あると思いますので、どうか、誌上に発表して下さいよう、お願い致します。

気 違 い 男

岩 見 崇 の 巻 （2）

鬼 山 絢 策

舌 戯 の た の し さ

黒い房々としたものの間から、真っ赤になった岩見の顔が、半分ほど、のぞいていた。吟子の動きにつれて、その顔は半ば以上が埋もれたり、時には両目まで、かくれたりすることもある。

目を開けていれば、両目を太く濡れた剛毛で突き刺されたであろう。だが岩見は、目をつぶっていたから、辛うじて、その難は逃れた。

「目をあけて！」とか「目をあけて、あたしを見るのよ」とか、何度か吟子は命じた。そ

の都度、岩見は緩慢に目をあけて吟子を見上げるのだが、高潮してくると目をつぶってしまうのだった。

どうすれば一番、快くなるか？

ということ、吟子は尻を、あっちこっちに動かしながら探っていた。だが、すでに二回も「峠」に達し、「峠」をおりかけたところで、また上り出して、「峠」を越え、あともどりしたところで、また「峠」に向って上りつつある吟子だった。

女のさがは、「峠」を、ちょっとおろかけたところで、また、あともどりして上りに入るのである。

そういう状態の時は、相手のことなどに思

いやっている余裕はなかった。

最初のうちこそ、吟子は岩見の頼みに応じてヤプーショーでやったことの再演をするつもりで、哀れな奴隷の哀しい願いを叶えてやるつもりだった。

そうすればこの男が、男性としての機能が活発になるだろう。その時、ほんとうに愛し合えばよいと考えて、やり出したのである。

ところが実際に入ってみると――

男のそれは極く小さな肉の一片でしかないのだが、いつも吟子が経験している他の男性のものより遥かに小さく、力も弱いのだが、何しろ疲れを知らず、絶えずピチピチと小魚のようによく動き、小まめに吟子の扉のうち

そとを何回も舐めこすって飽くことを知らないのである。

これが大勢の観客の目のあるヤブーショーのような場合だと、演技としての意識が強いから、とり乱すようなことはないのだが、いまは岩見と、ただ二人きりのホテルの一室である。

最初こそ「演技」と同じ気持でいたのが、岩見の熱心な奉仕によって「本気」になってしまったのだ。

加納吟子は、これまで、このようなプレーは「前戯」の一種として、何人かの男と経験している。

それは、中には上手な男がいて、吟子の気に入るようなテクニックを用いた男性もいたが、大概五分以内で終わってしまうし、吟子が上り調子になったところで、男はやめて本番に向ってしまうのである。

だから舌戯そのものについて、吟子はそれを好んだが、そんなに重くは考えていなかったのである。

それが三十分も四十分も続いてくると、吟子はいままでにないものを感じていた。かつてのプレーとは全く異質のものであることを知ったのである。

それは――

いままでのものは「男に舐めてもらっている」という意識下にあった。

だが今夜のそれは「男に舐めさせてやっている」というところから出発している。その差であった。

「舐めてもらっている」という条件では、男性がやめようと思えば、いつでもやめてしまう男性の「権利のもとに」行なわれているのである。それが、いまは舐めさせる権利を女性の方が握っている。

それが大きな差であった。

自分が満足するまでは、いつまでも男に奉仕を強要させることができる。しかも相手は奴隷に身をやつして自分を「女王さま」と崇め、奉仕することが絶対の義務であり、生き甲斐であるとする信条の男である。

そんな優越感から出発したのだが、いまはそんな理屈を抜きにして、触感そのものが、楽しいのである。触感だけでグングン性感度を昂めることができる。吟子はサジスチックな好みは、もともとないと思っていたのであるが、相手がMの男性なら、Sの女性になれる素質は持っていたのである。

吟子は最初、岩見の望みを叶えてやれば、

そのうちに岩見の方も、役に立ってくるだろう。その時に普通の男と女として愛し合おうと考えていたのだった。

それが、いざはじめてみると、次第に昂奮してきて、そのこと自体に熱中するはめに陥ってしまった。

自分では、サジスチックな気持はないのだが、感度を高めるためには、自然に男を圧迫し、息詰まったような重圧を加えて男を責めるような事態にも、はまりこんでしまうのもやむをえなかった。

吟子は何度も上り詰めて、両の太腿に、やや気だるさを覚えた。

ふと冷静さを、とりもどした。

吟子はチラと後を振り返ってみた。

そこには岩見の疲労困ぱいして、くず折れしてしまった醜い姿を見たのである。

男 の 肩

吟子の引越しが、はじまった。

岩見崇が苦勞して見つけた新しいアパートに小型三輪に家財を積んで移ったのである。

その時も岩見は甲斐々々しく手伝った。

手伝うというよりも、岩見が引越しをす

るように運送屋の手配から荷物のおげおろし部屋の掃除と、すべては岩見が、やってのけたので吟子は、ただ家具を、どこに置くか指示するだけだった。

もともと大して荷物があるわけではなかったから、引越は半日で片づいた。

「ああ、よかった。ここは、ほんとにいい所だわ、それに佐戸崎から完全に逃がれることができたし、あたしホッとしたわ」

「そんなに佐戸崎君が嫌いなんですか」

「嫌いな嫌いな大嫌い！ あんなイヤな奴はないわ。男の屑よ。ダニのように女にたかるイヤな奴。エロダニよ、あいつは！」

眉をしかめ、唇を曲げて吟子は罵った。

岩見はゾクゾクするほど嬉しさが、こみあげてきた。佐戸崎には、これまで、ことごとくに痛い目にあっている。

学生時代、将来、結婚しようとしてまで惚れこんだ女性を途中で佐戸崎に横取りされた。それでも佐戸崎が、その女と結婚すれば、岩見としては、まだ諦めもつくのだが、佐戸崎は自分のものにする、すぐその女を捨ててしまった。

仕事の面でも、岩見が、やっと見つけた仕事を、途先から横取りするようなことが、し

ばしばあった。

加納吟子の場合は、ヤブーショーの時に、佐戸崎と岩見が同時に会ったのだから、同じ地点からスタートしたことになる。だが手の早い佐戸崎が早くもものにしまった。

岩見は吟子が好きだったが、佐戸崎の女だと思っただけで、結果から見ると今度は岩見の方が佐戸崎の女を奪ったかたちになってしまった。

岩見は、これまで佐戸崎と争ったことは一度もなかった。佐戸崎が欲すれば争わずして自分は引き退っていたのである。

しかし吟子の場合は、吟子自身が佐戸崎を避けて自分の方へ、もたれかかってきたのだから、しかたがない。

岩見は吟子の出ているクラブに何気なく顔を出し、隅の方で水割り一ぱいを飲むのが楽しかった。クラブでは吟子は全然、自分を無視している。だがママをはじめ、マネージャー、ボーイ、朋輩のホステス達は、自分が吟子の亭主だとかばかり思い込んでいるから、仲間うちのような態度で接してくる。それが楽しいのだ。

お客の中には吟子に好意をもって（好意というより、野心というべきかもしれないが）話しかけてくる男もいる。吟子は、それをつかず離れず、うまく調子をあわせている。

「傍らで亭主が飲んでるのに」とパーテンやホステス達は承知しているが、いずれも知らん顔をしている。岩見も知らん顔でパーテンと世間話をしながら、吟子とお客のやりとりを秘かに観察する——その何ともくすぐったいようなムードが、岩見には、こよなく楽しいのだった。

お客達は吟子に熱心で、吟子を目当てに通ってくる男も何人かいたが、吟子が、きわ立って美人なのと「女優さんのアルバイト」ということを聞いているので、あまり悪おししてくる男もいなかった。中には岩見と同じように、惚れていながら口説くこともできずにいる男もいる。岩見は、はたで見ていると、その男の心情が、自分に似ているので、よく分かるのだった。

——ああ、吟子が、もしも、ほんとうに自分の女房になってくれたら——

どんなに楽しいだろう。それを店の人達は知らない。知っているのは吟子と自分だけ。二人だけの秘密なのだが、何とかこの秘密を

なくしたいものだ——と悩ましい想いに、ふけることもあった。

客が立て混んでくると、岩見は気をきかして、席を立つのだった。そんな時にボーイがさり気なく店のマッチを手渡した。

開けてみると、

十一時、TEL

とだけ吟子の字で書いてある。宝もののようにマッチをしまいこんで幸福感にひたりながら、岩見は店を出て、パチンコや映画で時



イメージギャラリー

『悩殺の足』 岡 たかし

間をつぶして、わくわくした期待で、十一時に店に電話するのである。

“M”をノーマルに

吟子は、ともかく一度、岩見と、まともな交わりをすべきだと思っていた。

先夜のホテルでは、つい自分の方が昂奮してしまって、頃合いを見はかるチャンスが逸してしまったので、気がついた時は岩見の方は二度も果ててしまったので、どうにもならなかった。

「お礼と言う意味じゃないの。あなたが好きだから誘ったのよ」と吟子は岩見に言った。けれども、それは、やはりお世辞であって、本当は世話になった分を身体で返そうという意味の方が強かった。もっとも恋愛的感情こそ、ないけれども、親切で誠実な岩見が憎いはずはなく、好意をもっており、また岩見のマゾヒストという特異な性格も、吟子にとっては嫌いではなく、むしろ好奇心を誘うものの一つだった。

その夜は引越したばかりのアパートへ岩見を誘って、最初こそこの前と同じプレイからはじまったが、今度は吟子の方で絶えず注

意していたので、うまくチャンスをつかえて、岩見を自分の身体の上に乗せた。

岩見は持続力も乏しく、吟子の期待を裏切った。

岩見のガッシリした身体つきから推して、遅いものを期待していただけに、味気なく終わったが、

「それでも、これで一応『借』は返したという気持にはなれた。」

「好きよ、岩見さん。ほんとに、あんたは、いいひとだわ」

岩見の方は、ただ羞恥だけがあった。大体自分のようなものが吟子のような絶世の美人に対等に交わるといふことさえ、僭越だと思っていた。だが半ば命令され、強引に身体の上に押し上げられたのだから仕方がない。それにしても、自分でさえ不甲斐なく終わってしまったことも二重の恥かしさだった。

岩見の羞恥と失意を慰めるように、吟子は「好きだ」と言ってくれる。そんな吟子のやさしさが何より有難かった。

こんなぶざまな形に終って愛想をつかされるのではないかと思っていた矢先だったから吟子の言葉が真偽をたしかめることなく、岩見には嬉しかったのだ。

だが吟子が「好きよ」と言ったのは、一種の自己弁護にすぎなかったのだ。

「世話になった分を、身体で返す。あたしを、そんな娼婦みたいな女と思われたくない好きだから、こうしたのだ——」

という、はかない見栄のようなものだったのだ。

呆気なく終わったまぐわいも、吟子は期待こそ裏切られたが、失望——というほどのものではなかった。

もともと、その以前に彼の舌が何度も頂上に達してくれたし、女の強慾から、更にその上のもを望んで果されなかったけれども、一応、満足を得られたのだから、考えようによつては「まあまあ」というところだったのである。

「この人、ふるえていたわ。きっと馴れないから、うまく行かなかったのかもしれないわ。あたしを高く買いかぶりすぎてるのよ。馴れてくれば、もう少しましにできるかもしれない——」

そんな風にも考えて見たのである。

吟子は岩見のコックよりも舌の方に興味をもった。

二、三日して吟子は、また岩見をアパート

に誘った。もう一度やって見たい興味が、わたからだった。いつものように岩見を責めた後、吟子は岩見の顔の上から退いて、「あら、もうできるわね」と促した。

「吟子さん、それだけは、勘弁して下さい。こないだで、もうこりごりです。僕、あんな恥かしい思いをしたことはありません。吟子さんの御好意は、ありがたく、涙の出るほど感謝しますが、率直に言つて僕は、あなたに奉仕するだけで満足なのです。あなたと対等に、男性として、つき合う資格のない男なのです」

「そんなこと、ないわ。あなたは、みずから卑下してるのよ。そりゃMの性格が、そういうものだといふことは、あたしも知ってるわ。でもプレーはプレーとして、普通のいとなみだってチャンスとできたじゃないの。そんなに恥かしがることないわよ」

吟子は、岩見を何とか普通の男にさせてやりたかった。ノーマルなことをやっていれば次第にノーマルになって行くのではないかと思っていた。

「いえ、僕はダメなんです」
岩見は哀しそうに言った。

「僕だってノーマルなセックスが不可能ではありません。だけど、あなたが美しすぎますし、気高すぎます。僕は、あなたの奴隷で満足なのです」

吟子は岩見を、いじらしく思った。

「そう、それならそれでもいいわよ。この前の、アパートの時と、ホテルの時と、あんたどっちがよかったの」

「そりゃ問題になりません。ホテルの時が高です。あの夜のことは一生、忘れません」

吟子は、岩見のひととなりだが、だんだん分かってきた。

吟子は、かつてマゾっ気のある男とも二、三、交渉があった。それ等は岩見のように彼女を女王とあがめ、奴隷のまねをするけれども、最後はノーマルなことを要求してきた。

だから岩見も、そのタイプの男だと信じていたのであるが、この男は、それ等の男よりも、もっと純粋なMの持ち主なのであることを知った。

「こんな僕を軽べつするでしょう」

「軽べつなんかしないわ」

「イヤ軽べつされてもいいんです。どんなにさげすんで下さっても結構ですが、どうか僕を捨てないで下さい。いつまでも奴隷として

扱って行って下さい」

「いいわよ。あたしってサドの気があるのかしら。男の上に君臨する気持、悪くないわ。

男の人をいじめてやるのも好きよ。それに、あんたの舌が気に入ったわ。あなたの好みに合わせて行くことがイヤじゃないし、あなたが望まないなら、あなたの言う女王さまと奴隷の生活を、このまま続けて行ってもいいわよ」

「ありがとうございます、吟子さん。あなたのような理解のある女性に僕は、はじめて、めぐり合いました」

「人間の生き方にしても、こうであらねばならぬ、というものは、ひとつもないわよ。人それぞれの、生き方があるんだわ。男と女、お互いにそれを認め合い、理解できるなら、どんな生活だっていいじゃないの」

「そうです、そうです。その通りです。ああ吟子さん、あなたは全くすばらしい方です」

岩見は跪いて吟子の足に接吻した。

「そんなとこへキスするより、もっと、いいとこ、舐めさしてあげるわ。あたし、あなたと本番やるつもりでいたんだもの。まだ、その分がのこってるのよ。フッフ、その分だけサービスするのよ」

吟子は岩見の髪を驚づかみにしてグイと引きあげると、乱暴に岩見の顔を両股に、はさんだ。

「サ、舐めるのよ。うんと舐めて！」

と岩見の後頭部に手をあてがって、力強く引きつけた。股にはさんだ岩見の顔がパージと熱っぽくなるのを肌で感じた。

マ ッ チ 箱

「よう、しばらく」

マンションに突然、佐戸崎昂が現れた。

「やあ、珍しいですな」

予告もなしにヌツと入ってきた佐戸崎に、岩見は何となく狼狽の色を見せた。佐戸崎の鋭い目が、その動きを捉えて、とがめるように岩見をジッと見つめた。

「今日は何か——」

「いや、べつに。近所まで来たもんだから、ふと君のことを思い出してね」

佐戸崎は刑事のような目で部屋の中を見まわした。

対照的に岩見は「犯人」のように落ちつかない目で佐戸崎と一緒に自分の周囲を見まわした。ちょうど仕事をしていて最中で、机の

上には木炭紙や黒インクやペンや描きかけの絵が、たまっている。乱雑な一人住まいは、あちこち、ちらかっているが、佐戸崎に見られて困るようなものはないと見て安心した。「相変らず忙しいんだな。俺の方は暇で困ってるよ」

「いや、大したことはないですよ。どうせ僕の仕事なんか一枚いくらの手職人の仕事ですからね。あなたのように一枚、描きあげれば何十万、何百万と、まとまった金が入るような仕事じゃないんですから」

「皮肉かね。ハッハハ。まあいいさ。時に吟子と会ったかね」

「イエ、全然」

佐戸崎は、また鋭く岩見を見つめた。岩見もその目を見返して答えた。いまは佐戸崎に対応する心の準備ができている。

「吟子さん、どうしてます。また芝居やるんですか」

逆に岩見の方から質問した。

「ウム、芝居は、このところなさそうだね」

「じゃあ、あのひとは一体、何をして暮してるんでしょうね」

「そんなことは知っちゃいないさ。困れば淫売でもしてるんだらう」

吐き捨てるように言う佐戸崎の白哲の顔に憎悪を感じたが、岩見は顔には見せず、

「佐戸崎さんは会ってるんでしょう。僕も彼女に会いたいなあ。たしか渋谷か、どこかのアパートに、いるんでしたね」

「君、この頃マドンナにも、さっぱり顔を見せなくなったな。あけみの奴が君をいじめたくって、うずうずしてるぜ。ハハハハ」

佐戸崎はポケットから煙草を一本、引き抜きライターをカチカチ鳴らしたが、つかなかった。ポケットのマッチを手探りながら、ふと傍らの小机の上に置かれたマッチに目をとめた。

「そうですか。じゃ、行って見ますか」

「俺、暇で困ってるんだ。細かい仕事でもないから何かあったら手伝ってやるぜ。こっちへ少し廻してくれないか」

「イヤ僕の仕事なんて、とても安く、ばかばかしいもんばかりですよ。数で、こなしてるんですから」

「それが存外バカにならないもんだよ。稼ぐに追いつく貧乏なしだからな。まあ、せいぜい稼げよ。そのうち、タカってやるからな。そうだ、ちょっと一万円ばかり出せよ。今夜の飲み代だ」

岩見が気軽に一万円を出すと、佐戸崎は無難作に受け取ってサッサと帰って行った。

——何だ、金をせびりに来たのか——

岩見はホッとしたが、その時、小机の上のマッチに気がついた。吟子の店のマッチで、

十一時、TEL

吟子の字で書いてある。メルシーという店の名前と電話番号だけのマッチだが——

しまった！ これを見られたかな？

不安の影が大きく浮かんだ。だが、どこにでもころがっているマッチの一つである。

十一時、TELという字だけでは何のことも分らないだろう。しかし勘のいい佐戸崎のことだから、これだけでピンとくるかもしれない。問題は佐戸崎が、このマッチの文字を見たか否かである。

しかし、いまさら、どうにもならないことだった。

その夜も岩見は吟子の店に顔を見せた。

毎晩のように来るが、岩見は、いつも、とり澄ました顔をしているのだが、今夜は時々吟子の方をジッと見ていて、何か話したが、っているような素振りだったが、昨夜アパートへ泊まったばかりだし、今夜は、やめようと

思つて無視していた。

しばらくして岩見は帰ったが、帰りがけにも何かもの言いたげにしていたが、

——今夜はダメよ——

という顔で吟子は、そっぽを向いた。

十一時すぎにカンバンになって、吟子は歌舞伎町から新宿駅へ地下道をわたって小田急に乗り、代々木八幡で下りて、アパートに帰った。

今夜は酒の量が、いつもより多かったので酔いがパーッと出て来た。部屋に入ると、すぐキッチンへ行って水を一ぱい飲んだ。

その時、部屋へスッとしてくる人影を見た。

「だあれ？ 岩見さん？」

返事がないので部屋へ入って見て、アッ！

と思わず悲鳴に似た声を立てた。

「岩見でなくて悪かったな」

佐戸崎が凄惨な形相で迫ってきて、いきなり吟子の頬をピシッと殴った。

「痛いッ！ 何すんだよッ」

「このアマッ！」

ピシ、ピシッと往復ビンタをくらわした。

恐怖に脅える吟子の髪を掴んで、グイと仰

向けにし、上からかぶさるようにして接吻した。吟子は避けようとしたが、両手でガッチリ顔を抑えて許さなかった。

「何で俺から逃げた」

「嫌いだからさ。大嫌いだもん」

「岩見は好きか」

「好きよ、大好き。惚れたんだよ」

「フン、あんな変態野郎のどこがいいんだ。お前はサドなのか」

「そうよ。あたしはサドの女よ」

「サドは俺だ。サド崎と言われた俺だ。サドの女ならイコール俺の女じゃねえか」

「フン、何を寝ごと云ってんのよ。サッサと帰ってよ」

突然、佐戸崎は吟子を押し倒すと、スカートを乱暴に捲くりあげた。両足をバタバタさせるのを抑えつけてパンティに手をかけると引き裂くように下へ引っ張った。

「アッ、何すんだよッ。大きな声あげるよ」

「構わねえ。いくらでも、わめけ！」

膝のへんまで下げたところで、片手で器用に自分のズボンとブリーフを脱いで、上からのしかかった。

「イヤッ、イヤだッ！」

いろいろなものを、ずり下げるのに忙しか

った手があくと、すぐさま吟子の頬ぺたを殴った。

「痛いッ！」

「もっと、わめけッ！」

と又、殴る。

吟子は観念した。

佐戸崎は上から吟子を睨みつけながら、息遣いも荒く、大きく震動をくり返した。

「どうだ。岩見と、どっちがいい？」

吟子は目をつぶった。

「どうだ、どうだい。これでもかッ。どっちがいい？ あんなヤツと、どっちがいいんだッ！ ホラッ、どうだい！」

野獣と化した男の下で十分間、吟子は諦めていた。

佐戸崎はとどめを刺すように、身体の奥の方で、秒きざみに……した。

「フフフ、ほんとの男の味が分かったろう」

「済んだの。済んだら帰ってよ。もう来ないで」

「どうして俺を、そんなに嫌うんだ。俺は、お前が好きだ。結婚してやってもいいと思ってる。ほんとに好きなんだぜ。それだけに、裏切られたと思ったらカーッと、きちゃったんだ。さっきは、お前を殺してやろうかと思

「たぐらいたせ」

「いいから帰って。あたし、疲れてんのよ」

「フフフ、帰れと言われちゃ、帰れねえな。」

今夜はタップリ可愛がってやる」

「あたしはあんたの女でも何でもないわよ」

「じゃ、何で俺に身をまかせた」

「一度や二度、寝たからって、それが何だって言うのよ。ただ、それだけのもんじゃないの。うぬぼれんのも、いい加減にしてよ」

「生意気、言うなッ」

佐戸崎は、また手を出して吟子を殴った。

その夜、佐戸崎は四回も吟子を犯した。

男の S と M

岩見は昼間、出版社をグルグル廻って絵を届けたり、画料をもらったり、次の原稿依頼を受けたりして、かなりくたびれた。

最後の出版社の編集の男と食事を終ったあと、バーに誘われたのを断って、待ち兼ねたように吟子の店へ行った。

「よう、待ってたぜ」

吟子の前に佐戸崎が腰かけていて、ニヤニヤ笑っていた。

瞬間、岩見は、いままで苦心して築いてき

たものが音を立ててガラガラと崩れ落ちるのを感じた。

「あそこへサッパリ御無沙汰だと思ったら、ここへ鞍替えしたんだな。ハハハ」

「僕、今日は失礼します」

「一寸、待て。俺も帰るよ。話がある」

佐戸崎も、ついてきた。近くの小料理屋の隅に陣どった。

「おい、ひどいじゃないか。俺に嘘をついてたんだな。吟子と、うまくやってるじゃないか。吟子と会ってないなんて、うまく俺をだましたな」

岩見は弁解もせずに黙って苦そうに酒を飲んでいった。

「君と俺とは十年以上のつきあいじゃないか親友だろ。何も嘘をつかなくたって、ちゃんと話をすれば、分らん俺じゃないんだよ」

「すみませんでした」

「まあいいさ。ところで吟子は渋谷から越して、どこに居るんだ」

「……」

「知ってるんだろう」

「何でも小田急沿線らしいですよ」

「空っぽけるない」

佐戸崎は突然、大声を出すと、パシッと岩

見の頬を殴った。

「まだ、シラをきるつもりなのかッ」

廻りで飲んでいた人達が一斉に、こちらを見た。岩見は痛さと羞恥に真っ赤になった。

「お前が見つけたアパートじゃねえか。俺から横取りするために吟子を代々木八幡のアパートへかくしたんじゃないかッ」

吟子に頼まれてそうしたのは、口が裂けても言えなかった。そんなことを言えば、吟子に迷惑を及ぼすのは火を見るより明らかなことだからである。

「俺はお前を殺してやりたくなかったよ」

それだけ言って佐戸崎はパイと店を、とび出して行ってしまった。

ああ……

岩見は深い溜息をついた。

翌日、岩見は昼近くまで寝坊した。

家に帰っても悶々として明け方まで眠られなかったからである。

そこを佐戸崎に起こされた。

「何だ、勤勉をもってなるお前にしちゃ、だらしがねえな」

佐戸崎は昼から飲んでいるらしく、酒くさい息を吹っかけてきた。

「おい、岩見。今日は吟子のことナシをつけに来てやったんだ。起きろよ」

岩見が、とび起きて服を着るのと反対に、「暑いな、この部屋は。急いで来たから暑くてしょうがねえや」

佐戸崎はズボンを脱ぎ、開襟シャツも脱いでブリーフ一枚になった。

「おい、酒でも出せよ」

岩見は台所へ行ってウイスキーとチーズとかん詰め肉を皿に盛ってきた。

「なあ、岩見。吟子が俺の女だということは知ってたんだな。それを承知で奪ったのか」
「佐戸崎さん、男と女の仲というものは、簡単なものじゃないでしょう。そこには、いろ

いろな事情が介在して……」

「うるせい！ 四の五のごたくを吐かすな。俺の女を盗んだんだろう。そうだろう」

佐戸崎は岩見の胸倉をつかまえて、ゆさぶった。気違いのように猛りたつ、こんな男とでは、まともに話もできないと思った。

「それに違いねえじゃねえか。れっきとした事実だろう、これは」

「悪かった。僕が悪かったんです」

「フン、謝る気がおきたか。俺は弁解など聞きに来たんじゃねえ。謝るんなら男らしく素直に謝るんだな。よし、そこへ両手をついて頭を下げて謝れ」

佐戸崎は手を離すとウイスキーを、ぐいとひっかけた。

「おいっ、何してるんだ。謝らねえのか」

岩見は、あわてて床に座ると佐戸崎の前に正座して、

「すみませんでした」

と頭を下げた。とたんに佐戸崎は足をあげて岩見の頭を踏みつけた。

「この野郎っ。よくもよくも、この俺の顔に泥を塗ってくれたな。舐めたまね、しやがって」

ガイガイと踏みにじった。苦痛と屈辱のう

イメージギャラリー

『絹川文代様への夢想』

岡 たかし



ちに、岩見は陶然とした或種の快感が、佐戸崎の足と自分の頭の接触部分から、わき出してくるのを感じた。

「悪いと自分でも思うなら、もっと謝れ」

「ごめんなさい。すみませんでした」

佐戸崎の足の下で岩見は、声を詰まらせながら叫んだ。

「とにかく、二人で結着をつけようじゃねえか。このままズルズルと蔭に隠れてコソコソやるなあ、面白くねえ。どうだ、吟子を諦めるか」

これだけは岩見も返事ができなかった。

「恋愛は自由でしょう。いくら、あなたが専制君主でも、僕と吟子さんの自由を束縛する権利はないでしょう。僕は吟子さんが、ほんとうに好きなんです」

「俺だって好きだ。じゃ二人で決斗するか」

「それは最後の手段でしょう。その前に、まず吟子さんの気持が、どっちに傾いているか吟子さんの立場も考えてみるのが当然じゃありませんか」

佐戸崎の足の下で岩見は必死に抗弁した。

「ウム、そりゃそうだな。しかしなあ、吟子の奴が、どうして、お前みたいになへナチヨコ野郎に、もたれかかったのか、気が知れねえ

な。俺と、お前じゃ、何から何までダンチだろう。顔と言ひ、身体と言ひ、それから、もっと大切な、ホラ、これもよ」

佐戸崎は頭から足はずし、岩見の上に跨がるように足をひらいた。

「しかし考えて見れば、君と僕との交際も、ずい分、長いなあ。もう十年になるだろう。喧嘩もしたが、何といっても君は僕にとっては何がたい親友だ」

岩見は、不安気に佐戸崎の顔色を、うかがった。

「この男、言うことには節操がない。決斗しようかと言ったかと思うと、得がたい親友だと言う。チャランポランな言葉を吐き散らし、無軌道な行動にはしり、怠惰な生活を送っている。絵描きの中には、しばしば、こういうタイプの男を知っているの、岩見は別に珍しいとも思わないが、気まぐれで、あれほど猛り狂っていたのが急にしんみりして妙なことを言い出した。その底には、なにがあるのか？」

そういう不安だった。

「この男の腹の中で考えていることが、岩見には、わかるような気がした。どうせ、ろくな企みではないだろう。」

女 を 売 る

「どうしても吟子を諦められないんだな」

岩見は肯定する（こうてい）ように佐戸崎を正視した。

「吟子も満更、憎くは思っていないだろう」

「この男は何を言おうとするのか？」

「親友同志、一人の女のために争うのも芸のない、はなしだ」

佐戸崎は裸のまま、太股をピチャピチャ叩きながら、

「よし、吟子は君に譲ってやろう」

「えッ？」

思っても見なかった言葉がとび出したので岩見は耳を疑った。

「俺がファイトを出して君と争えば、吟子は俺についてくるだろう。それは目に見えたことだ。だが、それでは君の立つ瀬がないだろう。君は命がけで惚れてるんだだろう」

「……そうです！」

「よし、じゃあ、いさぎよく俺が身を退いてやる。俺には女は、いくたりでもいる。俺の目から見れば、吟子はその牝の中の一匹にすぎないんだ。ハッハハハ」

佐戸崎は不敵に笑った。

吟子を「牝」と罵られたことに憤りを感じたけれども、彼が譲歩するという言葉に免じて我慢することにした。

しかし、腑におちないことを言い出したものだ。この男は人の欲するものを横から奪い取るのを唯一の楽しみとしている男だ。女のことでは譲歩することなどは絶対あり得ないことなのに……

岩見は半信半疑で聞いていた。

「たかが女一人で、長年の友情を失いたくないんだ、俺は。どうだい。俺が、これほど言ってるのに君は嬉しくないのか」

「そ、そりゃ、ほんとうなら、こんな嬉しいことはありません」

「俺の友情を恩に着るかい」

「それは、もちろんです。ありがとうございます、佐戸崎さん」

岩見は深くこうべをたれて感謝した。

「だが、ひとつだけ、ちょっとした条件がある。吟子は俺の最も気に入った女だ。しかもそれを君に横取りされたのは身を切られるより、つらいことなんだぜ」

「よく分ってます。条件とは何ですか？」

「なに大したことじゃない。俺は、いまちょっと金が必要なんだ。貸してくれないか」

「いくらぐらいですか」

「サアな、二百万と言いたいところだが」

佐戸崎は乱雑に散らかった部屋の中を見回して、

「親友の君のことだから半分の百万でいい」

「——ようやく本性を露わしたな。散々恩着せがましいことを言ったのは、金を出させるためだったのか——」

「別に大した額じゃないだろう。仮に君が僕に吟子を譲るとしたら、二百万以上を吹っかけてくるだろう。それでも俺は出すぜ」

「冗談じゃない。命を賭けて惚れた女を金で売れるか！ 女を、くいものにしていて佐戸崎の下司な根性を軽べつする——」

女神とも讃うべき吟子さんを、まるで奴隷商人みたいに売ろうというのだ。岩見は力するほど腹が立った。

「しかし、この男に非を説いても分かるような男じゃない。自分が金を出すのを惜しむために言ったと邪推するだけだ——」

岩見は、むしろ佐戸崎を可哀想な男だと思つて、ジツと見つめていた。

佐戸崎の方も狡猾な目つきで岩見の顔色をうかがっていた。

「イヤ、こまかい金を稼いでいる君にとって

いますぐ百万、出せと言っても無理かもしれない。とりあえず半分でもいい、五十万だけ出せよ。あとは月賦で十万ずつぐらいでも払えばいいんだ」

「——フン、人を馬鹿にしている——」

岩見は株券や債券などで四百万は貯金しているのだ。

「吟子さんを金で買うというのは、吟子さんを冒瀆するようで、吟子さんには済まないが、この際、それが一番、円満な解決策かもしれない——」

岩見は、そう考えて、

「分かりました。五十万で、いいんですね」

「おいおい、五十万は即金だよ。あと五十万は月々十万ずつ。いいな」

「結構です。四日、待って下さい。必ず五十万、お渡しします」

債券を売るにしても四日間、かかる。

「四日か。今日というわけにはいかないのかい。今日、銀行に行つて——」

「銀行の預金は、そんなにありません」

「——この男は、株券さえ持ったことがないのか。三十六にもなつて金は銀行だけにあると思つている哀れな男だ——」

「そうかい、借金するのか。悪いな。まあい

いや。君の腕なら、せつせと稼げば、すぐ返せるよ。ハッハハハ、稼ぐに迫いつく貧乏なしだよな。アッハハハ」

佐戸崎は条件が通って機嫌がよくなった。

「その代り、約束して下さい。身を退くと、あなたが、はっきり言われた以上、今後、吟子さんとの交際は完全に断って頂きますよ」
「アハハ、もちろんだ。男と男の約束だ。その代り五十万の借金も男と男の約束だから証文は書かないぜ。ある時払いの催促なしとしようぜ。ハッハハハ」

——この乞食野郎、五十万や百万ぐらい、くれてやる。とっとと、うせろい！——

岩見は肚の中で罵っていた。

四日後、佐戸崎は恐い顔をして、やってきた。

「もしも岩見が出し渋るようなら——という気構えだったが、札束を見ると相好を崩して「借金させて気の毒だが、あれだけの女を手に入れたと思や、安いもんだぜ」と、すぐ上機嫌になった。」

佐戸崎が何を言っても岩見は怒らぬことにきめていた。こんな気違いみたいな男と言い争ってもはじまらないのを、よく知っていた

からである。

その夜、岩見は嬉しさに胸をワクワクさせながら吟子に会った。

吟子は元気がなく、ボンヤリとした表情で人形のようにスタンドの中に立っていた。

岩見は今日はボックスに座り、吟子を呼んだ。岩見がボックスに座ったことは一度もなかったし、吟子に話しかけることさえ、めったになかったのだが、今夜は特別だった。人に聞かれては困る話だから、スタンドではできない。いつもは、はたに遠慮していたが、今夜は二人にとって重大な話なのだから、そうは言っていられない。

「吟子さん。もう彼は、あなたの前に現れませんよ」

岩見は昼間のできごとを話した。ただし五十万、出したという点には触れなかった。

吟子は喜び、人が変わったように生き生きとした表情になった。

「だけど、おかしいわね。よく、あいつが身を引く気になったわね。どうしてなの？」

当然、その問題に、ふれてきた。

「それは僕との長年の友情によるものです。それと他のことでは、いつも僕は彼に譲歩してきました。しかし、あなたのことだけはど

うしても譲れない、堅い決意を、彼に見せたのです。彼も、それを汲んでくれたのでしよう。今後、一切あなたの前に姿を見せないと約束してくれました」

「そう、よかったわ」

とは言ったものの、吟子も何か信じきれないという風にとっていた。

岩見は佐戸崎に五十万円、渡したことだけは伏せておいた。それを話せば吟子を金で買ったように思われるからだ。吟子が怒るのは当然である。そのことを話せば、佐戸崎が身を退いた理由の、一番具体的な条件として、納得がいくかもしれないが、しかしそれは話すことはできないのだ。

「ほんとうです。吟子さん、信じて下さい」

それだけしか、言うことができなかった。

その夜、岩見は吟子と一緒に代々木八幡のアパートに行った。

ベッドに腰かけた吟子の前に座って、靴下を脱がせてやった。

吟子は、いまは何のためらいもなくスカートを捲くって岩見の前に豊かな太腿の肉づきを見せて、足を岩見の膝の上にのせて委せていた。

二本目の足は思いきり高く上げて岩見の肩

へ乗せたり、頭の上へのせたりして遊んだ。

「吟子さん！」

岩見は吟子の太腿の内側の、一番ふくよかなところに唇を当てて吸い、舌を出して舐めながら、

「あなたは、この先、どういう生活をして行くつもりですか」

「え？ 何か言った？」

「あなたは将来、いつまでも一人でいらっしゃるおつもりですか。それとも……」

吟子は太腿の太いところで岩見の顔を、はさんでやり、ちょっと締めつけて、顔が三角のようになり、太腿を弛めると、また元の丸い顔になる。また締めてやる。そんなことをしながら岩見の顔を見下ろした。

「それとも、なあに？」

「結婚する意思はあるんですか」

岩見は勇気を出して質問した。

「ああ、結婚のこと？ さあねえ、あたし考えたことないわ」

岩見の考えていたことは、プツリと断ちきられた。

「結婚するつもりがある」と言えば、「どんなタイプの人ですか」とか少しずつ吟子の意思をたしかめて行くつもりだったのが、その

とっかかりを失ってしまったのだ。

「ねえ、パンティも脱がして」

普通の男なら、とくに「僕と結婚してくれませんか」という言葉が出ていたはずである。だが、岩見のセックスが異常なものであるということは、岩見自身が一番よく知っていて、岩見はそれを非常に卑下し、羞かしいことだという意識が強かった。

——こんな自分を、結婚の相手として選んでくれるのは、むずかしいだろう——

と一人できめていた。それがために、なかなか切り出せないでいるのだった。

人は、服装ひとつをとって見ても、ネクタイが曲っていやしくないか、カフスが、ちょっと長すぎやしないか、とか、もしそうなっていると、とんでもない、みっともない気がして恥かしく感ずるものである。しかし、他の人が見れば、そんなことは些々たることで、おかしくも何ともないものだ。

人はみな、SかMの気があるので、それは程度によるものだけなのだ。

SやMの行為に出ない人でも、それを理解できるのが現代の常識人である。

だから、岩見が考えているほど恥かしいことでもないし、また吟子がそれに興味をもつ

ているのだから、思いきってプロポーズすればよかったのである。

「あの時、彼女にプロポーズしたら、恐らくOKしてくれたんじゃないかと思いますね」と後日、岩見氏が、つくづく私に述べたことでもあった。

吟子は、オーラルセックスに殊の外、熱心であった。

血の気の多い吟子は、そこに特に感度があるという敏感さを持つ女であった。

それは岩見にとっても、まことに好都合とあってよかった。

股間に顔を埋める岩見の顔をはさみ、後頭部に手をあてがって手前に引きつけ、積極的にリードして行った。

結婚のことを考えていた岩見も、間もなく陶醉の境地に入って何もかも忘れて奉仕に没頭した。

いま、岩見は一番、幸福な時間帯におかれています。

それが間もなく、破られてしまうことは、神ならぬ身の知ることはできなかったのである。

まさに「嵐の前の静けさ」という状態だったのである。(続く)